
神殿まえ広場 * 春の祭典 *

冴草みつな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神殿まえ広場 * 春の祭典 *

【Nコード】

N7827D

【作者名】

冴草みつな

【あらすじ】

ここは皆でにぎわう『神殿まえ広場』ここでは様々な人たちが買い物に、御参りにと訪れています。そこでキャンディー・ストアの双子の看板娘達も、自慢のお菓子を商っております。が、ある日突然・姉のララサが「担当区域を代わってほしい」と言い出しました。ワケを訊いても教えてくれない姉に、タバサは走り出してしまいました。「待つてろ！ララサにこんな顔させたヤツ！」と、ばかりに……。そんな双子の恋愛模様です。

レシピ

* 0 *

キャンディー・ストアの看板娘〜開店前〜（前書き）

双子ですが、やっぱり違うものでして。

ララサとタバサ。仲良し姉妹のやり取りをお楽しみ下さい。

レシピ * 0 * キャンディー・ストアの看板娘〜開店前〜

キャンディーストア。要は飴屋です。ちなみに老舗の我が家です。でもそれ、知ってるのは我が家の人間だけかもよ。——お父さま？

双子の姉のララサが、言い出したというか。打ち明けたこと自体が突然だった。

『タバサちゃん、お願いがあるんだよね』

しかも。いつもと変わらず二人、父のこさえた飴だの菓子だのを籠に詰め込み終わり、さあ行きますか——。

「行つてきます」

そう同時に父に告げ、おう！行つてこい！と見送られたばかりじゃないか。

店から出てお互いの担当区域まで、いつもこうして二人で連れ立つ。その途中。

お願いがある——。そう切り出されて、へえ、何々？などと軽い調子で受け答えたタバサだったが。

眼を大きく見開いて、思わず叫んだ。

「な、なんで？どうしたって言うのよ！急にさあ！アンタ楽しそうに担当してたじゃないのよ！」

「うん……。でもね、ちよつとね、行くのヤなのね。だから、担当区域変わってくれないかなあ？」

「そりゃ……。もちろん構わないけどさ。どうしちゃったの？いじめられたの？」

「違うけど。ごめんね、タバサちゃん。——面倒な事、言ったりして」

いいけどさああ、と言うわりにはタバサは不満顔でララサを見ている。

真っ直ぐに。けれども遠慮がちに。

見つめてくる瞳は、薄紫のすみれの色だ。タバサも姉の瞳を見返した。自分の方が色味が強い分、ララサが言うには紫紺色に見えるらしい。背の高さも一緒だから、視線も同じ高さでもろにぶつかる。ララサの方がまっげが長いせいか、多少は目じりが下がって見えなくもないが。

自分と同じ造りのはずだが、表情までもが同じとは限らない。それはタバサを、堪らなく切なくさせる。

覗き見た鏡の中の自分が、哀しそうな顔でこちらを見返してくるのだから——。

ララサはタバサ。タバサもララサ。二人は双子で、一人より二人だ。

「ララサがさあ、そういうこと言う時って。本当に自分でどうしようもない時だけだからさあ。どうしたの？言つてよ！」

ララサの俯き始めた顔を覗き込むようにして、タバサは訊いた。

「……ごめんね」

「私にも言えない事なの？」

「違うの。何て言ったらいいのか、わからないの……」
申し訳無さそうに、ララサは呟いた。その様子からこれ以上追求した所で、進展の望みはなさそうだと判断できる。

「——わかった。今は訊かない。でも、言葉が見つかったら話してくれるよね？」

「うん。もちろんだよ、タバサちゃん。ごめんね」

「いいから。でも、約束だからね」

姉妹は立ち止まって、道の真ん中でやり取りしていた。その様子に気がついた、常連客が近づいてきて声をかける。

「こんにちわ！待ってたよ！タバサ・・・に、ララサちゃん？——今日のお勧めはなんだい？」

タバサの担当する区域の、石屋のおかみさんだ。いつも元気がよくて、行動がしゃきしゃきしている。

ほとんど毎日のようにお菓子を買ってくれる。甘いものに眼がないと言うよりも、うちの店のトリコなのだそうだ。嬉しい事を言ってくれる。

「こんにちわあ！」

タバサはいつも通りに胸を張り、負けじと声を張り上げて挨拶した。

「・・・こんにちわ」

勢いに驚いたためか、やや遅れてララサも挨拶を返した。ぺこりと頭も下げて。

「——今日のお勧めはですねえ、っと。実は言い忘れてましたけど、今日からしばらくララサが担当になるんですよ。私のと少しバスケットの中味が違うんですよ！ねっ、ララサ？」

言いながらララサのバスケットを取り上げて、自分のと持ち替えさせる。

「えっと、そうなんです」

「そうかい、ララサちゃん。よろしくね」

「毎度ありがとうね、おかみさん。じゃあ、よろしくね！ララサ、私も行かなきゃ」

タバサは片目だけを素早く閉じて見せると、後は駆け出していた。ララサが力強く頷く。

はいよ、行っておいでと言うおかみさんには、一旦振り返って手

を振って応えた。

（誰だよ、何だよ、まったく、もう！！）

タバサはだんだんと腹が立って、居ても立ってもいられなくなったのだ。だから走る。

ララサにあんな顔させるヤツが、おそらくはそこに居るだろうか。

——タバサは勢い良く、神殿前の広場を目指した。そこが主に、ララサの担当する区域だ。

「あのコ、どうしたんだい？まあ、いつもだいたいあんな感じだけどもさ」

「……ちょっと、急ぎの届け物があるからですよ」

（………タバサちゃん。——ごめんね）

ララサは心の中で詫びながら、その一目散に掛けていく背を見送った。

自分と同じセピア色の、カールの強い髪がなびく。それと一緒に腰の後ろの、エプロンのリボンもなびいて見えた。

きつく結んで上げたはずなのだが、ほどけてしまったらしい。

（タバサちゃんなら、きつと。——あの人達と仲良くなれると思うから、ごめんね）

ララサは俯くのは止めにし、精一杯の笑顔でおかみさんに向き

合っ
た。

レシピ

*

0

*

キャンディー・ストアの看板娘〜開店前〜（後書き）

姉はララサ。やや、大人しい。

妹はタバサ。かなり、威勢がいい。

助け合って生きている双子の看板娘達が、恋に商いにとがんばっていきます。

よろしくどうぞです。

レシピ * 1 * 出張店〰営業中〰（前書き）

張り切ってやって来ました。

今日も稼ぐぞー！

だけじゃ、なくて・・・。。

レシピ * 1 * 出張店へ営業中へ

いいか。二人とも。うちは由緒正しい老舗のキャンディー屋なんだ。

よっく、覚えておくんだぞ！

——え。そうなんだ。今、初めて知ったよ。だってうちの売れ筋は、ほとんど焼き菓子が占めてるのに？

何だとー！じゃあ何のために「キャンディー・ストア」と、名乗っていると思ってたんだよ！二人とも！

………ただの『通称』とか『店名』？——ねえ、改名しようよ。まぎらわしいから。

ここはサンザス国のウルフィード地区。——ジャスリート公爵家の管轄地帯。

だがそれも、この神殿前広場は少し勝手が違うようだ。

流石に神殿の眼の前とあっては、管理するのは『神殿の祭司さま方』となっている……らしい。そう父からは聞いている。

サンザスの国は平和だ。平和だが色々複雑なのだ。

なにせ国を治める国王様に、市民から絶大な信頼を寄せられている巫女王さま。^{みこ}

それに抜群の政治への影響力と財産を誇る、爵位ある家のご領主様方。

そういつた面々が、凌ぎを削りあつて成り立つ国がサンザス。
これではいつ権力争いになるものやらと、気を揉む声があるのも
また確かなのだ。

ここ神殿まえ広場は市民にも広く開放されており、いつも人で賑
わっている。

神殿に祈りをささげる前に、お供えにする花や品物を求める人た
ち。それだけではなく日々の生活に欠かせない、食料やら日用品を
扱う商人達もここに集っている。

タバサ達も、その商人のうちの一人という事になるのだろう。こ
こで子供の頃からずっと、売り子をしてきたのだから。

そうは言つてもこの担当はずっとララサに任せてきたから、こ
うして来るのは久しぶりだった。

買い物もついでにと、ララサが済ませてくれていた。だからとい
つて、こうも自然と足が遠のいていたとは。自分でも驚く。

——神殿に近づいている。それにとまって、すれ違う人も増え
てきた。雑踏に紛れて、タバサは自分の足元に落ちる影を見つめな
がら進む。

（……何があつたんだろう。あのコ。ちょっと前までは、
別になつた様子もなく楽しそうに仕事に出向いてたよねえ？）

いやいや。本当はずいぶん前から、何かあつたのかもしれない。
ララサなりに対処しようとかんばつて、それでもダメだと判断し
た――。

だからこうして、タバサを頼つただけは分る。そもそもララサ
は、以外に根性があるのだ。

すぐさまタバサに頼って、面倒ごとを押し付けたりするような姉ではない。

（言ってくればいいのにさあ、もう！一人で抱え込んだりしないですよ）

タバサの怒りの原因のひとつはそこだった。何でも相談に乗って乗られて。その繰り返しで今日まで来た。それなのに。

タバサは広場の入り口にたどり着いてから、一旦立ち止まった。見上げた先には、神殿の正門が眼に飛び込んでくる。

さらに高く見上げる、その先――。丸くせり出した天井に据え置かれた玉石が、今日も眩しく輝きを放っていた。

タバサは神殿の象徴ともいえるそれを見上げながら、心の中で誓った。

（――おのれ――！絶対に！ララサにちよっかい出してるヤツめ、許さん！）

タバサは力強く、売り物の入った籠を握り締めた。そうだ。怒りの元となっているであろう、『誰か』に直接文句を言ってやらねば。

そう決心が固まったところで、いざ広場へと踏み込んだ――。

そして迷わず、広場中央の噴水を目指した。そこから少しだけ離れた、神聖獣の像の真下が商い場所なのだ。

神殿と商工会の許可も、ちゃんと取ってある。許可証も発行してもらっている。

屋根こそないが、れっきとした『キャンディー・ストア出張店』

である。

(い、よっし！)

自分に気合を入れると、タバサは行き交う人ごみに向かって声を張り上げた。

「——お菓子とキャンディーはいかがですか！神殿へのお供え用に飾り細工のキャンディーもご用意致しておりますよ」

ここでのつこりと笑いながら、父ご自慢のあめ細工をバスケットから取り出した。そのまま、高く掲げる。

「春の花々をかたどった、色とりどりのキャンディーはいかがですか！」

タバサは自分の微笑が、何にも勝る商売道具と心得ている。

それは父親から叩き込まれたのはもちろんの事、経験からも学んできた事だ。

辛気臭い顔のままでは、売れるものも売れなくなる。父のせつかくこしらえてくれた菓子を、腐らせたくはない。

モットー
目標は『毎日売り切れ・ごめんなさい』だ。

一人の年配のご婦人と目が合った。タバサはより一層、笑顔を送る。

「いかがですか？」

タバサの笑顔に釣られてだろうか。あまり愛想の良いものとは言えない婦人の顔も、わずかばかりほころんでいるようだ。

「そうねえ。他には何かあるのかしら？」

「はい。香草と薬草をほどよくブレンドした、焼き菓子もございますよ。良かったら、こちらご試食下さい——」

タバサは慣れた手順で、淀みなく他の客たちにも試食品を配り始めた。今日のは、ドライハーブと一緒に

焼きこんだクッキー。

シンプルな分、職人である父の腕が問われる一品だ。そしてそれは、父の得意な一品でもある。

さつくりとした歯ざわりが心地よく、いくらでもほお張りたくなる。しかも身体にも優しい、ドライ・ハーブ入りだ。

皆がおいしそうにほおばる様子を、タバサはニコニコと嬉しそうに見守る。

「うん、おいしいわね。これならお供え用にしても、恥ずかしくないわ。ひとつ、いえ、二袋いただくわ」

「ありがとうございます！こちらは、500ロートになります」

一番最初の老婦人が、買ってくれた。それと同時に、人だかりが出来始める。

おこぼれ目当ての小鳥たちも、舞い降り始めた。

タバサはせっせと客の要望に、次々と忙しく応えて行く――。

そんな風に――にわかに活気付いた、神聖獣の像の周り。それを黒ずくめの男たちが数人、見守っていた。

「何か。今日の嬢ちゃん、いつもと違いますね。キレイがいい、というか」

「うん。いつものララサさんとは、勢いが違いますね」

「・・・・・・」

「――あんな風に、ちゃんと笑えるんだね。ララサちゃん」

「・・・・・・」

「と、言うよりも。俺達だから、あんな風に笑えないのかもな。・
・って、さっきから黙り込んでどうしたのさ？副隊長くっかり！」
「・・・・・・・・。」

全員いっせいに、副隊長を見た。そして交互に、菓子売りの少女を見た。

そんなタバサといえば――。商いに夢中で、男達の視線にはまだ気がついていない。

レシピ * 1 * 出張店〱営業中〱（後書き）

タバサ、商人です。れっきとした。

プロですから、扱う商品には自信と誇りを持っていますよ。

そんなタバサを見守る、黒ずくめの集団。

タバサ、すっかり商いモードで気がついていません

レシビ * 2 * 出張店へ仕入れ中へ（前書き）

お疲れ様でした。の、言葉無くともねぎらい合う広場は、たそがれ時です。

——ありがとう、を素直に言えるのも商人（に限らず）のいいところですよ。

レシピ * 2 * 出張店へ仕入れ中へ

——『改名』だとう！うちはな、老舗なんだぞ！そんな事できるかつ！

へえ。それも初耳だよ。初代がさ、いかにも『まあ、あめ売ってるからあめ屋でいつか。そのまんまで』……的な安直さが感じられるのは私だけ？

私もそう思っちゃうかも。もう少うしだけでも、ひねりが欲しかったよね。

——……………う……………うむ……………。

広場の鐘が夕刻を告げる。もう、そんな時間か……………。タバサは、神殿横の商工会議所を見上げた。

時計台の下に鐘があり、会議所勤めのおいちゃんが鳴らしてくれているのだ。

しばらく見守って、響き渡る鐘の音に耳を傾けた。いつもより近くで聞こえるのも、また新鮮なものだった。

おいちゃんが手を休めたのを見計らって、タバサは右手を高く振って見せた。子供の時からこうしてよく、ララサとも手を振ったものだ。

おいちゃんもそういう子供達がいるのを、よく心得てくれている。だからこうして必ず、にこやかに応えてくれるのだ。

お互いよく働きました。お疲れ様。さ、一休みしてまた明日。――
―そう^{おれ}労い合う気持ちの込められた、儀式だと思っ。

見上げたおいちゃんは、少しも変わらない笑顔で応えてくれている。それどころか、もつとうんと優しい笑顔のような。

おいちゃんの目じりが、昔よりも下がっているせいだろうか。
タバサは、自分の気のせいではない気がした。

何だかおいちゃんが、こじんまりしてしまったようなもの。見上げた時計台が、そんなに大げさなほどそびえ立ってはいないようなもの。

（私、・・・・・・大きくなったんだね。本当に久しぶりに来たんだな、ここに）

その間に自分の体の造りも変化していたらしい。確実に。気がつかなかったただけ。

少しばかり、もの寂しい感じは否めないまま、ゆっくりと手を下ろした。

足元に落ちる自分の影が長い――。

陽が傾いてきたのだ。広場も昼間よりも人がまばらだ。市の商人達も、夕飯前の買い物客の相手をしつつ、片付け始めている。

（いけない、おつかい済ませなきゃ。あと、神殿にご挨拶も・・・・・・）

タバサは少しだけ肌寒さを感じながら、テントの張り出された方を目指した。

.....

「こんにちわ」

「はい、いらしゃい！ララサちゃん」

「………こんにちわあ」

タバサは小さく、ふふふと笑いながらもう一度挨拶した。そうだった。今日はララサとして、こちらに乗り込んだのだった。

正直な所、あまりに何事も無く仕事も終わり——すっかり忘れていたが。

いけない、いけない。まだまだ。この広場から出て、無事に家に着くまでは油断出来ない。

「今日は何が欲しいんだい？」

おばちゃんが、片付ける手を休めて笑顔を向けた。

籠にずらりと並べられた果物を見渡しながら、タバサは紅い果実を指差した。

「このリングをみつつ、と……ペパーミントとカモミールを一袋づつ。——お願いします」

「はいよ。ミントとカモミ^{トミ}ラはどうする？どっち？」

「乾燥の方で」

「まいど！ちよっと、待ってなね」

おばちゃんは腰をトントンと叩きながら、店の奥へと引っ込んで行った。あれだけ細いのに、こんなに重そうな荷を平気で担ぎ上げるのだ。

腰が痛むのも仕方なからう。

父に頼まれたものは、焼き菓子とお茶用なのだ。大量に必要なので、おばちゃんの店の物を頼っている。

生^{フレッシュ}の方は自宅の、畑から摘めばまかなえる。

もったもそんなに大きな畑ではなく、家族分採ればいい目的の

ものだ。

（うん。ここもいい香りだね。．．．．うちもいい香りだけどさ）

タバサは店自体に溢れ漂う、乾燥された薬草や新鮮な果物の香りに安堵した。その快くブレンドされた香りを、吸い込みながら待つ。

「おおー！ちびっこ、お疲れ。そして、まいど！」

背後から声を掛けられ、タバサは振り返った。

ひよろりと背の高い、見覚えのある顔に一瞬だけ考え込む。

「．．．．．お疲れ様、ルカ兄。^{にい}ちびじゃないよ、もう」

「ちびじゃん」

悪びれもせずニカツと笑いながら、ルカ兄はタバサの頭を押さえつけるように撫で回した。

「ルカにいが背が高すぎるの！」

「まあな。．．．．．何だ、元気じゃねえか」

「？」

「おめえ、ここの所元気がなかったみたいだからさ」

タバサはルカの手ひらの下で、心臓がどきり、とした。真剣な顔で尋ねる。

「．．．．．私、元気がなかった？」

「まあな。そう見えたぜ」

ルカ兄が、タバサの頭をぽんぽん叩きながら頷く。

「———なんでかなあ？」

「知るか。俺の方が訊きたいよ！」

「そっか。．．．．．心配してくれてたんだ。ありがとうね」

「べつ、別に、そんなんじゃないやあねえよ」

慌てたように、ルカ兄が背を向けた。幼い頃からの面倒見の良さは、変わっていないようだ。

それに、素直にお礼を言われると照れてすぐ、ぶっきらぼうに振

舞うところも。

ふふふ、とタバサは嬉しくなって笑った。優しい気持ちに触れて、何だか胸の辺りが温かくなる。少し、くすぐったいような。

「——お待たせ、ララサちゃん。おばちゃんもそう思ってたから、良かったよ。どうしたのって訊いても、何でも無いのってしかアンタ言わないんだもの」

言いながらおばちゃんは手馴れたように、タバサの持つバスケットに注文の品を詰め込んでくれた。

そして当たり前のように、青いりんごもおまけに入れてくれた。

——みつつ。

「………ありがとうね、おばちゃん」

「どういたしまして。うちのお得意さんだもん、礼なんていいってことよ」

おばちゃんはルカ兄と、同じように二カツと笑った。こうして並ぶとよく似ている。

ひよろつと背が高くて、赤茶色の明るい髪と瞳と。やや、切れ長の眼差しをひとなつつく細めて笑うから、ますます細くなる所も。

タバサは改めて礼を言うのと背を向け、神殿の方を目指した。

（よかったね、ララサ。あんた、ここでちゃんと歓迎されているみたいだよ。）

商人たちの結束は固い。仲間と認めたならば、面倒を看^みあう——。タバサはほつとする。しばらくご無沙汰していたけれども、みんな根本的な所は決して変わらない。それがよくわかった。

例えばこれが、『ララサ』に向けられているものだとしても——同じものを『タバサ』にも、向けるだろうから。

「あれ！？今の、って・・・？」

「おう、ちびすけ！おかえりい！」

「ただいま・・・って。もう、ちびすけでもないでしょ、ルカ兄」

「つい、な。いいじゃねえか、ちびなんだから」

「あのね・・・。兄さんが背が高すぎるの」

眼鏡越しに、弟のタリムが睨んだ。

「——なんだよう。さっきのラサも、オマエもさあ・・・」

「え。今すれ違ったのって、タバサちゃんじゃないの？！」

母と長男は顔を見合わせる。それから、タリムを見た。弟は頷いた。

「あれは間違いなく、タバサ。だって瞳の色が紫紺だったよ。——見分けようよ、二人ともさあ」

「「ええええ——！？」」

それから。なんだアイツ黙ってんなよ！だとか。何なんだよ、ラサちゃんどうしちゃったんだよう、とか。

思い思いにわあわあ叫んだ。

レシピ * 2 * 出張店〱仕入れ中〱（後書き）

フルーツ&ハーブのフレッシュ&ドライどちらもそろってます！

商うのは店主夫妻と、跡取り息子たちです。

兄は、ルカ。背が高い。かわいいものは何でもかんでも、『ちび』
呼ばわりする愛情表現の持ち主・・・。

弟は、タリム。インテリで メガネです。視力は弱いが、洞察力は
優れております。

レシビ * 3 * 店じまい〜祈願・途中〜（前書き）

はい。一段落したところで、忘れちゃいけない感謝のお祈り。

タバサは神殿を目指して、広場を駆け抜けていきます。

レシピ * 3 * 店じまい〜祈願・途中〜

——いいか。お前たち。必ず、毎日感謝のお祈りはかかすなよ！

はあい。 はあーい。

——うん、うん。こうして広場に來たら最後に、祭壇に寄るんだぞ。

何で、帰りなの？最初に『商売繁盛』をお願いした方が良くなあ
い？

——早いうちはなあ、お参りに行く人たちに菓子を売るんだよ！
お参りは客足が引いてからさ

あーララサ、見てっ！あっちでもお菓子売ってるよ！ ほんとだ
あ。買って〜。

——……………最後まで聞きなさい。お前たち……………。

タバサはたったか、たったかと小走りに神殿へと向かった。

（帰る前にはご挨拶しないと！）

——今日も無事にお客さんたちに、喜んでもらえるような商いが
出来ました。ありがとう・ありがとうございます……………。

(なんだろう、ちよつとドキドキしてきた・・・?)

タバサはそう自分で結論付けると、納得した。そのまま小走りに祭壇を目指して広場を横切っていく――。

[illegible]

いや、声を上げたのとは言うべきか。彼が少女の存在に気がついたきつかけは、自分の隣に立つ上司の視線の先にあつたからだ。

その彼女自身の可愛らしい、見てくれのせいもあるが——まあ、色々な意味と、方面で。

「お！嬢ちゃん発見！これから、祭壇に向かう模様」

27

がら言った。やや、報告口調なのも意識してのものだ。

少女から隣の副隊長を務める、ウォレーンへと視線を向ける。チエイズなりに気を使ったつもりなのだが、上司からは睨まれた。

「……………」

「嬢ちゃん、発見。どうしますう、副・隊長殿？」

「——取りあえず、チエイズ。貴様を殴りたい」

「何だよ！ヒドイな、もう！」

慌てて両手を小さく上げる。顔の横に、バンザイして見せたのだ。お手上げ——降参ですの意思表示だ。

「なあ。行こうぜ、ウォレーン？」

チエイズはウォレーンとは同じ歳で、幼馴染だ。だから上司といえど、時折りは友人として呼び捨てる。

必要と判断したならば。今がその時だ。

「……………オマエに言われるまでも無いさ」

「そうかよ。だったら、いいけどもさあ。取りあえず、そのぶつちようヅラどうにかしろよな。——嬢ちゃんにまた、びびられるだろう？女の子には笑顔！笑顔！」

俺を見習えとばかりに、チエイズはにかつと笑って見せた。ウォレーンの表情が、より一層冷ややかなものとなる。

「——チエイズ」

「ん？」

「オマエこそ。そのにやけたツラ、どうにかしろ」

「か、かわいくねえなあ！オイ！」

チェイズは叫んだ。が、あっさり背を向けられた。ウォレインは吐き捨てると、歩き出した。神殿の方に向かって。

「オマエに可愛げがあるなどと思われた方が、人として終わりだ」

なんだと、言いながらチェイズもその後に続く。

「……………ついて来る……………」

……………な、とウォレインが言うよりも早く、チェイズは遮って断言した。

「いいや。ついて行くね！でなきゃ、見ちゃいけない事態になるだろうが！」

チェイズはきっぱりと断言した。付いて行く。いざとなったら、俺がフォロー役、と。

「見てなければいいだろう。最初から」

「そう思う。我ながら。でも、鬱陶しいんだよ。その後、確実に落ち込んでるオマエと仕事する方の身にもなれ」

「——勝手にしろ」

「ハイハイ、なあんとも！どうぞデスよ、まったくよう！」

そんな男二人も、広場を横切って少女の後へと続く。不毛な会話を続けながら。

傍目からは黒ずくめの長身の男達が、まさかそんな会話をしているとは予想も付かないだろう。

そう思わず、チエイズは祈る。ましてや、自分達の腰には護衛団の証ともいえる——剣が下がっているのだから。

「・・・・・・・・」

タバサは何とも言えない気持ちで、神殿の階段を上がるかどうか迷っていた。

（・・・・・・・・何なんだろう？——行きたくない・・・・ような気がする？）

早いところ、感謝の祈りを捧げなければ、祭壇からは締め出されてしまう時刻だ。それなのに。

（もしかして、ララサかなあ。この気持ち。ここで何かあったの？
ねえ、ララサ？）

タバサは自分のものとして処理するには、説明の付かない思いに——。胸を押さえながら、ララサに問いかけた。

レシビ * 3 * 店じまい〜祈願・途中〜（後書き）

・・・何だか。言いよつの無い動悸は、双子の・女の勘といったところでしょうか。

かなり『ララサ』は、名を知られている様子です。

ウォレーン・ロウニア。副隊長。愛想悪し、自覚あり

チェイズ・ロット。愛想良し。お節介。自覚あり。

・・・・・・一応、真面目な人達です。

レシビ * 4 * 女神様のまえへ祈願中へ（前書き）

——なにやら胸騒ぎを覚えつつも、タバサは神殿の階段を上がった
ようです。

レシピ * 4 * 女神様のまえへ祈願中

——さ、お前たち。女神様にご挨拶だ。

お菓子・・・・・・・・お菓子。

——お菓子はお祈りが済んでから！

あ、ねえ！女神さま、母さんに似てない？父さんに、愛想を尽かして出て行った！

——声がでかいよ！お前たち！

（なんて、ステキ・・・・・・・・）

やっぱり来て良かった。タバサは神殿に勇気を出して一步入った所で、感嘆のため息を漏らした。それには、安堵も含まれている。

嫌な予感——。それは胸をぎゅっと締め付ける。時折り、タバサは息も出来ないほどだ。

背後から何かに覆いかぶさられて、すべてが闇に包まれて身動きが出来なくなる。

この独特の圧迫感は見逃してはならない。

うんと幼い頃——。タバサはそれが何なのか、分らない時もあった。

当然、無視して進んでしまい身をもつて学んだ。それは程度にもよるが、合図サインなのだ。

『無視してはならない。何かが起こるから――。用心深く注意しておいで』

。：。：。：。：。：。：。

だがそれもこの空間に入ったとたんに、消し飛んでしまった。流石は女神様のお膝元。そうそう悪い事も、この清らかな気配の中では起こるまい。

タバサは胸の重石おもしを、女神様が預かってくれたように感じた。思ふ存分呼吸を繰り返した。狭まっていた分を、取り返すために。

たそがれ時の神殿の祭壇に続く通路には、もうだあれも並んで順番を待っていない。

高く取られた飾り窓から差し込む光が、こんなにもやわらかく迎えてくれているのに。

すれ違ふ人達は皆タバサが今入ってきたばかりの、出入り口へと向かっている。

（えへへ。一人占め。私、女神様に歓迎されているみたいね！ちなみに、光にまで労ねぎわられて）

朝の生まれたての潔い光の中、女神様にお祈りを捧げる。そうしてから、一日を始めるのもいいだろうとは思う。

それよりもタバサはこうして、一日の締めくくりとしてお祈りするのがしっくりくる。父の教育の、習慣のせいかもしれないが。

（いくら、嫌な予感がしたからって。ねえ？）

——しかし。このタバサの勘はけっこう、当たる。どういふわけだか、自分でもわからない。

誰かご説明願いたいと、人任せにする程度には知りたいと思う。

(・・・たぶん。母親譲りつてえ、やつかなあ？ね、ララサ)

タバサは心に浮かんだ疑問を、ついくせでララサに問いかける力
タチで投げかけてしまうのだ。傍にいらなくても、いるようなもの
から。

ララサもきつと同じだろうと思う。コレは確信。双子という、根
拠のない自信によるもの。

光に誘われながら、タバサは祭壇へと進んだ。光がひときわ差し
込んで祝福しているかのような——女神像を指す。
なるべく、もったいぶって、ゆっくりと。

女神様の御前に来ておいてご挨拶も無く立ち去るなんて、流石の
タバサにも出来なかったのだ。

商人の風上にも置けないだろうし、夢見が悪い気がする。

(まあ。女神さまは私くらいがお参りしなくても、怒ったり気に掛
けたりなんてしないだろうケド)

気持ちの問題だ。この広場で商いをさせてもらっている身として
は。

なによりこの売り上げのほとんどは、女神サマのおかげなのだ。
タバサは一人、頷きながら微笑む。

女神像へと捧げられた足元の供物の中に、父のこしらえた菓子や

ら飴やらを見つけたからだ。

父の自慢の飴細工の花々が、キレイなお皿に咲き誇っている。

（鮮やかな・あか、淡い・きいろに、薄い・みずいろ、私達の瞳の
ような・すみれいろ）

謳うように心の中で、呟いた。唇は小さく口ずさむかのように動かしながら、目で花々を追う。

父も、自分たちも何ていい仕事をしているのだろうかと、改めて思った。

こんなにも女神様の足元を、毎日のように華やかにする手伝いをしている。

しかもこのお菓子のほとんどが後で、孤児院や参拝者に配られる
そうだ。

（いいねえ。いい仕事だよねえ。私達、最高じゃない？）

感謝でいっぱいのお気持ちを抱えるように、タバサは胸に両手を重ねて押し当てた。

そのまま膝折ると、首を垂れる――。

[illegible]
$$\begin{pmatrix} \cdot \\ \cdot \\ \cdot \\ \cdot \\ \cdot \\ \cdot \\ ? \\ ! \end{pmatrix}$$

目を閉じて、感謝の祈りを捧げていたタバサだったが、ふと背後に気配を感じた。

誰の足音もしなかったはずだった。それとも、集中していて気が

つかなかったのかもしれない。

背筋を伸ばして、緊張したまま固まる。

【——今日もご苦労様だったな。ララサ？】

ララサ、と姉の名を呼んだ。声を掛けられて、怖々と振り返る。
一体誰だろう？

不思議な響きを持つ、声音だと思った。まるで直接、タバサの頭に直にぶつかってくるかのような低い声。

だからといって乱暴でも、不躰でもない。むしろ丁寧で、礼儀正しい。

そしてなにやら、親しげでもある。

「!？」

——振り返ってみても、人は誰もいなかった………。人は。

声の調子から、オトナの男性のものだと思った。だから、てつきり振り返ったらそのような人物がいると……思うではないか。

それなのに。

「……え、えつとお？今、私に挨拶してくれたのはアナタなの？——オオカミさん？」

一応念のために、左右を見渡しながら声を掛ける。やはり、だあれもない。タバサとオオカミだけだ。

【そつだよ、ララサ。私を忘れた？】

「やっぱり、アナタなの？しゃべれるの、オオカミさん！すごい！」

目の前の真つ黒い毛並みがツヤツヤしているオオカミに、タバサは心からの賛辞を送った。不思議と怖さは無かった。

【いや、話せるのは………。すごいのは、私ではなく、】

目を輝かせているタバサに、オオカミは言いかけた。ちょうどその時、足音が響く。誰かが入ってきたようだ。

通路を膝立ちのまま見ると、黒ずくめの装束の若者が二人。こちらに、足早に向かってくる就叫んだ。

「兄上！と、ララサ！？」

「あ、ホントだ。隊長と嬢ちゃんだ」

（あに、うえ？たいちよう？）

タバサは誰が誰を、『何と』呼んだのか――。すぐには理解できなかった。

レシピ * 4 * 女神様のまえへ祈願中へ（後書き）

真っ黒いオオカミさん。もちろん、仮名です。
ウォレイン・ロウニアの兄です。

そして、チェイズのもう一人の上司でもあります。

本名は、またのちほど……。

レシピ * 5 * 女神様のまえ〜ハニー・キャンディー〜（前書き）

どっやらオオカミさんは『隊長』さんのようです。

レシビ * 5 * 女神様のまえ〜ハニー・キャンディー〜

——さ、お前たち。女神様に、この父さんのキャンディーをお供えしなさい。

うん。はい。

——お前たち、どうした………？

ねえ！やっぱり女神様、母さんにそっくりよ！父さんの『母さんは女神様だから、俺たち凡人とはいられなくなったんだよ』って言うのも、あながちウソじゃないのかも！！

——本当に、声がでかいよ！！お前たち！！

タバサは座り込んだまま、向かってくる若者とオオカミとを見比べた。

そうしていると、オオカミと同じ目線になる。タバサはしげしげと、その琥珀色の瞳を覗き込んだ。

（キレイなあめ玉みたい……透明で……それなのに、中心と縁のところはハチミツ色。うん。うちのハチミツ・キャンディーに引けを取らないわ）

タバサは何だか嬉しくなった。オオカミさんの弟も、同じ色をしているのだろうか？

それを確かめようと、眼差しを上げる。

向かってくる青年達は明らかに『人間』だ。つかつかと迷い無く、
どんとどんと近づいて来る。もちろん、二本の足でだ。

（弟、人だよね。——でも、兄弟なんだ？まあ、色々事情もあるんだろっし）

今タバサがこだわるのは、そこではなかった。それよりも、近付くにつれて嫌でも目に入る黒——。

それは、威圧的で好きになれない。昔から、どうしても。

見覚えのある黒ずくめの出で立ちに、タバサは思わず身構える。

自然、傍に置いていたバスケットに手を掛けて、引き寄せた。それを膝に上げると、両手でぎゅっと抱きしめる。

本当は——。このステキにツヤツヤ・ピカピカの毛並みにすがり付きたい所だが、そこはガマンした。

（さすがに、いきなり、ねえ？『護衛隊長殿』に抱きつくなんて………ねえ？）

失礼だろう。そうわかってはいるが、思わず抱きついてしまいそうだ。

（だって。ツヤツヤなんだもん）

より強く、バスケットを抱える腕に力を込める。

それを、不安の現われと受け止めたのか。

オオカミが、横目でタバサを窺う。タバサも同じく横目で尋ねる。

——なあに？オオカミさんは、『神殿まえ広場の護衛隊』の『隊長』さんなの？、と。

。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。

【・・・・・・・・・・】

オオカミは無言のまま、一歩前に出た。そうやって、タバサを背に庇うようにして若者二人を迎える。

「――兄上・・・・・・・・」

「隊長、抜け駆けは無いですよ」

【何がだ？チエイズ】

黒い装束に身を包んだ青年に、真っ黒い毛並みのオオカミ。

タバサは二人の制服の胸元にある、刺繍に注目していた。白と黒の蛇が絡み合う紋章を、目ざとく確認する。

間違いなく、この二人は『神殿直属の護衛団』に所属している青年だ。

（抜け駆け、ねえ。・・・・・・・・読めてきた。ララサ、あんた。こりゃ、悩むね）

性質たむの悪いのに目を付けられちゃったねえ。・・・・・・・・ララサ、かわいいものね。

そんな思いはおくびにも出さぬままタバサは、うつすらと微笑み浮かべてさえている。

だが、心中は穏やかではいらなかった。

しばらく、何か言いたそうな青年達と無言で見つめあった。

一方と目が合う。彼は愛想の良い笑みを浮かべながら、小さく手

を振って見せた。

明るい赤み掛かった茶髪。それと同じ色の瞳を、人懐っこそうに眇めて笑う。それは無条件で、好感が持てる。

——ル力兄にいみたいだ、と思った。この若者は、商人でもやっていけるのじゃないのだろうか。

「よう、嬢ちゃん。お疲れ様！」

「……………」

タバサもにつこりと、よりいつそう微笑んで応える。しかし、あえて会話はないまま進めようと思った。

だから、無言のままだ。話せば、ぼろが出るだろうと踏んでいる。タバサは唇を引き結んだ。

見た目は笑みの形に、見せてはいる。相手を油断させるためでもある。

だが実際は、目標が定まったからだ。ここに來た目的を、タバサは忘れてはいない。

（問題は……オオカミさんを、『兄上』と呼んだこっちの無愛想な若造だ！）

自分も彼に比べたらまあ、同じくらい若輩者なのだろうが。それはこの際、置いておく事にした。

要は氣に入らないのである。

女神様の御前で——。こうも偏見たつぷりで、申し訳ない。だが、間違いないと確信している。

何を根拠にしているのかと訊かれたら……『双子の』に加えて『女の』勘でしかない所は女神様も呆れるだろうが、見捨てないでいただきたい。

……………何分、未熟なものですから。

（――弟。あんたでしょう、うちのララサを悩ましている者は！）

タバサは先ほどから視線を感じて、そちらに真向かうのだが――。そうすると、すぐさま弟の方は視線を外す。

その割りに、タバサが視線を外した途端にじっと凝視してくる。声を掛けてくるでもなし、微笑み掛けてくるでもなしに。

（弟も目の色、ハチミツ色なんだね。オオカミさんと同じ。・・・
・なんか悔しい）

先ほどハチミツ・キャンディーと遜色無しと、大賛辞したばかりである。

その舌の根の乾かぬうちに、けなす事などありえない。ちえ、と内心舌打ちはしても。

こうやって、オオカミの背越しに身を潜めるようにして、様子をみようと思った。

さて、どう出るかな弟？そして、タバサ^{わたし}よ？

ララサなら、本当はこんな風に――。挑むような眼差しを向けたりなんて、しないのだから思わず地が出た。

弟がかわそうとしたその瞳を、逃すものかとしっかと思据えてしまったのだ。

視線が絡み合う。

タバサはやや勝気な色を浮かべて、満面の笑みで迎え撃つ。

沈黙の中、先に口火を切ったのは――。

「・・・・・・・・・・違うな。オマエは『ララサ』じゃないな。誰だ、オマエ？」

「・・・・・・・・・・。」

「え！？そうなのか？じゃあ嬢ちゃん、誰なワケ？」

それはこっちの台詞だよ。^{セリフ}

タバサは、笑み浮かべたままだ。

レシピ * 5 * 女神様のまえ〜ハニー・キャンディー〜（後書き）

ハニー・ハニー・キャンディー。

これも、双子の父のご自慢の一品。

さて。どうもお互い、『気に入らない』所は気が合っている（？）
模様のタバサとウォレーンです。

・・・・・・・・バトル開始です。

レシピ * 6 * 開店直前〜激励中〜（前書き）

昨日から一夜明けました。

タバサ何があったのか。．．．．．朝から元気に怒鳴ってます。

レシピ * 6 * 開店直前へ激励中へ

——ララサ？

名を呼ばれて姉がはにかみながら、頷く。

——かわいいねえ。かわいいこは、名前までかわいいねえ。

ララサはますます恥ずかしそうに笑った。

——で、アンタは？へえ、タバサ？

名を呼ばれて妹が勢い良く、頷く。

——・・・変な名前。

「・・・・・・・・ちよつとおお！どついう意味い！？」

タバサは自分の怒鳴り声で目を覚ました。アレレ？といった所である。

（・・・・・・・・なあんだあ、夢かあ。寝ぼけた・・・・・・・・。）

何せ辺りを見渡せば自分の見慣れた部屋で、ベッドの中に横たわっていたのだから。

うむむうう〜と小さく唸るような声を上げながら、タバサは思いつき伸びをした。

カーテンの隙間から差し込むお日様が眩しくて、きつく目をつぶ

つたま窓に背を向ける。

ごろんと横向きになって、思わずもう一度タオルケットを頭から被ってしまった。が、別に二度寝するためではない。

自分の見た夢を、反芻するためだ。

寄りに寄った眉間の裏側に浮かぶのは、ハチミツ色の瞳に黒髪の青年——。タバサは力一杯、枕をかき抱く。

こんな子供の頃の夢を久しぶりに見たのは、間違いなく昨日の腹立つ『弟』のせいだと言い切れる。

——自分もいい加減しつこいな、と思った。それでも。

タバサはベッドの中で両足を地団駄を踏む代わりに、じたばたさせた。

悔しかったのだ。タバサは自分の名前を大切に思っている。父と母が与えてくれた、自分の二つ目とも言える『命』。

タバサがタバサでいられる、私はタバサですという——上手く言えないけれど、『私が私』であるがための大切な名前。

（それなのに、弟め。アイツも笑いやがった。）

幼い頃から時折りからかわれたり笑われたりするのは、正直慣れっこだったがそんなのは子供の頃の話だ。

いい年して、あんな風に笑われると思わなかった。不意打ちすぎて何の覚悟も無かったせいかな、何も言い返せなかった。

そんな自分も情けなくて、悔しくてこんな夢を見たのだと思う。

だとしたら、よっぽど自分は腹が立ったんだなあ。なんて、どこかのんきに分析してもいたりする。

（おのれ）『弟』！おまえも名乗らせてやる。そして、笑ってやる！）

かっこいい名前でもな——。そう、今日の曲がった目標はこれで決まりだ。

タバサは力強く足を運びながら、につこりと笑って見せた。自分の頭をぽんぽんと、叩きながら。

「——それは、関係ないんじゃないかな。・・・タバサちゃんが、寝過ごしたりするなんて滅多に無いことだもん。何かあったかなと思っわよ。昨日は眠れなかった、とか？」

「・・・ちよつとね。変な夢見ただけだよ」

「どんな夢？」

「忘れちゃった」

何か言いたそうなララサの視線をかわしながら、タバサは前だけを見て進んだ。もう少して、姉とは道が分かれる。

「——じゃあねえ、ララサ。今日もがんばろうね！」

言いながら手を振る。そのまま、ララサに背を向けて歩き始めたタバサだったが。

「待つてよ。タバサちゃん。様子がおかしいよ。私はもう、大丈夫だから。——神殿まえ広場に行くよ」

ララサに右手首を掴まれて、振り返った。薄紫のすみれの瞳を覗き込む。

そこに見え隠れしているのは、明らかに怯えたような途惑いの色だ。

「本当に・・・ララサこそ、あの人たちに絡まれて、平気なの？」

「・・・」

「——じゃあね、ララサ。お互いがんばろう。オー！！」

言葉に詰まった姉にさっさと背を向けると、タバサは足早に突き進む。

「オー！」なんて言いながら一人、拳を振り上げて気合を入れた。

「タバサちゃん！！」

心配そうに名を呼ばれて、振り返らないまま右手を大きく振って答えた。大丈夫。大丈夫だって！

そのまま昨日と同じように、駆け出す。今にも、ララサが追いかけてきそうな気配だったから。

「タバサちゃん」。

「ラサは昨日と全く同じように、タバサの駆けて行く後姿を見送った。」

追いかけてようと一歩を踏み出したのだが、それ以上足は進んでくれない。痺れたようにその場に立ち尽くしたまま、泣きそうな声で妹の名前を呟いただけだ。

(ごめんね。本当に——。今日は話を聞かせてね、私も……………話すから)

昨日タバサは広場に売り子に行った事については、一切何も触れずにいたって普通に過ごした。

ララサが『言葉が見つかったらちゃんと話す』と約束したから、見つかるまでは何も訊かないで待つつもりなのだろう。

そして、自分に心配かけまいとして何も言わないのだ――。

「お互いがんばろう。オー！」

いつでも自分を想って励ましてくれる妹に倣ならって、ララサも「おー。」と拳を振り上げて見送る。

いささか声が小さいのが申し訳ないなと思ったから、もう一度大きな声を出してみた。

「おゝ！」

もう見えなくなった、タバサを応援するような気持ちで拳を突き出す。

「………ララサちゃん、何やってるんだい？」

そう、遠慮がちに石屋のおかみさんが声を掛けるまで——ララサはそうやっていた。

レシビ * 6 * 開店直前〜激励中〜（後書き）

昨日は女神様の前で何があったのでしょうか、タバサよ。

『おもしろくない』ことだったようなのは、まず間違いありませんが。

タバサもララサも変に頑固ですね。決めたら貫く、というか。譲らない、というか。

——二人の結束は固いのです。

レシビ * 7 * 看板娘これからの出方に悩む（前書き）

何とか無事に商いを終えて、再びたそがれ時。

朝の勢いはどこへやら——な、タバサです。

レシピ * 7 * 看板娘これからの出方に悩む

——タ〜バ〜サ〜……………オマエはまた、癩癩おこしたんだって!?

だってえ!私の名前が『変』で『おかしい』とか言って、笑われたんだもの!そんなのってないよ!

——いいか。タバサもララサも、ようう〜つく聴けよ?大事なことだからな?

なに、が?

——『金持ち、ケンカせず。』大事な教えだぞ。商売人にとって、特にな。

どういう意味?ケンカしたらダメなの?どうして?

「——おおう!……………お疲れ、だな。ちび。大丈夫か?」
おつかれさま……………。そう力なく呟いた声だったが、ル力兄にいはちゃんと気がついてくれた。

「ちび、じゃない」

「ちび、じゃねえか」

しゃがみ込んで作業していたル力兄が、立ち上がる。まるで、ふんぞり返るようにタバサを見下ろしてくる。

「今日は何か欲しい商品モンあるか?」

タバサはまず先に無言でうっん、と首を横に振って見せた。それから答える。

「うっん。また今度で、大丈夫。挨拶しに寄ったの……」

「——これから、祭壇に行くのか？ だったら、ちょっと待ってる。な？ 俺も付いて行ってやるから」

「うっん。大丈夫だから。一人で行かせてくれない？」

「……やばくないか、それ」

「うっん。あのね、あの人たちもまさかあの制服で変な事しないよ。きつと」

「そりゃ、そうかもな。けどもさ、」「ちょっとね、確かめたいというか。訊きたいというか……な事が、色々色々あってね。だからね、心配しないでね。ちゃんと報告するから。何かあったら、逃げてくるから。——気を使わせてごめんね」

無理やりにルカ兄が言いかけた言葉を遮って、タバサはしどろもどろで説明した。

我ながら言葉の少なさに、表現力の低さも浮き彫りにされる。

「気を使っているのは、おまえの方だろうが。ちびっこ！」

「うっん、ありがとうね。昨日は」

「いや、うん。どういたしまして」

「じゃあ、また明日ね！ ルカ兄！」

・

・

そう、言いたい事だけ言うところりとタバサは背を向けて、駆け行ってしまった。

「あゝいゝつゝはゝ……。。相変わらず、まったく！」

昨日は『ララサ』のふりして、また面白がっているのかと思ったから。

久しぶりに見た『タバサ』を追いかけたのだ。弟と二人で。

そうして女神様の前で、何やら黒ずくめ集団に囲まれている奴がいるなと思ったら——自分の幼馴染だったというわけだ。

『神殿の護衛団』が、ちびっ子に何の用が？

幸い自分たちが『タバサ！』と呼び声を上げたら、そそくさと退出して行ったが。

すれ違うときに黒髪と目が合った。あの琥珀色の瞳の、さして自分と変わらぬ年頃のような若者。

何だよ？何のようだよ、何か文句あるのか？と、非を込めて睨み返したがあっさり逸らされて終わった。

「タバサ。おまえ、何しでかしたんだよ？！」

尋ねたが、タバサは『ちよつとね』と『よく、わかんない』とだけ答えると、後は口を噤んでしまったのだ。

出た。必殺 関係ないでしょう攻撃。今だ健在かよ。

く・

・く

自分から逃げるように、一目散に駆けて行った背を見送ってしまった。もっと、引き止めるなり説得するなり・・・すれば良かったのか？

勢いが良かったのは最初だけ。広場の中ほどまで行くと、明らかに遠目からでも分るほど足取りは重そうだった。

（大丈夫じゃ、ねえだろ。ちびっこ？）

「・・・・・・・・」

（でもなあ。あれは頼むから、付いてくるなって言いに来たんだろうしなあ）

う——ん、と後ろ頭をかきむしりながら、だんだん小さくなっ

ていくタバサを見守っていた。

「何ぼんやりしてるの！ルカ兄！今のタバサちゃんだろ？——行くよ！——」

はつとして——振り返る。そして視線を下げると、弟のタリムが眼鏡越しに睨んでいた。

タバサは自分の、これからの出方に悩んでいた。

一晩明けて、今日も仕事を終えて……と時間を置いた分だけ頭が冷えた。

怒りという勢いに任せて、行動をしなかった自分を褒めてやりたい。それくらいしたって、バチは当たるまい。

ちなみに怒りに任せた行動とは。

「おまえかあ！うちのララサにちよつかい出してる、不屈きモノはあ！」

「なんで私の名前でアンタに笑われなきゃならないのさ！何がおかしいのか、言ってみろ！」

そう問答無用で己の手にしている唯一の武器——ツルで頑丈に編まれたバスケットを男の頭にお見舞いする。

「……のは、想像の中だけで止めておいた。そうしてやりたいのは、山々だったがタバサとてバカではない。」

この黒ずくめ集団と、面倒ごととは是が非でも避けなければ、うちの店の存続に関わる。それはまずい。だからタバサは、父からの教えを呪文のごとく繰り返し、乗り切ったのだ。

（金持ち、ケンカせず。金持ち、ケンカせず。金持ち、けんか、せ
！ず！）

おかげで何やら釈然としないまま、うつうつと怒りを殺したせいか――何やら身体が重いつたらないが。

（・・・うん。ララサ。これは悩むね。どう説明したらいいの、ワケわからなくなるねえ）

昨日と同じ時刻。同じく女神像の、御前で。——同じ顔ぶれがそろっていた。

• •
• •
• •
• •
• •
• •
• •
• •
• •
• •

タバサを“嬢ちゃん”と呼んだ青年の名前は、チエイズ。チエイズ・ロットと言うそうだ。

何やら氣遣わしげに微笑み浮かべながら、話しかけてくれるのは

「じゃ、嬢ちゃん達は双子で・・・嬢ちゃんの方は『タバサ』って言うのな？あのだ。ララサ嬢ちゃんは何にも言っただけだった？」

うん、とタバサは声は出さずに、こくと深く頷いて答えた。お祈りの最中に声を掛けられたので、座り込んだままでいた。

立ち上がるともせずに、チエイズを見上げる。射し込む西日が眩しくて、タバサは思わず目を瞬かせた。

その様子に気がついたチエイズが、ゆつくりと肩膝をつく。まるで幼い子に接するかのように、目線を合わせてくれたようだ。間近に覗き込んだ表情はいくらか困り顔で、残念そうでもあったからタバサは思わず小首を傾げた。

「……………そつかあ」

【タバサ。私達の事も聞いていないんだね】
「……………」

こちらと同じ目線から話しかけられて、タバサはオオカミの方を見た。ゆつくりと、頷く。

そして、『私達』とは恐らくこの先ほどから黙ったまま突っ立っている、弟も含めているのだろうな。そう思ったから、弟の方にも視線を投げかけた。

だが弟の方は名乗りもせず、腕組んで押し黙ったままだ。タバサはこの若者が一番気のないフリをしていながら、それは違うと見抜いていた。

その証拠にオオカミさんの質問に答えようとするタバサに、全神経を行き渡らせて聞き逃すまいとしている。

女の勘を、見くびらないように。女は空気を読めるんですよ。いや、ホントに。

タバサは何をどう、説明したらいいのかわからず何も言葉が出てこない。

途惑ったような眼差しを、オオカミとチエイズに送る。

明らかに、この三名は落胆しているのが伝わってきた。なぜだか募るやりきれなさ、タバサの罪悪感を刺激する。

（おかしいな。なんで、こんなに私が落ち込まないやらなんのよ？説明願いたいのは私の方ですよ、皆さん！）

そんな思いさえ、伝えるのがはばかられてしまう。それでも、このままにいるわけにも行かない。

また今夜も……すっきりしない想いを抱えたままで眠って、昔の夢なんかに煩わされたくはない。
だから、タバサは口火を切った。

「ねえ。オオカミさんの『弟』——さん、さあ。昨日なんだか、私の名前を聞いて笑ったよね？なんで？何かおかしかった？」

「……べつに」

「べつに？何？」

「……」

——『弟』は、押し黙ったままタバサとにらみ合った。

レシビ * 7 * 看板娘これからの出方に悩む（後書き）

商人の鉄則のひとつでしょう。『金持ち・ケンカせず』

別に商人じゃなくとも、大事な事です。

．．．．．なかなか。なかなか、ねえ？

それができたら、苦労はしないよ。（苦笑）

タバサはけんかつ早いのです。（案外ララサもですが）

レシビ * 8 * 看板娘目をつけられる（前書き）

気になる事は、確かめよう。

タバサはいつまでも、ぐだぐだ引きずるのは好きではありません。
だから、きっぱり・はつきりさせましようや・・・。

『金持ちケンカせず』だったんじゃないのか、タバサよ？

レシピ * 8 * 看板娘目をつけられる

——ほうら。二人とも、見えるか？御輿みこしに乗っていらっしやるのが、今年の『春の乙女』様だよ。

うん、見えるよ！お花がいっぱいね、キレイね！

——そうだな。キレイだな…………。

…………どうしたの、父さん？何で、泣きそうなの？！

——お前達の母さんも、昔なあ。ああやって、乙女に選ばれて街中を祝して回ったんだぞ。

その時、ヒトメボレしちゃったってヤツ？——あ、父さん、泣かないで……！！

しばし、お互いの視線が絡み合ったまま、微動だにしなかったタバサとウォレーンだったが——。

「……別に何にもないならいいわ。私の気のせいだったのでしょう？悪かったわね、変な言いがかりつけたりして。——じゃ、帰るから」

タバサはすつくと立ち上がる。目線を合わせてくれていた、チエイズとオオカミさんを見下ろす格好になった。

「…………いや」

タバサの強く、そして潔い謝罪に押されたのか『弟』はいくらかたじろいだ様だった。

それでも、タバサの前に立ちはだかったまま除け様とはしない。いぶかしんで見上げたが、そのまま。

「な、なあに？まだ何か用なの？私、早く帰らないと・・・心配させる・・・」

父さんとララサ、そしてル力兄にいに。そこはなぜか、言いかけたがすんでのところで飲み込んだ。

何というか。彼らには知られたくない、と思った。巻き込みたくはないと、咄嗟に浮かんだ思いがタバサにそうさせたのだ。

。：：：。：：：。：：：。：：：。：：：。：：：。：：：。：：：。：：：。：：：。

いつまで見上げて視線でどいてくれと訴えても、目の前の黒壁は立ちはだかったまま動く気配すらない。

タバサが不安になって振り返ると、チェイズとオオカミさんも立ち上がった。

チェイズ・ロットと名乗った青年が気遣わしげに、タバサに語りかける。相変わらず、視線を合わせるために少し屈かがんで。

「嬢ちゃん。ウォレーンの奴の、言葉が足りなくてごめんな。コイツはこんな調子だから、ララサ嬢ちゃんも・・・」

「——チェイズ。余計なお世話だ」
「そうよ。チェイズさんが謝る事じゃないわ」

言いかけたチェイズをきっぱりと撥はね付けたのは、二人ほぼ同時だった。

「何だよ・・・二人とも」

そうは言っても、チェイズは人のいい笑みを張り付けたままだった。何てお人好しなのか。

タバサは感心した。私ならこんな友人、すぐに見捨てる。そんな友人想いの彼に免じて、タバサは踏みとどまった。

「チェイズさん、ウ、ウォレインさん？が誤解されやすいのはわかったわ。確かに、この調子じゃね。でも、私どうせなら当の本人から聞きたいわ。謝罪でも弁明でも何でもね。そうでしょ？ウォレインさん？——ララサがなあに。あのコ、どうしたの？何かあった？私に何が訊きたいの？ちゃんと説明してくれる？！」

タバサは丁寧かつ、真剣に『お願い』した。これが最後の機会とばかりに、彼に向き合ったのだが——。

「……一度にまくし立てるな」

ウォレインが、うるさそうに顎をしゃくる。その様子にタバサは一瞬かつとなったが、それもすぐに引いた。

（——うん。これは、まともに相手しても無駄・無駄・無駄！帰ろうっと。それがいいね！）

【……ウォレイン。】

「そりゃないだろ！！ウォレイン！」

今まで黙って見守っていたオオカミさんも、非難がましい声で弟の名を呼んだ。チェイズも同じく。

「私、帰ります。オオカミさん、チェイズさん、ごきげんよう」
タバサは素早く、ウォレインに背を向けると二人に挨拶した。可愛らしく、小首をかしげてにつこりと微笑んで。

ウォレインに対しては、あっかんべーだった！と舌を出してやった……のは想像の中だけが精一杯だったが、そうした。

（何に腹立てて、ぶんむくれてるか知りませんけどねえええ？
何でよ、ただの八つ当たりじゃないコレ！大方ララサにフラレたん
でしょ。ふっふんだ）

さ、帰る帰る。お腹もすいたし。そう強引にタバサは黒ずくめ集
団を走り抜けようとした。

そして神殿の入り口付近に、見知った人影に気がついてほっとし
た。それと同時に、どきっとした。

人影が昨日と同じく、ルカ兄とその弟のタリムだったからだ。ひ
よろりと長い手足の兄と、まだ小柄な弟。

大丈夫だからと先ほど告げて来たのだが、なかなかタバサが報告
に現われないのを心配して来てくれたに違いない。

この状況であつては何が『大丈夫』なのか。また要らぬ心配をか
けるではないかあ！もう。どいてよどいてよ、さつさとどいて！！
慌てふためいたが、強く引つ張られてタバサは振り返る。身動きが
取れない。

「悪い！嬢ちゃん、もうちょっと待った！」

—— 駆け抜けようとしたタバサの肩を、チエイズが取り押さえて
いた。

「待たない！ほら、もう！あんまり時間くってるから、昨日みたい
にルカ兄とタリムが迎えに来たじゃないのよ。心配させたくないか
ら、その手を放して！！」

「ごめん、嬢ちゃん。今出て行かされると、困るんだ。もう、ちよつ
と待って。な？」

「やだ・やだ！待たないー！」

「……………だよなあ。—— 隊長。副・隊長。すみません嬢ちゃ
ん『拘束』します」

【……………。】「……………」

同時に兄と弟が無言で頷いたのを見届けると、チエイズも頷く。

？

そ う み た い だ ね 。 タ バ
サ チ ヤ ン 、 大 丈 夫 か な
？

しかしどこか遠い、その会話にタバサは違和感を覚えた。驚きのあまり、言葉を掛けることさえ躊躇われた。

二人とも、こちらに気がついていない。見えていない。聞こえてもいない。こちらからは見えているし、聞こえてもいるのに。

ルカ兄とタリムが立ち去るのを、抱えられたまま見送る――。

タバサはより一層、逃れようともがいた。恐怖からではない。何か、得体の知れないものに晒されている。

その感覚がガマンならないほど、不愉快だったからだ。確かにこれは『異常』。空気がそれを物語る。

霧にまかれた様に、いいように目くらましに遭っている。そんな状況を仕方なしと、甘んじて大人しくする気などない。

「ちょっと、やめてよね！オオカミさん。何をしてくれたのか解らないけどコレ、オオカミさんの仕業ね？」

【・・・・・・・・！？】

キロリつとハチミツ色のきれいな眼まなこが、鋭く光ってタバサを射る。「そんな目で見られても。私だって説明なんかつけられないよ！でも、解る。オオカミさんの周りを取り巻く空気が、気配が違ふもの――！」

【タバサ・・・・・・・・君は、解ってしまうんだね。その上、私の声

までもその耳に届くのだね】

一瞬息を詰めてから、ため息混じりにオオカミさんは呟いた。嬉しそうできて、どこか哀しそうな響きだった。

そして、ごくごく小さく付け足された言葉を、タバサの耳は拾い上げていた。

【かわいいそうに】

かわいいそう？誰が？私が？なぜ？タバサがそう、疑問を言葉にするよりも早く。

【タバサ・フォリウム嬢。君を“春の乙女”候補とするよ】

——オオカミさんは宣告した。

レシピ * 8 * 看板娘目をつけられる（後書き）

しかし、感じ悪いですね。ウォレーン。

タバサの読みは、だいたい当たり。ただの八つ当たりです。

それはそれで、何て感じ悪いんだ！！大丈夫か、ウォレーン。
タバサのほうが、精神的に大人です。

レシビ * 9 * かつての春の乙女（前書き）

オオカミさん。オオカミですけど。オオカミじゃありません。

レシビ * 9 * かつての春の乙女

——オマエたちもいつか、あの御輿に乗る時がくるかもな……。

えええ……？それは、ないよ！父さんったら、『親ばか』ねえ

——いやいや、わからんぞ。何せ母さんの娘達だからな。

ないよ。うん、ないね。

——オマエたち。どうしてそんなに、きつぱりと頑なワケ？イヤなのかい？

イヤって言うか、ねえ。だって祭典の日は、さあ——……。

オオカミさん。彼女は自分をそう呼ぶことに決めたようだ。自分にも一応名前があるのだが。

そこは何の疑いも持たないらしく、訊かれもしなかった。この見てくれであつては、それも仕方の無い事だろう。

「兄上」「隊長」「獣」——たいていの者は、誰も自分の名を呼ぶことはない。

そして今日また新たに「オオカミさん」という、名称が増えた。それはそれで、まあ、結構な事だ。

神殿の回廊を悠々と渡る黒いオオカミに、周りの者達が遠巻きに

こちらを眺めている。

視線を感じるが、誰も構っては来ない。当然だろう。

誰も——。ごくごく一部の者しか、オオカミの正体を知らないのだから。

自分は『獣』。『聖句』に魅せられ囚われている、『聖句の徒』

——。

それが神殿内部の者達の、オオカミに対する認識だった。それでいい。例え真実は違っていても、それがいい。

辺りはすっかり陽が暮れている。——蠟燭が点され始める薄闇の中を、オオカミはたどり着いた。

その部屋を訪れる頃、決まって灯かりはまだ点されていない。それでもおぼろげに、彼女のまとう巫女装束が浮かび上がって見える。純白が月光を浴び、照らし返しているかのごとく。彼女自身が放つ、淡く優しいほのかな光で十分な気がする。

「今日もお勤め、ご苦労様でしたね。ウォレス、いいえ。……
・『オオカミさん』？」

【は。——ジルサティナ様】

くすくすと笑いながら、名を呼ばれる。そういえば、今日初めて自身の名で呼ばれた。すぐさま打ち消されてしまったが。

彼女は数少ない、オオカミであるウォレスの正体を知る者の一人なのだ。だからこうして臆することなく、語り掛けてくれる。

（……タバサ。あのコも私のことを、恐れなかった。それどこか——）

満面の笑みに恐れや嫌悪といった、陰りは無かった。ただの一点もだ！

それを思うと「オオカミ」の「ウォレス」の胸も、今更ながら高鳴る。それは多分。心を動かされたのだ。あの少女に。

それをきちんと伝えられなかった事が、悔やまれる。ありがとう、タバサ。私に驚いて逃げ出さずにいてくれて。

ジルサティナはその光が完全に絶たれてしまう前に、蠟燭に手をかざす。

命令口調でありながら、たゆたうように謳うような調べだった。ウォレスは腰を落ち着けて、その様を眺めていた。

あまり多くはない蠟燭だったが、炎が点されると室内がぐつと明るさを取り戻した。

「——今日は大変だったかしら？あのコ、元気がいいから」

「あら。なぜ謝るのかしら？ ウォレーン——あの子もいい子ですもの。大丈夫。あのコもそのうち分るわよ」

ウォレスは苦笑する。 見ているこちらがハラハラしてしまうくら

い、不器用な弟の言動は自分自身も覚えがあるからだ。

「まあ。年頃の男の子は、誰でもあいつた時期があるものでしょう。——ただ、ちよつと……ウォレーンは平均よりは、遅い方かもしれないけれど・ね？」

笑いに揶揄を含みながら話すジルサティナに、ウォレスは多少居心地の悪さを味わう。

彼女は知っているから。ウォレスも十一、二歳の頃だったろうか——に、小さな女の子の名前を『変だ』とからかって、泣かせたことがあるのを。

【問題はそこです、ジルサティナ様。アイツはもう、身体はいい大人なものだから。あのような言動は、ただの無礼にしか他者の目には映りません】

「まあ。そうお？そう、かしら？まだまだウォレーンは、十代じゃない？充分、子供じゃないの」

【……十八です。じき、十九になります。世間はそうは見えてくれません】

「まあ。もう、そんなに大きくなったの？確かに背は伸びたけどね。そうお」

驚いたように目を見開いてから、ジルサティナはまたゆつくりと微笑んだ。

ウォレスは苦笑するしかない。この御方にかかつては、自分もまだまだ幼いままに違いない。

「では、ウォレス。貴方はもう、二十歳を超えていましたね？」

【はい。じき、二十二になります】

初めてお会いしてから、もう十年という歳月が流れていた。まだ護衛団の訓練が終わらぬ内から、お仕えするようになってから十年。確かにそれだけの歳月が、お互い平等に訪れたはずだった。それ

でも、彼女はあの時と変わらない。

少女のような線の細さとその容姿は、三十路を半ば超えたというのに全く衰えていない。

自分たちよりも一回り以上も年上なのだと聞かされて、驚いた事を今でも鮮明に覚えている。

「まあ。本当に子供の成長は早い事！びっくりするわねえ。本当に・
・小さな女の子をからかって泣かせてしまった事を悔いて、私に相談しに来た子がねえ」

あまりにしみじみとジルサティナが言うので、ウォレスは顔が火照るのを感じた。

だが、顔面が毛皮で覆われているおかげで、気づかれていないようだ。

【もう、時効でしょう。忘れて下さい・・・・・】

「イヤよ。だって、大事な思い出ですもの。ウォレスも忘れちゃダメよ？そういうのは、忘れてしまっではいけないものよ」

アメジスト

紫水晶のような瞳が眇められて、自分を見下ろす。そこにはもう、からかいの色は見当たらなかった。

その代わりに温かく見守るような、気遣いが感じられた。

彼女が小首を傾げて、獣身である自分と目線を合わせようとする度に、額の紫水晶も一緒に揺れる。

彼女の豊かに波打つセピア色の髪をまとめるのは、巫女の証でもある額飾りだ。
サイクレット

片方は白蛇——英知の証。もう片方は黒蛇——魔術の証。二匹の蛇が舌で抱え持つのが、彼女の瞳と揃いの紫水晶なのだ。

その石自体が持つ高貴さが、彼女の巫女としての階級の高さを充分に物語ってくれている。

まるで彼女自身が『女神』そのもの。事実この国の神殿に祀られ

ている『豊穰の女神』の像そっくりだと、噂する物も多い。

『豊穰の女神』——デルメティア。それは別名『春の乙女』とも呼ばれ、慕われている。

女神は下界に下りる際は、可憐な少女に身をやつして街中を祝福して回るそうだ——。

その言い伝えを元に、春の祭典には毎年それに相応しい乙女が選ばれる慣わしなのだ。

（それなのに。あのコは——。何のためらいもなく、断ってきた……。）

かつてはジルサティナ様も、その役を引き受けたそうだ。残念ながら自分はまだその頃、幼くて記憶が無い。

【ジルサティナ様も——。水鏡であらかたご覧になっていらしたでしょうから、ご存知とは思いますが。今年の『春の乙女』候補は本日までで——二人が上がっております。しかし、その両方が乗り気ではありません】

乗り気じゃないどころか。一方からは、はつきりと断られた。ありえない……。

娘達を是非『春の乙女に』と望んで、多額の寄付金を寄こそうとする家まであるというのに。

それほどまでに誉れな事なのだ。『春の乙女』に選ばれるという事は……それがわかっていないのだろうか？

（まあ……わかつちやいないか。あの様子では）

思い出して、ウオレスは少し唸ってしまった。

『私その日は稼ぎ時だから！お断りします』——そうタバサが、あまりに即答するものだから。

「ふふ。まあ、まだ時間はあるから。ララサかタバサにうんと言わせるもよし。また別の乙女を譲かせるもよし。——ウオレスにウオレン・・二人のうちどちらが『春の乙女』に、微笑んでもらえるのかしらねえ？楽しみだこと」

——ジルサティナはそう、心底楽しそうにはしゃいだ声を上げた。

レシビ * 9 * かつての春の乙女（後書き）

タバサよ。思わずつつこみたくなる様な、迷いなのい断りつぷりに、オオカミさんもびっくりしているぞ。

どれだけ、乙女度低いんだ君は。商人だからなあ。

彼女がうんと言つのはそこら辺を、納得してからでしょう。それでもオオカミさんこと、ウォレスはタバサを候補に上げているようです。

レシピ

*

10

*

候補に上がった乙女達（前書き）

今日も一日、色々あったよ！くたびれた！な、タバサです。

——おまえ達だって、女の子なんだから。憧れたりしないのかい？

ん〜ん、あんまり〜。わたしも、あんまり〜。

——そうなのかい？ああやってキレイに着飾ってみたいとは思わないのかい？

．．．．．キレイだとは思うから、見ているのは楽しいけど。

動きにくそうだから、着たいとは思わない。

——．．．．．まあ。まだ、二人とも幼いものな。でも、そのうち．．．
．．．．．きつと．．．．．きつと．．．．．

きつと？

夕飯も明日の準備も済ませ、タバサは自分の部屋でララサが来るのを待っていた。

ベッドに背を預ける格好で、足を投げ出して。

そうやってベッドに横にならないでいるから、タバサはかろうじて起きていられる状態だった。

気を許すと、かくん、かくんと首が——。前に後ろに倒れてしま
う。

（ララサまだかな。もう、私．．．眠たいよお．．．．．）

『神殿前広場・黒ずくめ集団対策！商い会議』——双子の本日の議題だ。ちなみにタバサが名づけた。ララサはしばらく沈黙してから「・・・・・・・・ちよつと、違うんじゃない」とだけ言った。

ララサが用意してくれたミルクティーを受け取る。たあつぷりのミルクがほとんどを占めるミルク・ティー。香り立つ湯気からくゆるのは——嗅ぎ慣れた優しいもの。

「あ。うれし。カモミラ入り？」

「そう。ハチミツも」

「・・・・・・・・ハチミツ・・・・・・・・」

「？どうかした、タバサちゃん」

ララサが隣に腰を下ろす。同じようにベッドにもたれ掛かり、足を投げ出しながらタバサを覗き込んだ。

「・・・・・・・・ララサも知ってると思うけど。あのハチミツ色の瞳をした、兄弟。思い出したら地味にムカついてきた」

「うん、タバサちゃん。琥珀色の瞳の、あの兄弟ね。一体、何が・・」

「聞いてよー聞いてよー！！あーもー今日の私は偉かった！！」

「タバサちゃん、こぼれちゃう！熱いよ、気をつけて！」

タバサは眠気を吹き飛ばして、昨日から今日にかけての経緯^{いきざつ}を話した——。

「・・」

「・・」

「——とか、なんとか。訳のわからないこと、たくさん言われたけど。ララサも『春の乙女』候補に上げられた、やっぱり？」

「・・・・・・・・うん。ウォレーン、に。候補に上げるから受けて欲しいって」

(ウォレーン?)

タバサはララサが、『弟』の名を呼び捨てたのに軽い違和感を覚えた。

何だろう、この何となく——もやもやしたものが胸の辺りを占めるこの感覚は?

タバサには上手い具合に表現する言葉も、態度も見つからなかった。だから、やり過ぎるように何にも感じないフリをして、ララサに向き合うしかなかった。

「——へえ。もしかして……アイツがララサにイジワルしているから、神殿前には行きたくなかったの? 大丈夫? 何か、感じ悪かったからびつくりした。お兄さんの方は礼儀正しかったのに。オオカミだけど」

「え!？」

「ん？」

ララサが見開いた目をタバサに向けた。

「——オオカミ? お兄さんの方が?」

「うん。真っ黒でツヤツヤのぴかぴかの毛並みがステキだったよ。

間違いなく『兄上』・『隊長』って呼ばれていたよ」

「そうなの」

「しかし似てない兄弟だね。オオカミさんと人だもんね。——弟は背が高く、目つきがちょっと鋭いかな。まあ、護衛団所属だしね。眉も目もややつり上がり気味なせいかな、顔立ちは凛々しい……方かな? それで、オオカミさんとお揃いのハチミツ色の瞳で、髪の毛は真っ黒だった。ちょっと長めで後ろで束ねていたよ。ここら辺は似てるね」

ララサはただただ黙って、タバサが一生懸命言葉を探しながら説明するのを聴いていた。とても熱心に聴いてくれているので、タバサもあまり得意ではないがウォレーンを描写するようにと心がけながら、身振り手振りも交えながら話す。

「——ね、タバサちゃん。ウォレーンの話し方はどんな感じだったの？」

「えらそう。ぶつきらぼう。あんまり長くは話さないで、短く切り上げられた。『べつに』『いや』『一度にまくし立てるな』とだけしか、話していないよ！そういうえびー！」

タバサが思い出して再び悔しさから、大声を上げる。その横でラサが腕組みながら、妙に納得したように呟いた。

「うん。やっぱり、ウォレーンだわ。間違いなくそれは、ウォレーンだね」

「……何てヤツなんだ」

タバサは呆れたように呻いた。ララサと同じように、腕組む。

く・

・く

姉妹達はこれからどうして行こうか、兄弟の申し出はどうするか、商いはどう対処していこうか……。

——から、久しぶりに会った幼馴染の兄弟や、担当区域が代わったおかげで久々に会うお得意様達の話や、昔の思い出話へと実にくるくる。——くるくる、くるくる話題を変えながら姉妹は話し込んだ。

本題からそれつつ、行きつ戻りつはいつもの事だ。よって、まとまったようできて、話は一向にまとまらず終わりが無い。

「あのさあ。ララサ。この事は父さんにまだ、ナイショにしておく？」

「うーん。多分、父さん泣くほうに1000・ロートだよな」

「だあよねえ、嫁に出すよな騒ぎだろうからさあ。目に浮かぶ」

ちなみに1000・ロートあれば、うちの焼き菓子が三種類詰め合わせ（全部で9個入り）がお求めいただけます。はい。おまけに

キャンディーもお付けしますよ。と、営業トーク思考なタバサ。おそらくララサも。

夜も更け——明日に備えて、もう寝ましようか。となるのが、いつもの二人だった。そして、それは今夜もだ。

まとまったようできて、まとまらないままに対策本部はお開きにする事にした。

続きはまた明日。——明日もあるのだ。何より対策本部長のタバサがもう、起きていられそうもない。

「タバサちゃん。あのね。あんまりオオカミさんに、べたべた引っ付かない方がいいよ、絶対」

先にベッドもぐり込み、もう半分以上眠りに入っていたタバサに、ララサは囁きかける。声を潜めているのに、ずいぶん力強い響きにタバサは揺り起こされた。

「——ふえ……。？あ、うん。わかった。曲がりなりにも食べ物売ってるんだもんね。」

私達。オオカミさんに触れた手で、お菓子売ってたらお客さんが不安がるかもだもんね。

だから。一日の終わり。商売が終わってからにするから。あと人目にも気をつけるよ」

「う、ん。まあ。それもあるけど……。とにかく。必要以上にべたべたしない方がタバサちゃんのためだと思うな」

「——……。う、ん。わかったあ。おやすみね……。」。

「。。。。。。」

マズイ。ララサが思っていたよりもずっと。ずっとだ。タバサは『鈍い』。そっち方面だけ、異常に。なぜか。

（タバサちゃんは純粹だからなあ。さすが私のかわいい妹。大事に出来ない人には、触れて欲しくない――）

くうくうと寝息を立てて眠るタバサを見つめ下ろしながら、ララサは深いため息を吐いた。

レシビ * 10 * 候補に上がった乙女達（後書き）

——女子の話というものは、脈絡も無く、まとまりも無く、止めども無いものではないでしょうか。

それでいて、妙々に核心に触れていたりする事も。

あるような。ないような。——気がします。

レシビ * 1 1 * 一歩オトナの部下の人生論（前書き）

——さて。ちょっとこちらでも反省会です

今は大人ぶっている誰かさんも、ウォレーンと何ら変わりませんでした。

だから見ちゃいられない気持ちなのです。

——おう、おかえり。つて、どうした！？タバサ？何泣いてるんだ

・ ・ ・ ・ ・ 父さん。『金持ちケンカせず』むずかしいよ・ ・ ・ ・ ・

——誰かとケンカしたのか？ルカか、タリムか？

ううん。よく、知らない男の子。最近神殿前に行くといふの。そしてなんか、わかんないけど、イジワルされるの

——そっか・ ・ ・ ・ ・。それは、困ったな（つて、父さんも身に覚えがある・ ・ ・ ・ ・かもだよ。娘よ）

父さんに言われたから。教える守ろうと思って、からかわれても髪を引っ張られても、無視してガマンしたのに・ ・ ・ ・ ・

【ウォレーン。タバサ嬢に対する態度を少し考える。——ジルサテイナ様もご覧になつてゐるのだぞ？】

「・ ・ ・ ・ ・兄上」

【まあ・ ・ ・ ・ ・せっかく覚悟を決めたのに、ララサ嬢が現われなかった落胆も分らないでもないが】

それだけを告げると、兄ウォレスは退出して行つた。

兄はいつもそうだ。ウォレーンを長々と問い詰めるようなマネは

しない。

恐らく反省を促がされるよりも、ずっと効果的だと知つての事だろつ。

この兄にはこうやって、事あるごとにささやかながらも敵わない
 と思い知らされるのだ――。

• • • • •

護衛団の控え室の扉を開けた途端、チエイズは怪訝そうに眉をひそめた。

突っ立っていたウォーレンと、真正面からぶつかりそうになったからだ。

「——何才マエ、どうした？危ねえ」

[illegible]

「こっちの台詞だ！ 蠟燭に火くらい灯せよ。暗いだろ……。ま、オマエは夜目が利くからいいのか」

言いながらチエイズは持ち歩いてた燭台の火を分けて灯した。相変らずなウォレーンの態度だったが、チエイズはその声がいっつもより覇氣はきが無い事に気がついてた。

は、は〜〜ん。と思い当たるのは、先刻の祭壇でのやり取りだった。

それに先ほど通路で『オオカミ』のウォレス隊長とすれ違った時に、挨拶を交わしていたというのもある。

あまりこつちに顔を出す事のないお人だから、何用であつたかは容易に察しが付いた――。

「もう交代の時間だから俺、帰るわ。——腹も減ったし、ルシンダの店行くんだけど。オマエも行く？」

「い
や。
い
い」

ルシндаの店――。そこはチェイズをはじめ、護衛団の多くの者

酒場というほど独特の雰囲気のお店ではないから、そんなに深酒しているヤツも比較的少なく、心置きなく空腹を満たせる。

そこなら礼儀知らずに容赦のないウォレーンでも、連れて行つても大丈夫だから誘つたのだが断られた。

いつもの事だから、別段気にもならない。が、明らかに――落ち込んでるのが伝わってくるヤツを放っておけない。

それがチエイズの性分なのだ。お節介でしかない自覚があるのが、哀しい。それでも。

「何だチエイズ？また、どうでもいい事だろう」

「なにおく。まあ、聞け。今日嬢ちゃんを捕獲……もとい拘束してわかったんだが。」

そこでひとつ、もったいぶったように咳払いをする。

「——タバサ嬢ちゃん、思いの外抱き心地がいい！ありや、着やせするんだな。つてえことはだな！ララサ嬢ちゃんも……。」

「何だよっ！嬢ちゃんが暴れるから、悪いんだって。こっちが氣を使って抱えてるのに、変にじたばたもかくから！」

「黙れ」——そう「問答無用」で拳をお見舞いされた。

[illegible]

大げさに頭を抱えてうずくまっていたチエイズは、のろのろと立ち上がる。

「あゝ．．．。そつか。そだな、そういえば。あれだけララサ嬢ちゃんにべたべた抱きつかれてりゃな。いゝいよな。」

「・・・・・・・・」

無言で胸倉をわし捕まれ、チエイズは締め上げられる。

「わかった、わかった、わかりました！もう二度とこんな事口に・
し・ま・せ・ん・って！」

チエイズは胸倉を掴み挙げられながら、両手も目線も小さく上げた。

はいはい、バンザイだって。降参だって。——そんな意思表示をこめて。

『オオカミ』のウォレス隊長を、ここにはいなかったが何となく探った。

（女子供は本当に動物好きだよな。役得狙って行くぜ、隊長もさゝ。ってか。隊長も絶対、ウォレーンと同じ事で悩む事になりはしませんかねえ？）

それは。絶対の自信を持って言い切れる、予言——いや、違う。断言だった。

（高を括っていられるのも今のうち・・・ま。それはそれで、見ものだな。見てみたい！隊長の狼狽する様を！！）

その余裕を切り崩す可能性に溢れている、少女の笑みが浮かんだ。双子とは言え、氣質が若干異なるのだろう。

淡く優しいすみれ色の瞳を揺らめかせるのが、ララサ。彼女に比べて深みのある青紫の瞳を輝かせるのが、タバサ。

それぞれが持つ独特の雰囲気魅力的な表情を見せるものと、チエイズは感心した。

例え同じ種類の花であろうと、その花卉の咲き誇り具合はみんな違うものなのだ、と。

雨に打たれて俯く風情も良し。太陽に向かって面を上げて咲き誇るも良し。

「何だかさ、ウォレーン？何も、嬢ちゃんタチに限った事じゃないけどさ。オンナノコってさああ、砂糖菓子で出来ているのか？！？とか、思わん？」

「……頭は大丈夫かチエイズ？少し強く殴りすぎたか」

「そうだよ！加減しろよ……って、違う！^{たと}喻えだよ、喻え！分れよ」

「大丈夫なようだな」

唐突に掴み挙げられていた胸倉を放される。チエイズは少しだけよろめいた。

「……たく、乱暴だな。部下はもうちょっと丁重に扱ってくださいよ。副・隊長殿！！」

「そう言うのだったら、上司はもっと敬え。からかったりせずに」

「では——。ところで今日もあのコですが。可愛^{かわ}らしかったですね」

「そついうのを慇懃^{いんぎんぶれい}無礼^{ぶれい}っていうの知ってるか？」

言葉だけは敬いしたが、態度は変わらないのチエイズはまたも睨まれた。だが、もちろん気にせず続ける。

「今日もさー嬢ちゃんときたら、何だよアレ。裾がふわふわしたスカートに、ひらひらひらひらした縁かがりの付いた前掛けしてさー。髪もまとめ上げていたけどさ、こっ——」

そこでちよつとチエイズはわざとらしく、右手をひらつかせる。遠い目をしながら。

「——後れ毛までが、くるくる・ほわほわしてさー！しかも、抱えてみたらあの柔らかさだろー！本っ当に俺は確信したね。——砂糖製だつて！嬢ちゃんの作りは」

せつせつと力説を続けるチエイズに、ウォレーンの視線が冷たい。だが、そんなことにはすっかり慣れっこのチエイズは構わず熱弁をふるつ。

「砂糖はふわふわなの、ひらひらなの、していないだろ……」

「砂糖、菓子！いいから聞け。聞くんだ、ウォレーン。俺の中ではそういうイメージがしつくりくるんだ。そういう、とにもかくにも甘くって……下手に扱えばすぐさま壊れちまうような所が、オンナノコを喻えるのにぴったりだろ？」

「そうか。まあ、自由だろうが、オマエは詩人にはなれないな」

「何だと！いいよ、別に。俺もう、護衛団員だし。なあ、ウォレーン？オンナノコの取り扱い、そういうものを扱うくらいの気持ちで行けや？」

「……タバサの事か」

「ん。嬢ちゃんだけに限らず婦女子全般。老若関係なく。これ大事だつて。試験に出る。もう、出ているぞ！ウォレーン」

「何の試験だ？」

「——人生の。だから線でも引っぱっておけ！」

「どこに教科書があるんだよ？」

そう呟くウォレーンに、チェイズはいたずらっぽく笑いながら、自分の胸を拳で二度打った。その後、ウォレーンの胸にも拳を突き当てる。

………

ニカツと意味ありげに歯を見せて笑うチェイズに、ウォレーンは無言だった。何か考えるところが見つかったらしい。

（お。どうやらちゃんと伝わったようだな。一安心つと。基本は優しいヤツだしな。……しかしあの調子では一生、理解されんわ……ガンバレ）

「ま、ここじゃ出来ない話もルシンダの店なら出来るってえワケだ。

さ、行くぞ行くぞ！オマエも付き合え。シャザンも多分いるだろうし。百戦錬磨のアイツに相談してみるのも悪くないだろ？」

「アイツは……いい。余計にこんがらがるだろ」

げんなりしながら言うウォレーンがおかしかった。確かにアイツはある意味、話していると疲労が増す。

「いやいや。わからんぞ？何か発見があるかもしれないだろ」

「人事だと思つて。オマエはズいぶん楽しそうなんだな」

「ああ！俺は愉快でたまらないのさ。親友にやつと春が来たのをこの目で拝めているんだぞ。その上、あの余裕たつぷりのあの人が――！いや、あの人も……。あゝ楽しみだな」と

「――それが本音か」

面白がりやがつて。

「はっはっは。さ、行くか。『双子対策本部』設置といったところだな」

「……それは何かが違うだろう」

「センス無いんだな、と心底呆れたように言うなよな。じゃ『上司の恋を見守る会』に……うつ！」

……しますか？副・隊長殿。そう最後までチェイズが続ける前に、思いっきり肘当てをくらった。

思わずみぞおちを押さえて立ち止まるチェイズを無視して、ウォレーンはさっさと先に部屋を出て行く。

レシビ * 1 1 * 一歩オトナの部下の人生論（後書き）

チエイズはいい人です。ウォレーンの扱いを心得ています。寛容ですね。

そして何気にララサとウォレーン・タバサとチエイズの役どころといひましようか。

調子は似ています。にぎやかに好奇心のおもむくままに騒ぐ二人に、冷静につっこみを入れる二人。

レシビ * 1 2 * オオカミさんの誘惑（前書き）

—— やわらかく陽光が射し込む聖堂で、オオカミさんと交渉開始です。

レシビ * 1 2 * オオカミさんの誘惑

——ララサにタバサ。その事は誰にも言わない方がいいな

だって！本当なんだよ！私達、聞こえるのよ。おしゃべりできるんだから

——うん。わかってるよ。だからこそ、二人がまだ父さんの娘でいてくれると言うならば、どうか秘密にしておくれ

．．．．．うん、わかった。

——あゝあ。二人とも母さんに似ちゃったかあ。ま。しょうがないよな。ところでどっちかでもいいから、父さんの菓子作りの才能受け継いでる片鱗はない？

見当たらないねえゝ今のところ。でも。それは、才能というより努力が占めるものじゃないの？

またまた昨日と同じ頃、同じく女神様の祭壇の前で——タバサは座り込んでいた。

昨日と違うといえば、そこにいるのはタバサとオオカミさんだけで．．．．．

彼の弟のウォレーンと部下のチェイズの姿は今日は見当たらないという事だ。

タバサは少し前と同じようにバスケットを膝に引き寄せ、ぎゅう

つと胸に抱えた。それは大切な商売道具であり、唯一の武器でもある。

それにしがみつく様に抱える事で、タバサは自分を守る事ができる気がした。こうして何かを抱っこすると・・・落ち着く。

（タバサ。ガマンだ！いくらなんでも失礼だから。うう、でも何てツヤツヤでふわふわ。触りたい。なでなで、したい。ぎゅっしたい！）

そんな想いを抑え付けるべく、タバサはより一層バスケットを抱える腕に力を込めた。

彼——オオカミの姿をした『隊長』さんは、行儀良く前脚を揃えてタバサに向き合っていた。

その背後から柔らかく射し込む日の光が、彼の毛並みを明るく際立たせているのだ。濃い闇色の毛先がぼんやりと光を含み、とても優しげに膨らんでいる。闇色がより深く艶めきを放って、タバサを誘い掛けているようだった。

（——うううゝ触りたいけど、ララサにも言われたからガマン！！）

ゝ・・・ゝ・ゝ・・・ゝ・ゝ・・・ゝ・ゝ・・・ゝ・ゝ・

祈りを捧げ終わった頃を見計らってか、足音も無く近付いていたらしいオオカミさんに声を掛けられた。

石畳に響く靴音がしなかったから予想は付いていたけれど、振り返ってみて確信できた。今日はあの護衛団の若者は来ていない。その事にタバサは少しだけ、ほっとしてしまった。

別に悪い人たちでは無さそうなのだが、護衛団独特の黒装束のせいだろうか。

制服に身を包んだ彼らに囲まれるのは、何やら威圧されているように・・・。。さすがのタバサも氣勢を殺がれるのだ。

「オオカミさん、今日は一人？」

【ああ。——今日はあの二人は来ないから。その・・・昨日は弟が不躰な態度を取って悪かったね。すまない】

二人は来ない。そう聞いた途端にタバサは少しだけ、身体から緊張が抜けた。小さくごくごく控えめに、ほうと息を吐いた。

だがすぐにオオカミさんの言葉を反芻してみて、いや？待てよ？と思った。——安心するのはまだ早いと気がついたのだ。

（今日は、ね。短い平和だなあ）

あの感じの悪さはそうそう簡単には改まるわけ無からうよ——。それを思うと、また身体が強張ってしまう。

タバサとて自分を疎ましく思っているような人間に、あのような態度を取られるのは面白いワケが無い。

いくら表面上は平静を装ってはいても、傷つかないワケでもない。それでもタバサは表に出す気は無い。

「・・・・・・いえいえ。そんな。オオカミさん、気にしないで下さいな。私は平気ですから！気にしていませんし！」

（——とかナントカ、言っちゃって。私ってば！オトナじゃん！！・・・なんちゃって）

タバサは努めて明るい声と表情でそう答えていた。それは、オオカミさんを気遣ったものだった。

（返答にもものすごく間を空けてしまわなければ、もっとオトナとして完璧だったろうになあ。まだまだ、修行が足りないな）

オオカミさんが何やら心配そうな表情をしている（少なくともタバサにはそう感じる）ので、全然！！と力強く言い切った。

ひとしきり、右手を左右にぶんぶん振って見せながら。全然っデスヨ！を繰り返した。それでもオオカミさんは疑わしそうなので、無理やり話を変える。

「それよりですね、オオカミさん。昨日は聞きそびれちゃいました。この、空気——。感覚というかはですね、やはりオオカミさん

の仕業でしょうかね？」

タバサは両手で大きく半円を描いた。その動作を何度か繰り返す。

【当たり前。やるね、タバサ嬢。流石『春の乙女』候補だ】

「そう！あとその候補なんちゃらですが、昨日、きっぱりお断りしましたよねえ？ちゃああんと聞いていて下さいましたよねえ？何で

【君の意見は受け付けません】的な態度なんですか！オオカミさん」

【誰でもいい、という訳では無いんだよ？タバサ嬢。君を既に候補と挙げてしまったからには、どうか」うん」と言つて欲しい】

「——それ、答えになつてませんよね？」

【そうかな？】

「ええ！！私の意志はまるつきり無視ですよ、さつきから。何がもう【候補に挙げてしまったから】ですか！——私に何の断りも無く、勝手に挙げないで下さいよ。その時点でまず間違いが生じていますよ・・・と言つよりもさつさと取り消して下さい。それで、早いところ違つ子を候補にして下さいよ！」

思わず膝立ちになつて、タバサはオオカミさんに訴えた。立ち上がらなかつたのは、見下ろして叫んでは失礼かと思つたからだ。

一応相手は『神殿直属の護衛団員』であり、しかも『隊長』殿なのだ。この広場で彼らを敵に回しては、何かと商いに響く。

（そうそうタバサ！金持ち、ケンカせずだったでしょう？ここはひとつ、穏便に——事を運ぼうじゃないの？ガマン・ガマン・・・）

それでも精一杯、穏やかに告げたつもりなのだが。本当なら怒鳴りたいところだ。勝手に決めるな・ふざけるな、と。

【タバサ嬢。悪いがそれはもう出来ない】

「何でっ！？」

きつぱり言い切つたオオカミさんに、タバサは反射的に食い付いていた。

” ” 出来ない” ” という単語に反応した、瞬発力の抜群さにタバサの強い不満が表れているとも言えるだろう。

【もう、候補にするよと断言してしまつたからさ。昨日聞いていた

ろう?」

「――聞いてましたけど。だから、それが何で?!?」

【神殿に仕え、護り導く者の一員として。『権限を与えられた者』の一人として。君こそ相応しいと判断したからだ。だから――昨日君を候補にと宣言申し上げたのだ。それはもう取り消しはきかないもとより私も取り消す気は無いね】

（うおう!! さりげなく権力を誇示ですか。オオカミさん。そんなもの持ち出されたら、一般庶民が怯まないワケには行かなくなるのですが。うう、卑怯な……）

「……はい」

タバサは勝手な言い分を遮りたくて、右手を上げた。

” ” はい” ” は承諾の響きではなく、意見がありますから挙手！私をさして下さいの、” ” はい” ” だ。

【……】

「はい！はい！はい！……はいったら、はいっ!!」

これで充分説明したからもう納得しない?――そんな雰囲気を見無視して、タバサはしつこくオオカミさんに詰め寄った。

【何かな、タバサ?】

「何で!! だから何で!?!? この誰に宣言しちゃってるんですか? 神殿のお偉い様方にですか。無理です。私には、無理です。だからその日は稼ぎ時!! 忙しいんですってば。そんな申請は却下して下さい!」

必死でタバサは食い下がった。当たり前だ。勝手に決めないでいただきたい。祭典の日の店は一年でも一・二を争う稼ぎ時なのだ。はつきり言って、タバサ一人でも欠けたら父もラサも倒れる。――かもしれない。

【それはもう出来ないんだ、タバサ。取り消しはきかない。さつきも言っただろう? 何せ『豊穡の女神』……デルメティア様に申請してしまったのだからね】

「……はい?」

じゃ・・・って・・・ア・レ？」

タバサはすくつと立ち上がった——つもりだった。が、一瞬だけ視界が暗くなった。思いがけず足元がおぼつかなくなったせいで、よろめいてしまう。

思考ははつきりとしているのに、身体が思うように動いてはくれなかった。

（あれれ？急に立ち上がったからかな・・・・・・？）

転ぶ！！そう身構えたから、思わずきゅうと目をつぶってしまった。

冷たくて痛い石床にしたたかに打ち付けて、擦り剥くくらいは覚悟したから。しかし——。

（・・・・・・あったかい？しかも、さらさらでふわふわ？床に上等のビロードでも敷いてあったかな？いやいや、それは無い・・・）

タバサはそろそろと目を開けてみた。ハチミツ色のキャンディー・・・ではなく、オオカミさんの瞳が自分を見つめている。

【大丈夫かい、タバサ？】

タバサは前のめりになった所を、オオカミさんに受け止められていた。優しく。

（うわ～うわ～わああ・・・・・・！何てステキな手触り何でしょうか！——オオカミさん）

無言でこくこくと頷いて見せたが、それからしばらくタバサは手を離す事が出来なかった。

その足元にはバスケットが転がっている——。

レシビ * 1 2 * オオカミさんの誘惑（後書き）

目の前に毛並みのよさそうな、かわいらしいモノがいたら触りたく
つてしょうがないですね？

それは——誰でも多分一緒に。

オオカミさんも同じ……。は、次話です。

レシビ

*

13

*

オオカミさんの定めた標的

(前書き)

いくら人畜無害そうでも、
気をつけて!!
その赤・・・違う。

レシビ

* 13 *

オオカミさんの定めた標的

——タバサ、どうした？大丈夫か？

……うん。ちょっとだけ、くらくらした、の。

——タバサちゃん、本当に？本当に、平気？お顔、真っ青だよ！

うん。もう、平気だよ。ただ、何だか。

——ただ？

う、ん……あのね。女神様の像の方でね。誰かに見られている気がしたら、くらくらしたの

オオカミさんこと『ウォレス』は自分の毛並みの見事さを、それはそれは——よく心得ていた。

見た目からして艶やかな光沢が、そのなめらかさを物語る。陽の光を受けているおかげで、益々毛並みの豊かさを魅せ付けているだろう。

もともと女子供というものは、こういった動物の毛並みに弱いものようだ。何が何でも触りたがる傾向が強い気がする。

それも、気のせいなどではないだろう。

ウォレスが大人しく従順な『犬』のフリでいて、広場をうろついているとしばしば呼び止められた。

歓声とともに、『彼女』達はこぞって手を伸ばしてくる。それは

疎ましくなるほどに、熱烈なものが多かった。

きやあきやあ言われて悪い気もしないでもないが、所詮は四つ足のわが身である。褒め言葉も『カワイイ』だの『お利口サン』だの、それ以上は望めない。ただのぬいぐるみでしかないのだ。

（どうかなタバサ？君も触れてみたくは無い？——君だったら大歓迎なんだが）

思っけていても口には出せない。もちろんだ。出せるワケが無い。

出来る最大限のことといえば、せいぜい胸をそらし気味にするくらいだろうか。

胸元の毛並みが、一等豊かで優美だから。そんな、ささやかな自慢に彼女は気がついていてるのか。いないのか？

一撫ですればふんわりとした被毛が、触れる者の心を捉えるのは経験から実証済みだ。

『女』で、まだまだ『子供』のような無邪気さを持ったタバサなど、すぐさま飛びついて来そうだと踏んでいた。

それなのに、思いの外タバサは用心深く身構えているようだった。

対する彼女もまた豊かに波打つ髪が、陽光をはじき返すほど艶やかだった。それでいて髪質が柔らかいのだろう。

打ち返す輝きはゆるやかで、湖面に反射する陽の光——。喩えて言うならば、それが相応しかろうか。

まばゆ過ぎても突き刺す程ではなく、穏やかで優しい。煌きに目を細める事はあっても、鋭さは無い。

それは彼女その者の持つ輝きだと思う。真剣に。

く・
・
・
・
く

魅せ付けてやるつもりが、魅せ付けられていた——。

そんな風に見惚れていた髪が、ウォレスの視界を流れるよう

に掠めた。

【！？】

勢いが良すぎたのだろうか。立ち上がったタバサの身体が、大きく倒れこんできたのだ。

瞬時に反応し、彼女の身体を受け止める。うまく身を滑り込ませる事ができて、ほっとしたのもつかの間で……。

思わず一瞬息を止めてしまったのは、抱きとめた身体があまりに軽かったせいだ。

（何だ？何で——出来ているんだ？タバサは）

ウォレスは本気で……確かめたくなってしまう。

身を擦って自分にしがみつく少女を、改めて凝視してもわかりそうもなかったが。

「オオカミさん……すごーいつ！ふわふわで、ツヤピカだあー！
！思ったとおりだわ」

すごーい、すごーい、すごーい！ステキ！！を連呼しながら、少女はやわらかな体を押し付けてくる。

【そう？】

「——は・いつ……。。あ、ゴメンなさい。とんだ失礼を！
！」

タバサは我に変えたようだ。自分の行いを恥じてか、ものすごい勢いで身体を引き剥がすように離す。そして何度も何度も——謝ってきた。

「ごめんなさい、ごめんなさい！急によるけてしまつてごめんなさい！『隊長殿』にとんだ失礼を……！！！」

そればかりを繰り返す少女が憐れなのと同時に、そんなに怯えなくても……と寂しくもなった。

（俺がさつき、権力を誇示するような言葉を吐いたからだ。このままでは、あの時と同じ失敗を繰り返してしまいかねない）

彼女が言葉使いも意識してかしまらせているようで、やるせな

かった。無理やり敬語を使おうとするからか、ぎこちなさがよそよそしい。

タバサは慌てたようにバスケットを引き寄せると、力一杯かき抱く。まるでずがるように、頼れるものはそれだけだとも言いいたげだった。

「いいんだよ、タバサ。気にしないで。それより、どうした？大丈夫かい？」

「だ、だいじょうぶですとも！全っ然！気にしないで下さい。だいじょうぶ、ですから、あまり・・・近付かないで下さい」

またしても手をぱたぱたさせながら、少女はしゃがみ込んだままずるずると後ずさって行った。

明らかに立場の違いを自覚して、距離を置きたがっているようだ。こうなるとこの娘は、けっして・・・一定の距離を崩してまで、踏み込もうとはしなくなる。

いくらもう「オオカミさん」が、親切ぶった優しい声音を心がけようとも彼女の中で一線を引くと決めてしまったようだ。

その言葉を見無視して、距離を縮めようと一步を踏み込む。

気配でそれを察知した彼女は、思い切り身体をすくませてバスケットにしがみついている――。

無意識ながら自分の与えられた権限を振りかざして、タバサに”うん”と言わせようとした事を悔いる。

どうしても彼女には頷いてもらいたいがために、手段を問わなかった。タバサが『護衛団』との諍いいさかを避けたがっているのは、早くから気がついていた。今ではなく、もっともつと前から・・・。

タバサは黒装束の集団を嫌っている。深い、深い部分で。

彼女は忘れ去っているようだが、ウォレスは忘れてはいない。だからその無意識の部分に、つけ込んだのだ。

（何て・・・事だ。俺はこういう時にいやらしさが出る――のだな）
自分はその筋では名家と謳われている、ロウニア家の出身だ。わ

りとかしずかれて育った方とは思つ。

だから、とそれをいいワケにしまつてはいけない。あの時も、そして今も。

——しまつた。その一言に尽きる。だがもう遅い。が、手遅れと諦めるのはまだ早い。

・ ・ ・

【タバサ——】

「オオカミさん！私もう帰ります。これ以上遅くなると、みんなに心配かけちゃいますし」

タバサは名を呼ばれたが、すぐさま振り切るように言葉を遮つた。そして再び、立ち上がった。今度は慎重に、ゆっくりと。

「——帰ります」

きつぱりとそう宣言されてしまう。確かにこれ以上長居は無用だろう。

タバサは自分の意向をはっきりと、申し伝え・・・終わったのだ。それを聞き入れようとしてもしない「護衛団」の「隊長」殿などとは、話が長引けば長引くほどタバサに不利に働くと判断したのだらう。しかもアレだ。タバサは自分の分というものを弁^{わきま}えてしまっている。彼女は幼いながらも交渉慣れしているのだ。さすが小さな頃から、商いに関わってきただけのことはある。

自分の意向を伝えねば、相手の意向に流されるのだ。——交渉事というものは。

それは実践によって体得できる、人生の経験値のひとつと思う。（さすがだね、タバサ。流されちゃくれないか、もう。でも俺だつて結構、場数を踏んできたんだよ？）

お互い身をもって学んで来たようだ。ウォレスの記憶にある小さな女の子は、どこか怯えたような瞳をしていたものだが。

今はその影など微塵も見当たらない。少しだけ罪悪感が薄らいだ

ような。少しだけ、ほんの少しだけ・・・さみしい様な。

そんな想いを込めて少女を引き止めるべく、ウォレスは眼差しですぐがった。

（行かないでくれ。どうか、もう少しだけ）

この身のもどかしさは本当に、手も足も出ないという事だ。

肝心な時に頼りになるものといったら、何かといえはコレしか無い。コレ――。

本来ならば言葉持たない動物達が、全身で訴えるかのようなじらしさ。

この身ならではの、持ち合わせを前面に押し出すべく。オオカミは琥珀の瞳で、紫紺の瞳を見つめ上げる。

タバサはしばらく考え込んでくれたようだが、ふいに陽射しが随分傾き始めた窓に目をやる。

肌寒さを覚えたのだろう。そういえば自分の足裏に伝わる感触も、ひんやりとして来ている。

タバサは急がねば、と思ったのだろう。それじゃあ、と慌ててウォレスに背を向ける。

【タバサ、送るよ】

素早く呼び止めると、タバサの傍らに寄り添う。

ウォレスはすかさず、もっと『オオカミさん』の面を前面に押し出す。ステキな毛並で穏やかで、優しい優しい『オオカミさん』の部分。

さりげなく――出来うる限りやんわりと、己の身体をタバサにすり寄せた。

表向きはタバサがまた足元を失った時に、すぐ対処できるようにするため。その実の狙いは、タバサに” ” うん ” ” と言わせたいがため。

【タバサ、送っていくよ。また足元がふら付きでもしたら、危ない

し心配だから送らせて。……道々——話を聞いてはくれないか。ダメ？」

う、うっとタバサが息を呑んだのがわかって、内心しめたと思った。手応えアリ。そう判断できる。

「……う……ん、はい」

【じゃあ、行こうか】

承諾を得ると、素早く促がした。やっぱりいいです、等と言い出させたりなんてするものか。そんな思いの表れである。

ウォレスはタバサのバスケットを背に担ぐように、身を滑り込ませる。少しでも、少女の負担を軽くしてやるためだ。

『今度こそ、上手くやる』——しくじったりなど、するものか。そのためにはまず、逃すか。そんな勢いある言葉で、自分の感情が沸き上がるのはおそらく『獣身』をとっているせいだ。

自分はしょせん『狼』なのだ。見た目も……なかみも。

そんな想いはもちろんおくびにも出さず、ウォレスは歩き出す。はたから見れば、彼女の騎士を気取っているように映るだろうか。それを思うと、かなり気分が良かった。

（いや？ 騎士なんて大層なものではなくて……。実際は『送り狼』か？）

『オオカミ』のウォレスは、誇らしげにつき従う——。誇らしいから。ちらと浮かんだそんな言葉は、すぐ打ち消してしまった。

レシピ * 13 * オオカミさんの定めた標的 (後書き)

——食べられちゃいません。(まだ。↑まだ?!)

そんな事にはなりません、何ていいましょうか。

この二人は先々・・・確実に頭に『B A』の付く

カップルに・・・。ええ。

レシビ * 14 * オオカミさんに送られて（前書き）

はたから見れば、和やかな光景です。少女とわんこ。

——はたから見れば、のハナシですけど。

レシピ * 14 * オオカミさんに送られて

——タバサちゃん！

あ、はい！毎度どうもです、おかみさん。

——タバサちゃんコレ、良かったら食べとくれ！たまには、おばちゃんのこしらえた菓子もいいだろう？

わあああ、ありがとうございます。いただきます！

——うんうん。こんなこと言ったら・・・悪いけど。その。普段は、タバサちゃんは食が細いのかい？

？いえ、そんな事はないと思いますけど、むしろ、いっぱい食べる子ですよ？

道々歩きながら話すなんていうのは、家と一緒にのララサ以外のなかったかもしれない。そういえば。

タバサはふとそう不思議に思った。成り行きとは言え、こうしてオオカミさんに送られて帰ることになるうとは・・・。

タバサは急ぐべく、なるべくたったか・たったかと小走り気味なのだが――。

同じ歩調で合わせてくれるはずのオオカミさんは、ゆったりとした調子に見える。タバサの足は二本だが、彼の足は四本なのだ

からか。

優美で——見事なまでに遅い・・・そのしなやかな筋肉には、恐ろしいまでの瞬発力を秘めているに違いない。

（多分、きっと。カミサマのお使いの『神聖獣』に近いのだろうなあ。いいなあ、オオカミさん。ステキで）

タバサはこっそりと眼差しで、賞賛を送る。そして、はたと気が付く。——と言う事はアレだ。もしかして、彼の弟も？

（いやいやいやいや。似てない兄弟もいるもんだし。うゝゝゝん？　そういえば。何でオオカミさんはオオカミさん？）

タバサはこんがらがって、自分が何に疑問を感じているのか・・・言葉が追いつかない。

オオカミさんはカミサマのお使いなの？——と、言う事はあの感じの悪い弟も？

でも、弟の方は『人間』だけどオオカミさんの『弟』？

その上、オオカミさんは神殿の『偉い人』の『権限を与えられた者』？

まとまらないままに、素直にナゼ？なに？を口にしてしまっていた。

「あのですね、オオカミさん。お尋ねしてもよろしいでしょうか？」

【どうぞ】

「オオカミさんは、オオカミさんですよねえ？でも、オオカミさんは『兄上』で『隊長殿』なのですよね。——オオカミ・・・さん、なのに・・・。？」

【そうだよ。おかしいかい？獣のくせに弟がいて、隊長やっているなんて】

「いいえ。私、言葉が少なくて、上手に伝えられなくて・・・そういうつもりで訊いたではありません。不愉快だったらゴメンなさ

い。ただ、私オオカミさんとはとてもキレイで不思議だから、カミサマのお使いの『神聖獣』なのかな？と、思ったのです。違うのですか？」

【違うよ。そんなご大層な獣^モじゃない、ただの狼だよ。がっかりした？】

タバサはオオカミさんを見つめ下ろしながら、ぶんぶんと首を横に振った。

「そんなことはありません！オオカミさんは、ツヤツヤのふわふわでステキですよ。ずう——っと、抱っこしてたいくらいに……つと！ゴメンなさい！！」

タバサは大慌てで、謝った。それこそ、全力で。立ち止まると頭も下げて。

（また、とんでもない失礼な事を口走ってしまった！ひいひいすみません！すみません！）

先ほど明かされた彼の立場を考えると、自分の立ち位置の『低さ』をどうしたって見積もってしまう。

別に己を卑下しているのではない。彼は権力者の一人と見た方がいい。それがタバサが先程はじき出した答えだ。

だったら一般人の自分は己の立場をわきまえる。それに限る。こゝと商人はそうするに限る。

『神殿前広場の護衛団』といえば、神殿直属の優秀な者ぞろいで有名だ。

当然の事ながら訓練を積んだ、実績ある者でなければ在籍は許されない。彼らが街の治安を守ってくれているお蔭で、タバサのような小娘でも一人で商いに出られるのだ。

聞く所によるとそんな当たり前前の事がままならない程、治安の悪い場所があるらしい――。

ここサンザスの国と同じ事情ではないらしい、隣国の話を聞いた

び胸が軋む。

国王陛下も巫女王様も、そうしてご領主さま方も民人を大事にして下さっているから。商人達も商売に精を出せるのだ。

その手足となるべく配属されているのが、護衛団なのだ。

あの広場で争いも無く、絡まれることも無く商いをやっていけている。それは大きな事実だ。

（いやあ？待てよ——そういえば。絡まれてますねえ、最近。当の護衛団員たちに。ははは・・・まあ、逆らわないでおこう。うん、それがいい。オトナだから、私。えらい！今日は本当に色々とい、私！）

そんなタバサの耳を掠めたのは、オオカミさんの息使いだった。

（アレ？ため息ですか。なんででしょう？）

勢い良く謝りだしたタバサに、オオカミさんはどこか落胆したような声を出した。

【——タバサ。どうしてそんなに謝るんだい？】

視線を戻すとオオカミさんも立ち止まって、タバサを見上げていた。

「？——だって。失礼な事言っただけだからなんですもの、私。オオカミさんは『隊長殿』でいらっしゃるのに」

【そんな事はないよ。気にしないで、タバサ。むしろ君なりに、褒めてくれているのだろう？それとも、ただの社交辞令？””ずっと抱っこしていたい””というのは】

「社交辞令・・・なんかじゃありません。本当にステキだと思います・・・」

何ていうか。ちょっと信じられないくらいに、ステキな手触りなのだ。うつとりしてしまう。

（それこそ、何の術ですかあ！オオカミさあん！！）

そうなのだ。魅せ付けられたら最後、もう手放し難くなってしま

う。そんな魅惑の毛並で、そんなに近付かないでいただきたい。

また、失礼を働いてしまいそうなのだ。タバサは夢うつつで聞いた、ララサの忠告を思い返していた。

（……）”あんまりオオカミさんにべたべた引つ付かない方がいいよ。”うん。確かに無礼者だよね。嫌われちゃうよね。知り合つて間もない人間に、愛玩動物扱いされたくないよね！ララサ、賢いっ！！）

ララサは多分ふわふわしたカワイイ動物大好き！！な、自分の行動を見越してくれていたのだろう。

かわいい！かわいい！と撫で回されて、子猫も子犬もしまいには・
・迷惑がつて逃げてしまった。

そんな苦い経験を思い出して、タバサはオオカミさんから一步離れる。慎重に。

【——タバサ？】

「あ、あの、進みませんか。遅くなっちゃう。それと、お話しあるんですよ。何でしょうか、オオカミさん？」

【ああ……。そうだね。いいよ、また明日で。やっぱり、歩きながら話すような事じゃなかった。すまない】

「気になるんですけど。今、言つて貰えませんか」

言い出しておきながら、タバサは前に進まないでいた。今、言わせねば。そう判断したからだ。

今、聞き出さねば気になつて仕方がない。このままそぞろな気持ちで歩いて、あやふやにされては敵わない。

また勝手に話を進められるのも、癪に障る。タバサは今度ばかりは遠慮なく、オオカミさんの瞳を覗き込んだ。

仰ってくださいますよねえ、い・ま！——そんな念を込めて、眼差しを送る。

【いや、その。何だ——君が『春の乙女』として祭典を迎える日は、

この俺がエスコート役の名乗りを上げて構わないだろうか。『乙女に仕える騎士』役として』

「オオカミさん。あのですねえ、オオカミさん？私はまだ候補ですよ。乙女役やるって決まってるよねえ？——先走りすぎじゃないですか？」

【イヤかい？】

「……そういう風に勝手に先走って、決められるのはイヤです。でも、オオカミさんが騎士役なのはイヤではありません」

【——そう】

「はい」

【わかったよ。じゃあ、行こうか】

「……ハイ」

その後——二人は無言で歩いた。タバサは早いところ家に着いて欲しいと、ただ黙々と足を運んだ。

こんな気まずさ満点な帰り道は、初めてだ。だがタバサは伝えた言葉に悔いは無い。

オオカミさんは少々……上に立ち人を使う立場にありがちな、強引さがある。

言葉使いがいくら柔らかでも、仕草に洗練された優しさがあった。タバサは感じ取ってしまう。

（本当に『お偉いさん』なんだなあ。上から目線なんだね。ま、悪気は無さそうだから、突っぱねられなくもないし……いいけど。人の話は、聞きましょうねえ？おおかみさん）

偉い方だとは認める。だが何でもハイハイと、譲ってやる気などないんですよ——な、タバサだ。

「……………」

【……………】

（オオカミさんめ。少しは分って、諦めてくれたかな。）

——日がすっかり傾いて、辺りは闇が包み始めている。

・

・

「……ねえ。オオカミさん。なかなか……家に着かないのは、オオカミさんの仕業じゃないですよねえ？」

【——気のせいじゃないかな、タバサ】

間違いないと、タバサは確信した。はっはっは……と、どこか乾いた笑い声に合わせてオオカミさんが答えたので。

「オオカミさん！　また何なんですかつ、これは！？何をどうしたらいつもと同じ道んだけど、でも違う空間になるんです？」

【ヒミツ。教えられないな。タバサは神殿に属していないから】

「……オオカミさん」

と、いうことはアレだ。コレは【気のせい】では無いという事になるのを認めて、自ら暴露してしまったのだ。

【ばれたか。——すまない、タバサ。さすが私の見込んだ『春の乙女』だ】

「断定しないで下さい！　まだ『候補』に上がっただけでしよう、もう。褒めてごまかそうとしないで下さいよ……？　まあ、私はただの小娘でしかありませんがね。軽く、傷つきますよ……」

【うん、ごめんね。でもちよっと、足腰鍛えておいてもらおうかと思つて。君は華奢だから、もっと太った方がいいよ】

「何て軽い謝罪ですか。しかも何だつて鍛える必要があるんですしよるか？　しかも、太れと？……って、まさか……」

【うん。多分、当たり前。祭典の日はかなり体力必要だからね。乙女役は特に体のラインが出る、祭礼用の巫女装束だから。ガンバつて？　】

「~~~~~！！！」

助けて！そんな調子でタバサは、ララサに飛びついた。

「うん、知ってる。聞かないよね．．．．．」

「やっぱり！？」

「とりあえず。お家に入りなよ。食事にしよう？今夜は．．．また『対策会議』だね」

泣きつくタバサの頭を撫でながら、ララサは促がした。

レシピ * 14 * オオカミさんに送られて（後書き）

オオカミさんは、このまま祭典まで突き進む魂胆です。オイ。

婦女子は多少ふくよかな方が……。いいかな。

好みは色々あるかと思いますが、この国の基準がそうなのです。

（作者の好みが反映された国ですからね。すみません。健康的であればいいのです！！）

レシビ * 15 * オオカミさんに連れられて（前書き）

オオカミさん VS 菓子売り子

どっちも決めたら、なかなか譲りません。

レシピ * 15 * オオカミさんに連れられて

．．．．．え？なあに？よく聞こえなかった．．．．．

——．．．．．ウ．．．．．ス．．．．ア

？ ？ ？

——．．．．．．．．．．．．．．．！

ウ、ウ、．．．オ．．．？ 何？

—— 何で聞き取れないんだよ！俺の名前は、だから
．．．．．”！！！”
”
”
．

そんなこと言われても。何でかなあ．．．わかんないよ．．．

「はあい！」

—— 威勢よく上がる右手と同時に、元気のいい声も上がった。

「はいっいたらはいっいたらハイっいたら、はいーっ！！！」

【や。何かなタバサ？】

「何かな、じゃありませんよ！オオカミさん。こ、これはですね、
い、い、一体．．．何事ですかあ！」

威勢のいい声は、最後の方は泣き出しそうな声音に変わって行っ

た。そんな声も祭壇の静けさが受け止めてくれる。
そんな女神像の前。

）。．．．．．（

今日は逃げ帰る気満々で、バスケットが空になるや否や広場を駆け抜けた――。

そんなタバサを待ち構えていた真っ黒いオオカミさんこと、隊長殿にばっちり捕まったというわけだ。

あと一步。もう一步。進めばそこは広場の外。

その境目の目印ともいえる、そびえ立つ石柱の影から黒い影が先に伸びて――タバサの前に立ちはだかった。

己の影に重なる影に、その場に縫い付けられた。やはりと言うべきか。狼が．．．．．のっそりと現われる。

【や。昨日はどうもタバサ？今日は女神様にご挨拶がまだのようだけど、帰るの？】

口調はあくまでやわらかな、調子なのだが。タバサにはこう、聞こえていた――。

やあ、昨日はずいぶん．．．ねえ？この私にバスケットで襲い掛かってくれたよね。しかもこの広場で商いをおきながら、女神様にご挨拶もせずに帰るなんて、ねえ？――それって商人としてどうなのかな？

――と、まあ。自然なまでに威圧感を漂わせてキティル。気のせいなんかじゃ、ない。

（うぐぐぐ．．．．．！）

タバサは持ち前の敏感さから空気を読んだ。読めなければものすごく楽なのに．．．．．と思う。

はたから見れば、とても微笑ましい光景だったと思われた。少女とその傍らに寄り添って連れ立つ、神殿まえ広場・護衛団の『犬』。もちろん愛玩犬ではなく、訓練された職業犬だ。彼の首にかけられたメダル——神殿の紋章が彫られたソレがその証。

彼はとても賢いし、出で立ちだつて実に堂々として立派だ。くどいようだが、流石に『隊長殿』なだけはある。おまけに皆から信用されているらしく「ララサちゃん、いいわね」何て声を掛けられたりもしたのだが。タバサの表情は冴えない。

（——いやぁ全然？良くないですよ。みなさん、彼が隊長ですよー？そんな御方に連行されてるんですよー？ついでにタバサです。・・ははははは・・はあ）

そんな言葉はもちろん飲み込んだまま、進んだ。ついでに乾いた笑いも表に出さずに、進んだ。

・

・

そうしていつも通りも、はや四日目の祭壇前にタバサは立ち尽くしていた。

おいそれと座り込んではいられない——。そんな敵かな設えしつがされていては、流石に警戒してしまう。

（これは——儀式用の祭礼壇とみて、間違いなさそう。まさか、このまま。無理やり『乙女の宣告』の儀式に進む気じゃ・・・・・）

聖水とおぼしきものが張られた、聖盆の両脇には聖杯が一组。同じく聖剣。小さなベル・・・コレも聖鐘とやらで神器の一種だろう。等しく両脇を固めるように配された、静けさの漂う祭壇は少なくとも昨日までは無かった。

ひとしきり眺め回してから、恐る恐るタバサはオオカミさんを見た。

——何、始めようとしてらしゃるんでしょうかねえ・・・・・？

そんな不安いっぱいタバサの眼差しに、ハチミツ色の眼がキラリと光った。

惜しみなく射し込む、夕方の光を跳ね返して。

（企んでる。絶対何か、企んでる！何ですか、その生き生きした目は！！）

【タバサ。春の乙女のおつとめを承諾してくれるね？】

（——なぜに確信しているかのような口ぶりなのでしょう？私、散々！お断りしてますでしょうに）

タバサはいい加減、ぐったりくるなと思った。小さくため息混じりに向き合う。

「そうは仰いますがオオカミさん。私、何べんもお伝えしております通り、その日は商いが有るんですってば」

正直・・・同じことを毎回毎回くり返し訴えるのも、疲れるものである。

——もう面倒くさいから、いいですよ。という丸投げにしたい気持ちに、すこしだけなってくる。

いやいや。そこが狙いかもしれない。タバサは思い直して、気持ちを引き締めた。

根気良く行かなければ相手の言い分にぺろりと——丸飲みになれない。何せ相手は『オオカミ』さんなのだ。

【じゃ、お休みもらって】

「無理です」

【どうして？】

「稼ぎ時になぜ休まねばなりませんか！嫌です」

【——タバサは稼ぎたいの？だから休んでまで、乙女役をやりたくない？】

「そうです」

【稼げるよ？】

「は？——ハイ？」

【乙女役。引き受ければ、それなりの報奨金が用意されているし】

「……イヤイヤ。そういう意味ともまた、違いますよ。そう取られても仕方の無いやり取りでしたが。あのですね。

私は商人として、商いで稼ぎたいのです。祭典の日はうちの菓子を売り込む、またとない絶好の機会なのです。それを逃したくは無いです！」

【何だ。じゃあ、心配要らないよ。君が乙女を引き受ければ、いい宣伝になるんじゃないかな？——乙女の生家の商う菓子。みな喜んで飛びつくよ。祭典の日だけじゃなくて、その後もずっと】

「……そうじゃなくて、そういうことじゃなくて、もういい加減に諦めて下さいよ。もう……」

【タバサこそ。諦めが肝心なんじゃない？】

「——ぶちますよ？」

ためらい無くバスケットを振りかぶる。オオカミさんときたら、身じろぎひとつしやしない。余裕たっぷりだ。きつとまた、かわす自信がおりなのだろう。

タバサはオオカミさんを恨みがましく、睨み下ろした。

何やら、緊張しているのはタバサだけ。よって二名の間には今ひとつ、緊迫した空気などというものは流れちゃくれなかった。

そんな……女神像の御前。

・

・

【タバサ悪いんだけどこのままだと君、危ないかもしれないから】

あいも変わらず悪びれた様子の窺えない謝りを口にしながら、さりとて言い放たれる。タバサは力が抜けたように、バスケットを下ろした。

「……はい？何が……ですか？」

【うん。君ね候補と名が上がった時点で、狙われてるから】

「はあ！？何ですかソレ！なんですか！も！何に狙われると仰るんですか。あ、わかった！ハイ」

つい拳手。

【どうぞ、タバサ】

「他の、例えば！自分の娘を候補に上げたい家の親族！——当たり前でしょう」

【ああ。それもあるな。そういえば。】

「——え。……はあい」

「またしても拳手。今度は『質問があります、先生』とでも、付け加えたい調子だった。」

【何かな、タバサ？】

「え〜と〜……狙われるって『何を』狙われるんですか？私のうちはたいして裕福でも、余裕があるわけでもなく——ですね……。私をかどわかしただとしても、特に利は望めそうも無いんですが、その」

【確かに。そういう物の見方をする、不屈きな連中も出てくるかもしれないね。ごめんねタバサ。君の事は責任持って護衛にあたるから、安心してくれ】

「オオカミさん。何ですかさっきからまさか狙われているのは命とか言い出す気ですかまさか！！」

【当たらずとも、遠からず？さすが『春の乙女』役だね】

「ナゼに疑問口調ですか！おまけにさらりと『候補』を外さないで下さい！……って。ええええええ！命？狙われる、かも、ですか私？」

〜・

・〜

【先の——『白孔雀』様ことシーラ・ジャスリート嬢の話は知っているかな？君が生まれるよりも少し前の話だけでも】

「はい。聞いたことはありますが。ジャスリート公ルゼ様のご息女で、跡取りでらっしゃるフィルガ様のお母上様ですよね？……・確か消息を絶たれたとか」

【そうなんだ。十七年前にね。じゃあ『彼女』の起こした、一連の騒動の話は聞いているね？その様子だと】

「——はい。まあ・大体は」

【……じゃあ最近になって御力の現れた『紅孔雀』様を知ってる？彼女もジャスリート家縁のお嬢様らしいのだが】

「大まかにですけどね。聞いておりますよ。何でもフィルガ様の許嫁でらっしゃるとか。『シーラ』様に『そっくり』のお嬢様ですよ？もちろんお会いした事はありませんが」

ひそひそと、二名は神妙な口調と面持ちで確認しあった。なかば探り合うような。誰にも聞かれる心配は要らないはずの、この空間の中にあつてさえその話題は慎重に取り扱わねばならない。そんな気持ちたちが相まって、思わずお互い声をひそめ合っているのだ。

この国における重大な事件に数えられるだろう。今巷に広まっている話題……それはかつてこの国を騒がせた『聖句で囚われた獣をも魅了して』しまう『シーラ様』こと『白孔雀』。

その彼女と『同じように』どんな状態でもお構い無しに、獣をそのお膝元に跪かせてしまうという『乙女』が現われた、と。

獣を招いて魅了する。そんな彼の乙女の髪は——それは見事な『紅』色だとか。

【——呼び声に抗いきれ無いのが、獣の本能らしくてね。実際……神殿仕えの獣のうち、何頭かは行ってしまったよ。『聖句』を振り切つてね。そこで『獣耳』の能力のある者は、目を付けられる事になる】

「何やら不吉な予感がするのだけは、ひしひしと感じますが……仰っている事の意味がよくわかりません」

【君みたいに獣の声を聞く者はね、タバサ。能力者不足の神殿からや、その他の術者からや、聖句を振り切った獣からしてみれば、実にお声を掛けたくなる存在なのさ。それぞれの思惑がある。それがいいものだけとは限らない】

「……ララサは？ ララサは大丈夫なのですか？」

【ララサは大丈夫。候補にどうかと名前は上がっていたけど、女神様に『乙女候補の申請』をまだしていなかったから】

「そうですか。．．．よかった」

（よしよし。ララサに危険が及ぶ事はなさそうね．．．ならば。い
よっし！決めた）

——逃げるに限る。

もうこれ以上首を突っ込まされて、後に引けない所まで持っていく氣に違いあるまい。この御方は。

手遅れになる前に、聞かなかったことにするために。逃げよう。狙われてる、とか何とか。

そんなものは彼の脅しに違いない。自分はただの街娘。

神のご威光たなびかせた『獣』の皆さんが、興味を持つとは全然考えられやしませんよ。——な、タバサである。

そんな画策をめぐらせ、タバサは思わず拳を握り締めていた。ぎりぎりとは身体の芯から絞られるように、力が湧き上がって来るのはナゼなのか。

駆け出すために筋肉をバネの様に。まずは圧縮させてから、飛び出すのだ。””いっせえの、せえっ””で。

そんな合図を心の中で数え出していた。

(. . . い . . . せ . . . の . . .)

【ウォレス】

「せ・・・ええ？つて、は？ハイ？」

【ウォレス、だから。俺の名前】

「え・・・オオカミさんじゃなくて？」

深く頷かれた。

【タバサ。俺の名前は”ウォレス””。聞こえる？” ウォレス・ロウニア”だよ】

「オ？ウ？・・・つて・・・。ロウニア！？」

そういえば。弟の名前をウォレーン・ロウニアと言っていたではないか。

——そういえば！その時は引っかからなかったのだが。今、何かタバサの中でかった。

（思い出したよ、ロウニア家！！神殿仕えの名家、現・巫女王様のご生家ですわ〜よ〜ね〜・・・まずい。まずいよ〜！！）

タバサはようやく、合点がいった。

オオカミさん・・・もとい、ウォレス殿や『弟』君がナゼにこんな——上から目線なのか。

レシピ * 15 * オオカミさんに連れられて（後書き）

ロウニア家の、弟も弟なら・・・兄も兄です。

育ちの良さが持つナチュラルな、強引さは一体何様のつもりで
しょうか。

どんどん嫌なヤツになって行くのね、あんた達兄弟は。

このまま兄弟は姉妹を振り回し、振り回され、を繰り返していきます。

応援して下さい・・・（誰を？）

レシビ

*

16

*

彼の名前は後に呪文（前書き）

引き続き オオカミ VS 菓子売り子

レシピ * 16 * 彼の名前は後に呪文

——もう一度、言っぞ？

うん。

——俺の名前は ” ” だ。

. う？う？？

——人に名前尋ねておいて何なんだ？タバサ！聞き取れないのか？
？発音できないのか？

どっちも。

）
。
.

ウオレス。

その名前は後からじんわり、タバサを侵食する事となる——。
今はまだ種を植え付けられただけ。その事に気がついてもない
あり様。

浸透するのを拒む『何か』がある。

しいて言えばそれは . . . 即効性はないが、ゆるやかにこの身を
支配する呪文のようなもの。確実なまでに。

—— 『に至らしめるものと、タバサが知ることにな
るまで . . . 後もう少し。』

。。

。。

「今更ですが。——ロウニア家の若様が、ただの街娘に何用でしょう？」

【タバサ。何で怒るの？】

「別に。怒ってなんていませんよ。ただ、からかうのもいい加減にして欲しいな〜って思ってますけど〜？」

【それは怒ってるよね】

「いいえ〜え？」

「ゼーん・ぜんっ！とタバサは付け加えた。それがまた小憎らしくて・・・可愛らしい。そう感じてしまうあたりで、ウォレスはだいぶやられていと思う。」

【・・・・君を春の乙女としたいのは、俺の——仕事だから】
一世一代の、とは付け加えないでおいた。通じない可能性大、だから。

そんな——どこか柄にも無く恥らうような口調を、汲み取ってはもらえなかったようだ。

「はい。それは充分もうわかりました！オオカミさ・・・隊長殿は神殿に仕えるお立場から、祭典に携わるのが当然！『乙女』役の選出もその一環でございましょう。ですから、私が言いたいのはですね、」

【からかっているなどと、どうして決め付けるんだ？・・・・・・タバサ】

これ以上彼女の口から、拒絶の含みなど聞かされなくなかった。ウォレス自身が思うよりも低い響きがあったのは、否めない。彼女を責めるような・・・気づけばそんな口調。自分でも押さえが利かなかったことを悟った。

タバサが息を飲んだのが解る。彼女は恐ろしいまでに敏感なのだ。

『場の空気を読む』。

それは人の感情をも読み取ってしまう能力。良くも悪くも作用する、巫女としての資質は彼女を商売人として助けている。

接客になくってはならない、そして巫女としても欠かす事のできない資質だ。

そんなタバサのことだ。オオカミの本性を嗅ぎ取った事だろう。ウォレスの本来ともいえる感情の起伏・・・気が短くて激しやすいという、必死で押さえ込んでる部分に曝してしまった。

だが止められそうも無い。せつかく無害で穏やかで優しい『オオカミさん』として振舞っていたのに、台無しだ。

何がここまで自分を激させるのか。それはタバサが、自分の名を呼ばうとしないからだ。加えてこの形式ばった、かしこまった口調。それが余計にあの時と同じ悔しさで苛立たしさを蘇らせる。

そんなものはとくに克服したと思っただけに、自分自身にも苛立ちが募る。それは焦りにも似ている――。

「そうとしか思えません、隊長殿。私はただの菓子・・・キャンデー屋の娘です。それと相応しい『乙女候補』がいると考えます。隊長殿がロウニア家とあらせられるのなら、それはなおの事」

思いの他、タバサは強く言い返してきた。挑むような眼差しを崩さず逸らさず、しっかと見据えられてウォレスは唸った。

受けて立つかのように、彼女の眼差しを見つめ返す。彼女もまたその構えだろう。

いい加減、のらくらとかわす作戦もなかなか効果が上がらなくて、それどころかいいように流されかねないと勘付いた、といった所か【相応しい？君こそが相応しいと判断した俺の目に狂いがあると侮辱しているのか？なぜだ。それは君自身をも蔑んでると思わないのか】

「なぜそう判断なさるのですか？私は自分を卑下したりするような性分じゃございません。生憎と。それこそ勝手に先走って決め付け

てらっしゃいますよね？私はただ人には、分というものがあると思
っているだけですっ！」

【さっきから何だ？分とか何とか！そんなもので『春の乙女』を辞
退したいというのか？】

「辞退も何も！受け付けてもおりません！！しつかりなさって下さ
い、隊長殿。ロウニアの出のお家柄ならば、他に相応しい候補者を
上げるべきです。かつての『春の乙女』達がどう選ばれてきたのか
私は知っていますよ？」

間違えるな、自分は頷いてもいない！そうも汲み取れる痛烈さを
込められた叫びは、徐々に勢いを失って締めくくられる。

睨みつけるような眼差しが、幾分弱まったように眇められた。苦
しそくに。

理解に苦しむとでも告げるような、深みのある紫紺の瞳に胸が詰
まる。

【俺がロウニアの出だから何だと？俺はただの・・・ウォレスでし
かない。俺はウォレスとして君を候補と上げたんだ】

「・・・・・・・・仰っている意味がわかりません・・・・・・・・隊長殿」

思いのほか精一杯で、遠慮も無い。互いの主張をしあう声が響き
渡る。

そんな様子を女神様に笑われている気のする・・・本人達は泣き
出しそんな一歩手前。

儀式を待ちわびるかのように、ひっそりと配された神器たちが見
守る——祭壇前。

自分が何故候補に選ばれたのかと、怒り出す娘もまた珍しいだろ
う。
なにゆえ

ウォレスには理解できない。

それを身に余る光栄とばかりに、私が喜ぶでもお思いデスカ？

——ロウニア家の若君よ？

だとしたらそれは、とんでもない思い違いでございましょうよ。

そう——諭してやるべく、はつきり伝え申し上げられたら。・・・
 どんなに、この胸がすく事だろう。

このもやもやした想いは、遠慮なくモノを言っているようでありながらも、どこかしらまだ『遠慮』が先立つせいだ。

タバサの立場など！この御方を前にしては、霞のようなものだ。脆く儚く霧散してしまう類のもの。

ちいっ！と鋭く舌打ちそうだった。

（ララサが途方に暮れる訳だよ。．．．まああの子が、そう深入りする前に済んだ事。良かったと思うおう）

全く持つてぞつとする。このような煩わしさと不安定な身上に、
 ララサを曝すようなマネをしでかしそうだったのだ。

なぜか無性に腹が立つ。だからタバサは強く出ていた。『金持ちケンカせず』？・・・今はそれも遙かゝに彼方だ。

（一般市民を、商人を何と心得ているんだか！人の都合もかえりみず勝手ばかりを。おのれ！これだから！ふわふわのツヤピカは）

タバサはそんな『オオカミ』さんに、うっかり懐柔されそうだった自分を恨んだ。それと同じくらいに、彼の素敵な毛並も。

• •
• •
• •
• •
• •
• •
• •

「私。忙しいのでこれで失礼します」

【タバサ。話はまだ終わっていないよ。逃げる気？】

（聞き捨てなりませんわねえ？）

今にもそんな声を降らせそうな勢いで、タバサは振り返った。

「……私ね”商人”なのです。私を『春の乙女』にするのが隊長殿の『お仕事』だと、先ほど仰いましたよね？」

【そうだけど。少し違う】

「——どのように？」

【君を春の乙女としたい。ただのウォレスとして純粹に】

「重ねて申し上げますが、私ね”商人”なんです。『仕事』と名のつく話をされれば、ある程度の事は仕方無しと譲歩してしまうタチなんです」

でもね、とタバサはにつこりと笑った。お得意の、営業用の。その中でも特に、盛大なヤツ……を見舞う。

ウォレスが怯むほどの威力がある、極上の笑みはなぜか凄みがあった。

その面影が自分のお仕えしている方のものと、うまい具合に重なるせいもあるうか。

「私ね自分の商いを邪魔されるのが一等、嫌い。ガマンなりません。それとね、きちんと『仕事』を遂行されない方もね……」

紫の瞳が眇める先にあるのは、狼の光が遊ぶ毛並の先だ。狼を見ているようで、見ちゃいない。

【聞き捨てなら無いね、タバサ？】

「仕事成り立つのは——それをやり遂げようという者の意志が、必要不可欠なはず。嫌々引き受けた仕事、分にそぐわない仕事は時にはあるでしょうが……『春の祭典』の『乙女』ですよ？そんな皆を祝する大切なお役目を全うするには、巫女の資質とやらの他にも欠けてはならないものがあるでしょうに！」

【それは、何？タバサ。教えてくれる？】

「やる気」

——要はアレだ。タバサにやる気は皆無と・・・言っているのだ。

【・・・・・・・・・・・・・・・・】

言葉を失ったウォレスにさっさと背を向けて、タバサは祭壇通路を走り出していた。しかも全力でだ。

後もう数歩だ。飛び込めば扉の向こうは神殿前広場！恐らく彼のお得意の『結界』も、そこまでとタバサは踏んでいる。

しかも扉はまだ開放されていて、出入り自由の時間帯。

（いよっし！飛びこめば・・・・・・・・）

「——！？」

それなのに思わず、飛びずさってしまったのは——。見覚えも新しい黒装束の、護衛団の二人。

「よお！嬢ちゃん、久しぶり〜？ま〜だ、もうちょっと帰るのは待ってナ〜」

向かって右の扉の影から現れた青年は、人懐っこい笑みを浮べる。それだけではない。くつくつと笑いを堪えるかのように、押し殺してもいる。

またタバサをあやすような口調に、気遣わしげな眼差し。それに加えて、面白いものを見つけた！とでも言いたげな好奇心丸出しの眼差し。

それとは対照的な青年は、左側の扉に寄りかかるようにしてタバサを見下ろしている。

しかも、というか、勿論というか。無言で。

「……………」

——タバサの勢いはそこまでだった。

レシピ * 16 * 彼の名前は後に呪文（後書き）

はいはい、あんた達・・・。ケンカは両成敗ですよ？

お互い様の二人。何で人の話し聞かないんだ？の二人。

平行線のまま、次回です。

レシピ * 17 * 呼び出されて不機嫌な獣（前書き）

しつこいようもー！！そんな、タバサ。

レシピ * 17 * 呼び出されて不機嫌な獣

——人の子か。何用だ……

え？

——オマエがオレを呼び出したのだろう。

呼び、出す？

——……オマエ。

ねえ、アナタ。きれい、だね。かわいい、ねえ。

——……………。

(……………わーあ……………どうしよう?)

タバサは乾いたような笑いを、忍ばせ切れずに漏らす。

「ははは……はああああ……。」

後半はホトンどため息で成り立っていますよ、な脱力したものの。

「そりゃないぜ？ 嬢ちゃーん？ 軽く傷つくぜえ」

相変らず人の良さそうな笑顔でいらっしゃる。そんなチエイズの人懐こい調子も、今のタバサには癪に障る。

チエイズ。——チエイズ・ロツトだ、確か。ロツト……ロツト。その家名にひっかかる所はなかった。

良しきたとばかりに、タバサは取るべき態度を決めた。

「——じゃま。」

「!？」

「ど！け！て！」

「うっわ！嬢ちゃん？どうしたよ！」

「うるさいっ」

どけないならどいてもらうまで。そんな意志を込めて、タバサはバスケットを振り回す。

「わわわ！嬢ちゃん、落ち着こうや〜？」

ロウニア家の兄弟は無視することに決めたタバサは、チエイズだけを狙って行く。たいした威力などないのは解っている。

それでもほんの少しでも怯んでいただけでは解ればそれでよい。その隙を突いて逃げるから。

そのために『女・子供』に、甘そうなこちらを狙っているのだ。

「嬢ちゃん、いい子だから！落ち着けて！」

「悪い子で結構です！」

——ブンつと一際大きくかぶりを振った・・・よし！！行ける！

——タバサはそうと確信した。

見事チエイズの視界を塞いだ、と思えたその時。

「——・・・放しなさいよ」

「断る」

タバサの振り上げたバスケットは、ロウニアの若者の手のひらに捉えられていた——。

そのままウォレーンとタバサは睨み合った。お互い一言もなく無言のままだ。

タバサはバスケットをその手のひらに、ぐぐつと押し上げるべく力を込めている。対してウォレーンの方は難無く受け止め、びくともしない。しかも片手で、だ。

「~~~~~!!」

「・・・・・・諦める」

「やだやだ帰る!! 放して!~~~~そこどきなさいよ!」

【・・・・チェイズ】

背後からオオカミさんこと隊長殿の一声に、名を呼ばれた青年が頷いたのを見た。タバサがそれに気がつき、バスケットから目移したがもう遅かった。

ふわりと身体が浮く。足裏が何も感じておらず、後ろから抱え上げられているのを恨めしく思った。

腰に巻きつくがっしりとした力強い腕が、タバサを捉えているのだ。またしても『拘束』されたらしい。

隊長殿のご命令で。タバサは抱え上げられながら、オオカミさんを見下ろした。

「下ろしてよ!!」

「嬢ちゃん、あんまり暴れない、暴れない? な?」

そう背後からあやされて、むかつくから大いに手足をバタつかせた。

「わ、嬢ちゃん。あんまり暴れると、変なところ触っちゃまうからな? 大人しく・・・」

「~~~~やだやだ! 下ろしてつ、帰るの!! 帰るの・・・・っ・・・・!!」

なおも引き下がらず、強情を張る。逃れようと両手をつ張り、足をバタつかるのを止めない。

そう抗えば抗うほどチェイズの回された腕は、より深くタバサに食い込むかのようだった。

その事に焦りを覚えたタバサの抵抗は治まるどころか、ますます勢いを増した。

体の奥深くから湧き上がってくる焦燥感は、なだめ様がないのだ。

イヤだ。どうしたって逃れたい。

そんな思いに支配されて、タバサは頭を打ち振る。

「嬢ちゃん、暴れるだけ無駄だから、ここはひとつ大人しいくしてなつて……」

「——やだ」

気がつけば、タバサの視界はぼやけていた。力強かった拒絶の声も低く、くぐもって鼻にかかり始める。

「え？」

「……やだ！もう、やだ！帰る。帰るの！助けて、ルカにい、タリムう、……ララサあ……つく……うえっ」

タバサがいよいよと頭を左右に打ち振ると、雫が飛び散った。

それでやっとタバサは自覚した。自分が不覚にも泣き出してしまった事を。

（悔しい悔しい悔しい……イヤだつて言ってるのに。イヤだつて！でも誰も聞く耳なんて、持つちゃくれない。私がただの……『街娘』なのはわかるけど。取るに足らない存在なのはわかるけど！だからって、この扱いは悔しすぎる！……自分の無力さが悔しい！だからって泣いたりして、恥ずかしいっ……）

タバサは泣き顔晒すまいと、必死で涙を拭う。だが、雫は止めようもなかった。

次々と溢れては零れ落ち、受け止めきれない分が床石にシミを造る。

「【！！】」——泣かせた。

その事態に男三名はその場に固まる。

（——チエイズ。貴様が……変な事言いながら、抱き上げるから……）

（ちょ、ちよっと、待てい！——俺か？俺のせいというのか？お

（——もう、やだ。助けて……誰か！この際、誰でもいいから。誰か誰か誰か！！）

[illegible]

だれか。

それは強い光にも似た輝き。思わず、その光り放つ者に見えんと
興味を抱かせるほどの——光。

放たれた光を辿れば、その者へと導く道筋となる。

”
・ ・ ・ ・ ・何者ぞ。我を呼ぶのは？ ・ ・ ・小賢しい
”

（ ” ” あの御方以外で、この我を呼ぶとは——よほど……身の程を知らぬようだ ” ）

闇の中で紅い眼が開かれた。闇の中でそれは確かに意思を持つ。
まなこ
僅かに感知した光の方角に、眼差しが合わされる。

[illegible]

「な、何……なんか……!？」

【来る！！】

「来るぞ！」

「あゝやばいなあ……」

——タバサに次いでウォレスが、ウォレーンが、チエイズが。

異変を感じ取った者順に、声を上げていた。そして四名が視線を送る先もまた、ひとつ。

全員が女神像の前に注目する。その確かに息使いの感じられる、霧状の闇の塊を。

闇が集い始める。その様を息を詰めて、見守る。

そしてそれはゆるりと距離を縮めながら、徐々に形を取り出す。霧状であつた闇は色濃く、確かな重みを持ち始めた。

すべる様に移動するさまだつた闇から蹄が現れて・・・こつ、こつ、と。確かな足音を響かせる。

蹄持つ四つ足の獣は、頭を左右に打ち振る。そうして交互に紅い眼にタバサたちを映しているようだ。

彼の頭に生えた一角はその度に揺れて、異常に闇の中に浮いて見える。

そんな頭にいただく、枝分かれした一角の先端が向けられた——
先は。

【ダグレス！】

” ” ふん。——ロウニアの若造か ” ”

【貴様は裏切つたと聞く。神殿を、総団長・・・ギルムード殿を】

” ” 裏切つた？ 違うな。『聖句を振り切つた』のだ。言葉は過た^{あやま}ず用いよ、ロウニアのウォレスよ？ 我は主を選ぶ権利がある ” ”

【——して、何用だ！！ダグレス。神殿の枷を外したオマエが！？】

” ” 何。我を呼び起こす声が聞こえたからな。どれほどの術者かと、興味を覚えたまで・・・ ” ”

闇色の獣は首を低く構えて、睨み上げるように全員を見渡す。明らかに穏やかとは形容し難い雰囲気をまとい、同時に辺りに撒き散らしながら。

ダグレス——。そう呼ばれた、獣の歩みは止まった。その距離は僅か、十歩・・・あまり。

「——・・・」

なんて。なんて、きれい。こんなにうつくしい獣、初めて見た。

タバサは心を奪われ、全ての抵抗を忘れて見惚れた。

先程まで賛美して止まなかった、傍らのオオカミの存在は——消し飛ぶほど。その威力に平伏しかねない勢いで、食い入るように見つめる。

「・・・きれい・・・」

「——なんてこった！嬢ちゃん・・・獣を呼び出しちまったか！」
「チエイズ！」

思わずチエイズが漏らした呟きを咎めるかのように、ウオレーンが叫んだ。

しかし——。それも今一步遅かったようだ。『獣』はそれを、聞き逃さなかったらしい。

酷く挑戦的な様子で顎をしゃくり上げると、斜めから見下ろす。

まずはチエイズを。そして次いでウオレーンを。

それから最後にタバサを見据えた。

” ” 呼び出した、だと？この我をか？——我がこんな小娘に・・・
呼び出されただと？” ”

【ダグレス！！】

同じく闇色のオオカミは、獣の視線からタバサを庇うように立ち

塞がる。

” おもしろい。こんなちっけな、取るに足らない娘が？我を呼び出した、だと。・・・だとしたら、どうしてくれようか”

「・・・！！」

タバサは身の危険を感じた。今獣から向けられているのは、鋭利な刃と等しいもの。

初めてだ。こんな・・・明確な己を害してやろうという意志向けられたのは。

今まで・・・例えばどこかのオオカミの『弟』などから向けられたものは、取るに足らない可愛い物だったのだと思えるほど。

だがこれは違う。——『殺意』。そう呼ぶのが相応しかろう。タバサの全ての動きを封じ、痺れ上げさせるコレは。

今、彼の獣の一角の先が捉えるのは。

（——わたし、だ・・・）

その疑いような無い事実、タバサは息をのむ。

レシピ * 17 * 呼び出されて不機嫌な獣（後書き）

コミカルなのに、やや緊迫しちゃったのは『ダグレス』のせいです。

ええ。きっと。

レシビ * 18 * 小雀と紅い孔雀（前書き）

すずめもくじゃくも『雀』の字が入るのが、お気に入りです。

どちらもそれぞれ、かわいいものです。

——・・・ちびの分際で生意気な

なまいき？タバサ、なまいき？

——そうだ。オマエは私を愛玩動物のように、扱ったからな
こうやって、かわいい、かわいいするのは、なまいき？

——そうだ。ちびっ娘め。今すぐ改めぬのならば、荒野にでも置き去りにしてやろうかな。

これは——。まずい。お怒りだ。この『古神獣』様はお目にかかるのも、位の高い方でもないときつと許せないのだ。

タバサは慌てた。この事態は何事かとも思う。

オオカミさんと『ダグレス』なる、この黒い獣が顔知りそうなのもそうだが、向けられた感情の方に戸惑う。

タバサの体は固まってしまい、呼吸する事すら上手くない。

意識が遠のく気がして、浅く早い息継ぎを繰り返す。

「嬢ちゃん、大丈夫だから。しっかりな・・・？」

チエイズの腕は緩むことは無かったが、下ろしてもらえたので足は着いた。そのまま、庇うように彼は一步下がる。

代わりにすかさず一步を踏み出したのは、ウォレーンだった。何となく、以外だったので思わず彼を見上げてしまった。

そんなタバサの心中を察したのだろう。ウォレーンは少し呆れた

ような顔で、ぼそりと呟いた。

「・・・当たり前だろ」

何が――。そう切り返す間もなく、その背に庇われてしまった。低く唸り声を上げ牙を覗かせているであろう、艶めく闇色の毛並。それと並んで、剣の柄に手を掛けている黒装束の後ろ姿。

そして彼らという皆など眼中に無いといった様子の、紅黒い眼がまなこタバサを一直線に捕らえている。

彼もまた黒をまとっているのは、間違いが無い。それなのに、なんて・・・なんて暗くて深い。底が見えない。

それでいて何と、強烈に焼け付けてくれるのか。目を逸らしたいのに、逸らす事が出来ない。

飲み込まれてしまうかのようなのは、きっと魅了されてしまっているせいだろう。

（だって。飲まれてもいいと思ってしまうもの。きれい、すぎて。

危険だね、この思考、振り切らなきゃ・・・！！）

タバサはぎゅっと目を瞑つむって、頭を振った。瞳を閉じていてさえも、目の裏に浮かぶのはダグレスの紅黒い瞳だったが。

「私。本当にただの『小娘』でしかないのは、確かです。――それでも。何かの間違いでアナ様を不愉快にさせてしまったのなら、謝ります。本当に・・・ごめんなさい。私になど呼びつけられてさぞかし心外だった事ですよね。お忙しいところ、本当に・・・ごめ・・・なさ、い・・・」

ここにいる誰もが彼――ダグレスには敵わない。これは確信。――オオカミさんですら、例外なく。

それなのに、ここに三名は獣に立ち向かう気である。到底、敵う相手でないという事は――百も承知だと思っ。

タバサがひししと感ずるのは、桁外れの存在感の強さだ。

獣の体軀の見事さもさることながら、まとう空気から何からが違
う。

圧される、のだ。彼の眼差し一つ喰らっただけでこのザマだ。術
者でもないタバサが分ることが、この三名が分らない訳が無からう
に。

ソレなのに、タバサを庇っている。冗談じゃない。敵意向けられ
るのは、自分一人で充分だ。

何せ、小娘の分際で獣サマを『呼びつけて』、ゴキゲンを損ねる
ようなマネをしたのはタバサなのだから。

だからタバサは素直に詫びたのだ。

そんなタバサの態度に気を良くしたのか、わずかにダグレスの首
が持ち上がった。タバサを捕らえて離さなかった、角の切っ先も外
される。

” ” ほほう小娘。己を弁^{わきま}えているな。なかなかいい。それならこ
の無作法も大目に見てやろうという気にもなるな”

【ダグレス！！貴様、何様のつもりだ！】

” ” ふん、若造が。黙っておればかわいげもあるだろうに。オマ
エもこの娘を見習うがいいさ”

（そうです！！オオカミさん・・・隊長殿は黙っていて下さいい！
鎮まるものも鎮まりませんから！！）

そんな気持ちで前面に押し出して、眼差しですが。必死も必死。
一瞬人差し指を立てて、唇に当てて見せた。

（本当に空気読んでくださいねえー！！こういう相手はです、謝
って謝って謝り倒すのが一番なんですよ！戦っちゃダメ！）

「ごめんなさい！重ね重ねのご無礼お許し下さい、ダグレス様！」
タバサは叫ぶように謝罪した。出来ればオオカミさんにもそうし
ていただきたい所だが、まず・・・無理そうだからタバサが代わり
に。

気づけばその様子を、紅い眼が窺っていた。いくらか興味を覚えたらしい、獣は尋ねた。

” どうした娘よ。何を泣いていた？この無礼者どもに何かされたか？”

「私。嫌で。逃げたくて。でも、放してくれないから。誰でもいいから、助けてって。思っちゃったの。そうしたら、あなたが来てくれたの。でも、ご迷惑でしたね。ごめんなさい。私のことは構わず行って下さい」

” ……ふん。小娘に言われるまでもない。——しかし、小娘。名は何と言う？”

タバサはダグレスの瞳から幾らか、敵意が薄れたのを感じ取って、胸を撫で下ろしていた。どうやらお怒りからは免れたようだ。

獣は悠然と背を向けてくれたから、行ってしまふのだろうと。一息ついて、その背に答える。

「タバサです。タバサ・フォーラム——」

” ……ふん”

ダグレスは向けたと思った背を、くるりと反転させるとそのまま一息に……跳びかかって来ていた。男二人の『砦』を軽く跳び越して。

【タバサ！】

「チェイズ、よける！」

…

” ……そうか。タバサ……我を呼びつけるだけでは飽き足らず、このダグレスの名を呼んだな”

(・・・・・・・・え?)

『呼んだな』

よくも。

身の程知らずめ。

そう言われた気がした。タバサが先ほど獣の呼んだのは間違いない。だからタバサは認めるしかない。

タバサが首を縦に振ったのを、ダグレスは見届けたのだろうか。気がつけば、タバサの視界は闇で占められていた――。

。。。。。。。

”身の程知らずな行いの代償。その身で支払って貰うぞ”

そう闇に包まれながら、囁かれたのだけは覚えている。それだけだ。

後はどのような状況でこうやって、こうして、こんな・・・こんな豪華な造りの部屋にへたり込んでいるのが・・・分らない。

こうして座り込む床の敷物は、ゆったりと体が沈むほどのふかふか加減が心地よい。細かく孔雀の羽根を模して、デザインされた敷物だ。

尾を広げた孔雀に迎えられているかのような、そんな気分にしてくれるようだ。

・・・こういうのは、寝台の上にこそ相応しいのではないでしょ

うか。と、思わず言いたくはなるが。

あまりに繊細でキレイだから、踏みつけるのがもったいない気がする。

タバサは無意識のまま、その敷物を撫でて感触を楽しむ。

暗くなりかけた室内は薄明るく、まだ蠟燭に火を灯さずともぼんやりと浮かび上がって見える。

それは多分——柔らかい純白の布地を、ふんだんに用いているせいだろうか。

寝台の天井から吊るし垂れ下げられたものも、窓を覆うカーテンも、こうして背を預けるようにと手渡されたクッションも。

タバサにはおおよそ、これから先も縁の無さそうな豪華な室内に圧迫感を覚えてしまう。

（えーえー……と？ええ……と、ですね？ここは一体、どこでしょう？そしてこの……）

タバサは室内を一通り見渡してから、クッションを手渡してくれ——少女の方を見た。恐るおそる、遠慮がちに。

少女……といってもタバサよりは、少しばかり大人びて見えた。体の造りは恐ろしいくらい華奢で、自分の方が発育がいい。

それでも澄み切った空色の瞳で、まっすぐにタバサを見つめてくる落ち着いた様子、形の良い唇を持ち上げている様やらが……タバサの胸をドギマギさせるのだ。

何と言うか……色っぽい。女の魅力とでも言うのか。それが体中から発せられている。そんな雰囲気、同性から見ても魅力的に思えた。

彼女はタバサを見つめながら、小首を傾げた。さらりと長い赤毛

が、一緒に流れる。

全体がゆつるりと波打った髪は、少女の鮮烈な赤という印象を和らげて見せているようだ。

「……………」

無言でぱちぱちとせわしなく瞬きを繰り返しては、タバサを見つめる少女の瞳の睫毛は豊かで、目尻が下がって見える。

ますます彼女の温和さが、にじみ出ているかのようだ。まるで。

そう、まるで。砂糖でこしらえあげた、菓子人形のようにではないか。

（……………うわあ。かわいい。この人、かわいいなあ……………キレイだし）

タバサが思わず見惚れて、言葉を発せずにいると少女が口を開いた。

「ねえ、アナタ？名前は何て？どこから来たの？」

——声までがかわいい。透明で。それでいて、少し鼻にかかる調子が甘ったるくて、くすぐったい。

「え、と。タバサです。タバサ・フォーリウムです。えとですね、神殿前広場にいたのですが……………」

「そう。私はね——」

少女が自分を指差しながら、何か言いかけた。その時。

慌てたように扉がノックされたかと思うと、返事も待たずに扉が開けられた。

「デイナーさん、入りますよ！こちらに侵入者の気配があると報告が……………！！！」

乱暴に開け放たれた扉の方に注目すると、青年がタバサを見るなり固まったのが分った。

「——！？」

そんな様子を気にも留めず、デイナーと呼ばれた少女は答えた。

「フィルガ殿。かわいらしい女の子が遊びに来てくれたんです！
え？」

にこにこ無邪気に言い放つ、この浮世離れた美少女は一体・
・・・。

そして。そんな少女二人を沈痛な面持ちで見下ろす、この青年は
一体。

タバサは青ざめて見上げるしかなかった。

「ダグレス。――返してきなさい！」

フィルガと呼ばわれた青年が、獣の名を部屋の隅に向かって叫ん
だ。ダグレスは闇の中から、ゆったりと姿を現す。

” 断る ”

――ふ。そんな・・・蔑みが込められてますよね？ソレ。その、
鼻息。少なくともタバサにはそう取れた。

タバサは気高い獣と、こちらも負けずにどこかしら（いや、もう、
存在まるごと全部か）がレベルの高そうな御方とのやり取りを見守
る。

「ダグレス！このジャスリート家に誘拐犯の汚名を着せる気か？」

” ” そうか。そうなるのか。それはいい。オマエが被ればいい気
味だな。くつくつく・・・それは愉快。ではありませんか、嬢様？

” ”

「ダグレスもこう、イジワルしないの」

” ” 冗談ですよ、ディーナ嬢さま。この者は小娘の分際で我を呼
び出しましたからね。嬢様のお目に掛けて差し上げたかったです。

どうです？この小娘を目くらましに使えば小うるさい獣らの目を、嬢様から逸らせるやもしれませぬよ”

「ダグレス！いい加減にしろ」

青年の言う言葉などには、聞く耳持たず。そんな意志が感じられる黒い獣は、淡々と続ける。

”——このような小すずめ。『紅孔雀』の嬢様の身代わりが務まると思えませぬがね。少しは退屈も凌げましょうよ”

。。。。。。

（獣から目を逸らすための、おとり？退屈しのぎ？それこそ、冗談だって仰ってくださいませですよ！ダグレスさま！！）

得意げに胸を反らせている黒い獣に、タバサはかける言葉を失ってしまった。

なんて。なんって！！タバサの意志及び存在価値など、まるっきり無視しまくったお心。その発言、発想は何なのでしょうか。

いや。もう、獣さまにそんな事を求める自体がどうかしているのか。まあ、そんなところだろう。

タバサは泣けるのを乗り越して、笑えてきた。

（ごめん。ララサ。父さん。今日中には・・・帰れそうに無いかも・・・）

そう思い当たったら、やっぱり泣けてきた。

レシビ * 18 * 小雀と紅い孔雀（後書き）

ダグレスは、男には一際冷たいです。

『嬢様』以外は、どうでもいい。

ディーナ・赤い髪の少女。天然。

フィルガ・ジャスリートの苦勞は・・・次回以降も続く。

（エンドレス。）

レシピ * 19 * 気に入られた小雀（前書き）

ララサ。彼女は普段はくですが。

タバサがからむと、豹変します。

レシピ * 19 * 気に入られた小雀

——タバサちゃん、どうしたの!?

ララサ。うん、だいじょうぶ……。

——じゃ、何で泣いているの? いじめられたのっ!!

………。も、だいじょうぶ……だから。

——誰? タバサを泣かせたのは、誰っ!

ラ、ララサ。お、落ち着いて……!

「……それで? タバサちゃんをどこへ攫さらわれた、ですって?」
聞こえなかったんですけど。

そんな少女の言葉に……再び答えることが、なかなか出来ない。

「……ウオレーン?」

「ラ、ラサ」

「アンタ、ウオレーンでしょ。答えてよ!」

「なぜ、俺がウオレーンだって判る?」

「——判るわよ。そんな事より、アンタこそちゃんと質問に答えなさいよ。タバサちゃんをどこに、連れて行かれたですって!」

「ジャスリート家。．．．．．恐らく」

「恐らくう？何よ、それ！しかも、何で公爵家！！」

「兄上が今追っている」

「ああ、そう！解ったわよ——アンタらの家絡みの因縁に、うちのタバサを巻き込んだって訳ね？どうしてくれるの？」

「．．．．．すまない」

「すまないですむもんか。許さない。タバサちゃんを無事に返してもらわないことには、許さない。．．．行くわよ、ウォレーン！」

「行くつて、どこに」

「ジャスリート家に決まってるでしょう！！グズグズしない！！」

「．．．．．」

「返事！！」

「．．．．．ハイ」

チエイズはそんな圧されっぱなしの幼馴染と、少女のやり取りを眺める。正直、口を挟む隙など無かったただけだが。

そんな二人を、黙って見送ったチエイズである。

それ以前にララサからは、存在からして無視されたというか。視界にすら入って無かったというか。

彼女の妹を心配しての事だろう。ララサはいつにない勢いで、食って掛かってきた。それだけ取り乱していたのだろう、彼女は。帰りの遅い妹を心配して駆けつけて来てみれば、この有様では無理も無い。

それでも、気配でウォレーンのヤツがこちらを窺ったのはわかった。

——わかったから、早よう行けやと手を振って見せたのだ。

今だ術が抜け切っておらず、立ち上がることもままならない。そんな不甲斐ない団員は何の役にも立ちはしないのだ。

チエイズは頭を打ち振る。ダグレス。あの闇に属する獣に、して

やられた。一撃喰らったのだ。

牙や巨体による物理攻撃ならまだしも、あの獣は目くらましに闇をぶつけてきやがった。その途端にチエイズの視界は闇が占めた。振り払う事も敵わない、あの意志持つてまとわりつく闇に！

闇薄れる頃には、タバサは獣に連れ攫われた後であり、自分の失態に悪態をついたところでどうにもならない状況だった。チェイズは両手で己の瞳を抑え付けると、叫んだ。

「あーっ・くっそーっ！！ホント嬢ちゃん、ごめん……」

空しく響き渡る声は、聞かせたい少女に届く事はない。

[illegible]

「——ふうん……これまた可愛らしいお客さまだこと。ねえ、フイルガ？」

（『うん』と一言いなさいな。そんな無言の圧力が込められているような気がします。気のせいではない気がします。）

ここはひとつ『方便』^{うそ}でも『うん』^{うそ}といっておいた方が、身のた
めのような気が致しますが・・・？）

タバサは密かに、無言を貫き通そうとする彼を見守った。騒ぎを聞きつけて現われた、この品の良さげな老婦人。

もとは金の名残をうかがわせる白髪を束ね、目に鮮やかな深緑の装束に身を包んでいる。重厚さを感じさせるこの部屋のしつらえ同様に、彼女もまた同じものを醸し出しているような。タバサは婦人の堂々とした所作に、彼女がこの館の主人なのだろうと見当つける。

（——まずそれは、間違いないだろうと思われるがいかがでございましょうか？）

尋ねてみたいが、今はそのような雰囲気ではない。タバサは身を固くして、婦人の出方を待つ事にした。

婦人が扇を操る様などは、舞を見せられているかのような優雅さだ。ゆつたりとした洗練された仕草の彼女だが、凜と通る声は力強い。

逆らうのを許さない・・・というよりも、逆らう気など失せてしまふような。

そんな婦人の持つ犯し難い品格らしきものに、すっかり押され気味のタバサはハラハラのドキドキで・・・思考ですら言葉使いがぎこちない。

「まあ・・・確かに。そうかもしれませんが・・・注目すべきはもっと！違うところにあるでしょう？」

（認めた、というか。言われました感たっぷりでありますね。当然か）

「まあ？そうおーそうかしら」

「・・・彼女が一体なぜこの館にいるのか。しかも獣を見ても驚きもしていない！それでも——見たところどう取っても、彼女は術者でも侵入者などではありません。そんな普通の娘がこの館にどうやって来れたとお思いですか？」

（ハイ。わたくしめも、そう思います・・・そこら辺に注目してください）

タバサは心の中で、青年に声援を送る。彼は一番『常識』がありそう。タバサがこうしてここにお邪魔している事に、異を唱えてくれている。

（ゼヒ！ゼヒ、その調子でお願いします。私の代わりにお伝え下さい。）

丸投げで申し訳ないが、その方が流れがいいと思われる。

「そうねえ。——ねえ、アナタ？お名前なあに？」

「……っえ、と……」

「タバサちゃんです」

一瞬気後れしたタバサの代わりに、ディーナお嬢様が答えてくれた。にこにこ嬉しそうに。それまた嬉しそうにニコニコしながら、この老婦人はお嬢様を見つめた。

「そう、ディーナ。嬉しいわよね、こんなかわいいコが遊びに来てくれたんですもの。ありがとうね、タバサちゃんや？どうぞゆっくりして行って頂戴ね。くつろいで。そんなにかしこまらなくていいから」

「いえ、そんな。その——何と申しましょうか……」

（いや、遊びに来た人ではなくてデスね……無理やりつれて来られたと言った方が正しいのですが……ダ、ダグレス様っ！！）

タバサはさすがのように視線を、ダグレスに投げ掛ける。お嬢様の傍らでゆったりとくつろぐ獣様は、そんなタバサなどお構い無しだ。（無視ですか！！）

存在からして丸っきりの無視。タバサは自分がうんとチツポケな虫つけらになった気分を味わった。とほほ、である。

いや？存在すら気にも掛けてはいない様子……だったら、虫けら以下か？

「——ダグレス。貴様……いい加減にしておけよ？」

掛ける言葉さえ発せられないほど、がっくりと肩を落としたタバサに代わって、またしても青年が助け舟を出してくれた。

それがタバサには本当に心強く感じられた。何と言うか。お嬢様も老婦人も……タバサをすぐには離してくれそうも無い。

なにやら歓迎されているのは分る。分る……が。タバサで遊ぶわたし気、満々ですよね？——だから優しい言葉と態度で接してもらっても、気後れするのだ。

その点この若様は違っ！タバサを早い所もとの場所に返したがっ

ている。要は、厄介事の予感を。

（ありがとう！ありがとうつ、若様！アナタ様は私の心の船頭さんです！！その舵取りに身を任せてしまえますので、よろしくどうぞ！です）

せめて必死になつて声援を送る。心の中で。それはタバサの拳に表れていた。知らず知らずの内に力が込められて、手に汗を握る。

ダグレスはそんな青年に一瞥くれただけ。その紅黒い眼はなかなか迫力だ。

対する、曇天の瞳も負けてはいないが。

そんな睨み合いが続く。——このままでは、らちが明かない。そう思つたらしい婦人が口を挟んだ。

「ダグレス。アンタがこのコ連れて来たんでしょ？説明しなさいな」

” ” この娘。生意気にも我を呼び出したからな。しかも名を呼びおつた” ”

「呼び出した？」

” ” そうだ。なにやら神殿の若造どもに囲まれて、泣いていたからな。だから、つれて来た” ”

「そうなの？タバサちゃん、どうしたの。神殿の人間に絡まれたのですか？何か問題でも？」

神殿。その言葉が出た途端、タバサを取り囲む三人の表情が強張るのが解つた。いつせいに視線がタバサに集まる。

「いえ、あの・・・ですね」

タバサはたどたどしくも、今までの経緯を順を追つて説明した。

・・・・・

自分が神殿前で、菓子と飴とを商っている事。

ひよんな事から神殿の護衛団の隊長殿に、この春の祭典の乙女役を引き受けて欲しいと言われた事。

——それをタバサは断り続けていること、それがなかなか聞き入れてもらえず・・・困った挙句助けを求めたこと。

「・・・と言う訳でして。どうやら私『獣の声が聞くことが出来る』という『獣耳』という『能力者』だから、乙女役の候補に上げられたようでした。私祭典の日は家業が忙しいのでと、重ね重ね『お断り』申し上げているのですが・・・」

ふうとタバサは一息入れた。

「そうなの。アナタは他のお嬢さんを候補にしてくれと言っているのに、その隊長殿は聞き入れないのね？」

「はい」

「——当然だと思っわ」

「ええ？そ、そんな。困りますっ！なぜですかっ？」

「わからない？わからないのね。そりゃ、彼が躍起になって、強引にもなるかも。ね？？ファイルガ？あ？」

「・・・ま、確かに。これから告・・・『説明』するところだったんじゃないですか？そこを、この世話焼きが」

” ” ふん ” ”

「神殿の護衛団ねえ・・・流石に私も管轄外だわ。でも、まあ一応その隊長殿のお名前知ってるかしら、タバサちゃん？」

私が口を挟むのも野暮なだけだねーと、付け足しながら婦人は訊いた。

「はい。えゝ・・・とですね。『ウオ・・・う、オエ・ロウニア』

？——すみません、発音が難しくてうやむやですが・・・」

「『ロウニア！？』」

婦人、青年、お嬢様。御三方の食いついた箇所は一緒だった。

「ロウニア家か。よりによって」

「まあ。現・神殿の有力者の一族だしね。当然といえば、そうなの

かもしれないけど・・・ダグレス？あんだ、どうしちゃったの」

”——いや。ロウニアの若造とはまあ、顔見知りだったからな。そんな奴等に囲まれて、この娘は泣いていたのだ。連れてきてやろうという気にもなるう？今は嬢様にお仕えするわが身からしてみれば。あの一族は執着した者には、容赦なく権力任せなのかと、ふと・・・呆れてみた次第さ”

「——そうでしたか。ありがとうございます。その、助けていただいて。ダグレス様」

存在を、名前を呼んだから。そんなのは生意気だ。

そう彼は言っていたが、それはただの『理由』をこしらえあげただけだと思えたのだ。今の話を聞いて。

タバサは試すように、彼の名を再び呼んでみた。これでまた怒りを買うようなら、タバサが悪い。しかし彼は怒らないと思うから、呼んだのだ。

（ダグレス様。それは気まぐれなのでしょうが、一応親切に取れないことも無い気がします。だから。）

ありがとうございます。なのだ。タバサはまたじろりと睨まれてから、そつばを向かれたがもう気にしなかった。

——やはり、彼は怒りを感じさせることは無かった。改めて、ペこりと頭を下げる。

「あらま。珍しい事するなと思ったら、ダグレス。このコ、気に入ったのね。うん、わかるけど。このコ、いいわね。かわいいわ」

”嬢様には遠く及ばぬ小雀だがな。まあまあ、だがな。まあまあ、いいだろう？”

レシピ * 19 * 気に入られた小雀（後書き）

タバサを猛烈心配組代表・ララサ。同じくらいに心配している彼は・・・今回出番なし

いや。みんな心配してますが。

『ジャスリート家』の皆さん、タバサで遊ぶ気満々です。帰す気ない。ぜえんぜん、ない。

ある意味もつと、厄介なお人達に気に入られましたと、気づく（はずの）次回です。

レシピ * 20 * 紅孔雀の率いる誘拐団〜結成〜（前書き）

遊ぶ気満々のジャスリート家のみなさん。

——約一名は除く。

——で？どこの誰なの？タバサちゃんをいじめるのは！

えと・・・ねえ。あの、最近広場にいる背の高い・・・黒髪の・・・『護衛団見習い』の男の子

——ええ？そんな奴が何だって、タバサちゃんにいじわるするの？

わかんない。でも、いつもからかってくるの。変な名前だって。無視してやり過ぎそうとすると『何で俺の名前が呼べない』って、怒るの

——・・・え・・・それって・・・もしかして

もしかして？

” ” たいへん！たいへん！——侵入者の影あり” ”

” ” ・・・たいへん！——影、あり” ”

火急を知らせるためにと、勢い良く扉が開け放たれた・・・訳ではない。

（え？ええ？・・・今、どこから現われたの？このコ達！）

勝気なタバサが思わず怯むほどの、視線を散らしてくれたのは。

そんな風に突然現われた二羽の孔雀だった。

タバサの視界いっぱいには飛び込んできた、それはそれは目にも鮮やかな藍色の羽毛である。

孔雀はそのまま、ディーナ嬢の左腕に止まった。もう一羽は、フィルガ殿の右腕に落ち着く。

「まあ、ほんとう？それは、たいへんね。それで、どうしたの？ウラン？ヨウラン？侵入者の様子は掴めたの？」

孔雀たちの報告を、おつとりと受け答える。その様は全然大変そうじゃない。

流石はお嬢様だ。見習わねばとタバサは感心する。

”つかめた。黒い、獣だ。うろついているだけで、まだ館には入って来れていない。だから報告しに来た、ルゼ！フィルガ！ディーナ！”

と、ディーナ嬢の孔雀は威勢よく言い放つ。少し得意げに、興奮しながら。

”——獣だ、ルー。フィー。ディー。”

対するフィルガ殿の一羽は、控えめに繰り返した。落ち着き払って、遠慮がちに。

「そう。ありがとうね、お利口さんたち」

「ご苦労。えらいぞ、おまえたち」

孔雀たちを労い、二人は指で二羽の頭をくすぐってやる。クウルルルルル・・・と喉を鳴らして、二羽は目を細めてご満悦の様子だ。

（なんて、絵になるお二人何だろう。——何だか『お似合い』の二人ってというのは、このお二人のためにある言葉みたい）

対になって孔雀を愛でる凜々しい青年と、たおやかな美少女。フィルガ殿は何というか。顔立ちもそうなのだが、その身のこなし方

が洗練されている。ちゃんと真っ直ぐに伸ばされた背筋の立ち姿や、タバサなどにも丁寧な言葉使いで接してくれたり気使ってくれたり。感謝のあまり平伏してしまいそうに成る程。

その片割れのように彼の側に立つお嬢様は、何と言ってもその艶やかな赤い髪が、目に焼きつくほど印象的だ。かといって、きつ過ぎるものではない。それはゆるやかに波うつうねりが、光をうまい具合に反射してくれるおかげだろうか。目を奪うのはその、あでやかな光沢のなせるワザだろう。きつと。

そんな二人は、まるで絵画から抜け出てきたかのような。それは幻想的な眺めだった。

「……なかなか様になる、ふたりでしょ？」

思わずタバサが見惚れていると、老婦人が扇で口元を隠しながら呟いた。どうやら見透かされていたらしい。

タバサは言葉飲み込んだまま、こつくりと強く頷いた。その横顔を眺めて、婦人も満足げにニンマリ笑った。

だがそれに、タバサは気づかなかった。

二人に夢中だったせいもあるし、婦人が扇の陰で顔半分を隠していたせいでもある。

そんなこちらに、ふと孔雀が視線を投げる。

”…….…….おお！！ここにも侵入者がいる！侵入者がいるぞ、ディーナ”

孔雀は真っ黒い左目を、キロリとタバサに向けた。

「違うわよ、ツウオラン。お客さまよ」

ディーナ嬢は優しくそれを諫めてくれた。それでも納得行かないもう一羽の方からも、右の目玉を向けられる。王冠の様に頂く、頭の飾り羽根をふくらませているから、威嚇しているのだろう。

”いや、侵入者だ！ディーナ？我等の許可無く館に入るものは、

侵入者だ”

フィルガ青年も、いぶかしむ孔雀をきっぱりと諫めてくれる。

「違う、客人だ。ヨウラン。——ダグレスが連れてきた。……それで、黒い獣？」

” ああ。『犬・狼』型——見たところ、黒いオオカミだ。しかし、術の気配があるから『幻術』かもしれない。狼は見せかけの姿か。本体は別どころにあるか。それはフィルガ、おまえが見極める”

「……オオカミ！！黒い、って……。『オオカミ』さん？オオカミさんが来ているのですか？どこですか！」

その報告に、タバサの体が跳ね上がった。慌てて扉の方に向かったタバサを、さりげなくルゼ婦人が立ちはだかる。

「——なあに？タバサちゃんの知り合い？」

「え……と、多分。オオカミさんは『隊長殿』です。その、ロウニア家の。真っ黒の毛並がツヤピ力で、蜂蜜キャンディーみたいな瞳をしているんです」

「あら、そう。なかなか素敵な彼なんじゃない？」

「はい。ずっと抱っこしていたくらいに、なかなか」

「……ロウニア家のオオカミが、隊長？神殿の護衛団の？」
タバサの説明に、フィルガ青年が疑問の声を上げる。その声に答えたのは、ダグレスだった。

” そうだ。ロウニア家の『獣筋』の若造どもだ。まったく、色気づきおつてからに！そのくせやり方は幼稚なままだから、娘は途惑うのだ。なあ、フィルガ？”

「——何だ。何が言いたい、ダグレス？」

” ふふん。なあ、ルゼよ。コヤツめも図体ばかりでかくても、中身ときたらてんで幼いままで・・・困ったものだよなあ？”

「そうね？そうかも、ねえ？」

—— ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ 。

なにやら気の合う、ルゼ婦人とダグレス様のようである。恐らくお二人にかかつては、この立派な青年もどうやら幼い子供のまもらしい。

それが何かを揶揄しての事らしいのは、タバサにだってわかった。そして、ちらりと盗み見たお嬢様は。

（その意味する所を・・・深追いしよう何て、考えてもいらっしやいませんよね・・・？フィルガ殿の苦悩はどうやらその辺りに、あるような気がするんですけど。ディーナ様？ねえねえ、ディーナさくま？）

他人事には目ざといタバサは、心の中で呼びかけてみる。それは『心の船頭』さんに対する、せめてもの恩返しのもり。

—— ふうん。とその様子をこれまた小可愛らしく小首を傾げて聞いている、ディーナ嬢様の空色の瞳が輝いたと思った。そうタバサが見止めた瞬間。

ぱしんと小気味良い音を立てて、ディーナ嬢の手のひらが彼女の胸の前で合わされていた。

（もしかして、届きましたか！お嬢サマ！！・・・だとしたら私、やりましたよ！船頭さん！！）

タバサはちよつとだけ期待して、どぎまぎした。一人で盛り上がるって、一人で緊張してしまう。

「——ねえねえ、ルゼ様。ダグレス。ちよつと、ちよつと！お耳を貸して下さいな。いい事思いついちゃった！」

そんな——宝物を見つけたとでも言い出しそう。そんな風に無邪気に笑いながら、お嬢様は手招く。

「何なに？デイナー？」

” ” はい、何でございましょうかな？嬢様？”

くすくす笑いながら、この目の前の少女は楽しそうだ。

そんな彼女に手招きされた二名も、どうやらお嬢様のいう『いいこと』に参加できるらしい。

こちらも浮き足立っているようだ。声が弾んでいる。

” ” デイナー！何だなんだ？いい事とはなんだ？”

” ” ——いいこと何だ？デイナー！！”

孔雀たちも仲間はずれが嫌らしく、我にも我にも！とはやし立てている——。

（届きませんか、やはり！）

タバサはそんな楽しそうな集まりを、ただ、ぼつねんと眺めるしかない。自分はまあこの館で本場に部外者だから、わかる。わかるとして……問題は、この——。

（力不足で申し訳ないです……）

タバサはちらりと傍らに立つ、この背の高い青年を盗み見た。横に立っている気配だけで、彼が洩面なのが窺える。

それを確かめるべく、そして同じ『仲間ハズレ』同士慰めあうべく。視線を送ってみた次第である。

「あ……の……」

「……また、この人たちは全く。すみません、タバサ嬢。少し付き合ってくださいませんか……」

——彼のこの館での立ち位置というか。タバサは同情に近い気持ちを抱きながら、役割を理解できた気がした。

「は、はい？」

——あの、仰っている意味がよくわかりません……が。
そう言葉を続けるよりも早く、それぞれが『作戦』なるものを発表する。

「だからね。タバサちゃんの身柄は、このジャスリート家が預かりました」

そう——やたら敵かに、ルゼ婦人が告げた。

その調子がオオカミさんに『君を春の乙女候補にするから』と言われた時と、まるつきり同じ調子なのは……参った。

要はタバサの都合及び意見は、はなっから却下の構え。

「……は？ハイ？あの？」

「さて。それで攫われた『姫君』というのは、『塔』に囚われるのが古今東西の定石——ねえ？」

「え？そうなのですか？私そもそも、お姫様じゃありませんよ？ただの街娘……」

「はいはい、姫〜行きますよ！ついていらつしやい。フィルガ。そろそろ暗くなってきたから、灯かりを持って来て先導なさい」

「……おばあ様」

” 何だ。せつかく仲間に入れてやろうというのに。乗りの悪いヤツだな、フィルガ？”

「やかましい、ダグレス。これは何の悪ふざけだ！」

” ” お？我を咎めるのか。それは筋違いというもの。文句があるなら、嬢様に訊いて見る”

—— 訊ける物ならな！！そうダグレスはあざ笑うかのように、勝ち誇っている。

どうやらこの場で、ディーナお嬢様に敵う御仁はいないらしい……
・というのが、タバサにもわかった。

「オマエが！元はといえば・・・オマエがつ・・・・・・・・！！」

——こんな厄介ごとを連れてくるからだろう！

おそらくタバサの手前、その言葉は飲み込まれたのだろう。タバサはそう推測して、申し訳なく思った。

「さ、タバサちゃん。行こう」

取り囲まれて、ただ状況に右往左往しているタバサの手を、優しい感触がすくった。

ディーナ嬢だ。それに次いで、ルゼ婦人からも右手を取られた。

「・・・ど、どこ、どこへですかっ!？」

「「」 塔 「」」

いつの間にやら結成されていた『紅孔雀ひきいる誘拐団』。

その一味に包囲されるかのように、タバサは手を引かれながら進む。

左手の首謀は、赤い髪の美少女と来た。

右手の参謀は、品の良さそうな老婦人。

実行犯に、漆黒の獣と二羽の孔雀を引き連れて。

——共犯者には、参謀殿の孫。明らかに脅されて、巻き添え食って『やらされてます感』たっぷりであります。

攫われたのは『春の乙女』候補、タバサ。

要求は『神殿の護衛団』隊長、ロウニア家のオオカミに科される。
・・・らしい。

「あの、ですね・・・？オオカミさんを、ど・ど・どうするおつもりなのでしょいか？」

「んん——と、脅す？一度と姫に近付くな！ってね」

とは、参謀殿。

” ” それでは、我らが蹴散らしてやろうかな。力ずくで ” ” とは、実行犯たち。

「待って！待って下さい、オオカミさんは強引ですが、別に悪いオオカミさんではありません！多分私を心配してここまで・・・」

タバサはせめてもの抵抗として、立ち止まろうと歩みを止めた。それでも両手を引かれているため、やむなく引きずられるように歩くしかなくなる。

「心配？　そうなの？　タバサちゃんを泣かせたくせに？　そんな悪いオオカミは、ダグレスに任せてやっつけてもらえば、いいじゃない？」

——やわらかな口調でさらり告げると、首謀の美少女は笑った。

「な、何を言い出すんですか！！そんなの、ダメですよ」

「だって。タバサちゃん、泣いていたのでしょう？——嫌なのに無理やり『春の乙女』とされてしまいそうで。そんな風に困らせる、彼が嫌だったのでしょう？」

「は、はい。まあ、そうですね」

「だったら、いいじゃない」

くすくす。ころころと小さな鈴を転がした時みたいに、お嬢様は歌うように続ける。

「——タバサちゃんが、彼がどうなるかだなんて。．．．気に掛ける必用なんてあるの？」

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
○

—— オ、オオカミさんっ!!

レシピ * 20 * 紅孔雀の率いる誘拐団く結成く（後書き）

タバサよ。なぜ、他人の事には察がいいんだ。

ディーナ嬢も。

お互い気づかないのは、なぜでしょう？

がんばれ、オトコノコ達！！

レシピ * 21 * 誘拐団の本拠地へ潜入へ（前書き）

仮タイトルは「そういえば」でした。

そういえば、ここって。「どこでしょう?」

何かしら馴染んでいたから、忘れてた——!!

レシビ * 21 * 誘拐団の本拠地へ潜入へ

——うん！はい、わかった。

．．．．．何が？

——明日から担当区域を代わります。タバサちゃんは商店街の方、
お願いします。

．．．．．え？

——はい、決定。はい、解決。『お姉さん』に任せなさい。

．．．．．『お姉さん』???

塔とやらに案内されるかと思いきや。

「とりあえずお客様におもてなしもまだだったわねえ」

と参謀殿——婦人が言い出した。

「そういえば、そうですね。タバサちゃん、喉が乾いたでしょう？
お腹は空いていませんか？」

つい先ほど物騒ともとれる冷たい一言——『やつつけてもらえば
いいじゃない』を発したのと同じ唇から、優しい言葉を掛けられる。
「え？あ、いえ．．．おかまい無く．．．」

タバサは訳が解らなくなってしまう。

コツコツと響く己の足音が嫌に耳に届く。先頭に行くフィルガ殿

は、歩幅がやはり女性とは異なるからか気持ち早い。

それでも、あまり離れすぎると灯かりが届かなくなる。その辺りを配慮して、時折り振り返る。

その彼の時折り、目が合った。正確に言うと、彼がお嬢様に気遣わしげな眼差しを寄こすから。

タバサは気が付く。彼が気に掛ける女性はディーナお嬢様。だからこの事態にも付き合ってくれている。

ディーナお嬢様の方は・・・何やらゴキゲンなのは解るが、彼の気遣いにはてんで気が付いていなさそうだ。

その事でタバサが、どうこう口出ししても仕方が無い。それでもなぜか、ため息モノだとは思う。

コ・・・ツ、コ・・・ツと、響く足音が嫌に耳に障る。

石造りの足元はあまりに整然としすぎていて、タバサのつま先を拒むかのよう。足先から、冷やされて行く感覚に痺れた。

（そういえば・・・そういえば。ここはどこですか？）

「タバサちゃん、どうかした？」

急に不安に襲われて、タバサの歩みが今にも止まりそうになった。思考も視界も不安にさいなまれて、ぼやけてくる。

タバサ？

誰かに名前を呼ばれた。——しかし、今のタバサには遠くでしかない。

その声音がいくら優しくろうとも、タバサの耳に心地よからうとも、なじみが無いから。

父さんでもない。ララサでもない。ル力兄にいでも、タリムでもなければ、商店街の優しい皆でもない。

陽気なお調子者のチエイズでも無く。ム力つくウオ
レーンでも無く。——その『兄』でも無い。

ディーナ様……にフィルガ様に……ルゼ様？

——卜家！——

•
○
•
•
•

タバサの気配を頼りに、ウォレスは必死に街を抜けてきた。そうしてたどり着き、見上げるのはジャスリート家の門構え。

ジャスリート家はこのサンザスの国の、東西南北に分かれた領地をまとめている公爵家だ。

女だてらにそれぞれの領主達をまとめ、的確な指示を与えるその手腕は評価が高い。

あまり関わりあうことも無い分家の自分は、ただもやもやした煙くらいにしか感じていなかったが。

四つ足であつては、なおさらそう感じるのか。その構えはそびえ立つ砦さながらの風情だった。

よりによつて、というか。『ダグレス』が出てきた時点ですでに、あらかた予想は付いていたというか。

（やはりここか、ダグレスめ）

様子を見ようと館の回りを一周してみた所で、ウォレスはもう一度正門に戻ってきた。

（……………）

どうしたものかと、ウォレスは閉ざされた門を見上げた。鉄製の格子が高くそびえる強固な造りを、跳び越えることなどワケはない。問題はその後だ。術に長けていると噂も誉れ高い、ジャスリート家に——うかうか侵入した者は容赦なく『排除される』のだと。……ずいぶん昔の話だが、本家の伯父がばやいていた記憶がある。

それは白孔雀に固執するあまり、間者まで放つ方の心がけがあまりに邪よこしまだったからだろう。当然の処置だ。

——そう思ったが言わないでおいた。

もう行方の分からなくなった女性に、いつまでも執着し続ける伯父が憐れだったから。

それをどこか滑稽こっけいに思つて、ウォレスは見下していた気がする。

だが、今やどうだ？

今……自分がやろうとしている事は、一体？どう説明つけられる？

タバサを無事に連れ帰る。そのために因縁深いこの家に、侵入を試みている。

今、自分がやろうとしている事に何の疑問も無い。ためらいすらも無い。

だがウォレスの足を、未だにここに止める理由は唯一つ。

下手に見つかって『排除』などされたら、それこそタバサはどうなるか知れないからだ。

なにせ気まぐれなダグレスだ。かつては伯父の持ち駒^{こま}だった・・・獣。十七年間も。

それをあつさり振り切って、ジャスリート家の孔雀の翼を選んだのだ

自分はいい。別にどうなっても。こつぴどく罵られて、隊長格も剥奪されて神殿務めから放り出されても。

いざとなったら、弟が全て任されるだろうから。ロウニア家の事も、護衛団の事も。

そうしたら・・・自分は菓子屋にでも弟子入り志願するつもりだ。いや——あめ屋にか。

ロウニア家だからと、あのこには頑ななまでに拒絶された。だから、まあ。一族の恥とやらで縁を切られたら、その時はその時。そうになったらで、新しい人生のきっかけにしてやろうと思う。

（【それでは——いざー！】）

ウォレスは後脚で力一杯、大地を蹴り上げた——。

” 来たな。侵入者め ”

” —— 侵入者め ”

館の門を超え、身を隠そうとする間も無く。鋭い警戒音を発する、二羽の孔雀が降り立った。

” 何用だ、オオカミ。用無くば立ち去れ ”

”——立ち去れ”

【用ならある。この館に、少女が連れて来られてはいないか？セピア色の長い髪の名はタバサ。——タバサ・フォーラム】

”来ていたら？”

”——ら？”

【迎えに来た。返してもらおう。タバサはどこだ？】

”……知らないと言ったら？”

”……ら？”

【探させてもらおう。公爵殿にお目通し願いたい】

”それは出来ない”

”——ない”

【なぜ？】

”それは……”

”……”

タバサは嬢様が気に入られたから。
このまま嬢様に召抱えられる。

孔雀たちの答えを遮って、闇が答えた――。

【ダグレス！貴様、タバサをどこにやった！？】

ウォレスは牙を覗かせ、威嚇する。闇をまとう獣が、姿を現すよりもずっと早くから。

闇が一際凝^こつて、落ち着くよりも早く。やがて紅黒いまなこが、闇の中に浮かぶ。

”何をしに来た？ロウニアの若造？——タバサ？ああ、あの小すずめか……”

オオカミを目の端で捉えたダグレスが、小ばかにしたように斜め

から見下ろした。

”・・・ふん。タバサはな、我が嬢様の遊び相手にちょうど良い。ロウニアの若造は、大人しく引き下がるがいいさ”

【ふざけるな！！何を勝手な事を——タバサの意志を訊きもせず・
・・・・・・・・！！】

”勝手？我をそう罵るか？タバサはな『春の乙女役』の儀式に『無理やり』臨まされそうなのを『嫌がつて』我を呼んだのだぞ？よくよく考えてみるといいさ、ロウニアの。オマエは自分の都合を押し付けた”

【・・・・・・・・ダグレス。いいから、タバサは——】

”何。訊くまでも無かるうさ。タバサにしてみたら、だいぶ誉れな事と思うが。何せこのジャスリート家に召抱えられるのだからな。たいした出世だ。ただの街娘風情が、ジャスリート家に身を寄せる事に成る等とは、な”

ダグレスは愉快そうに言葉を紡ぎ続ける。

対するオオカミの方は焦っているようだ。いらいらとその場を踏み鳴らし、隙を突いて館に侵入する気なのだろう。

油断無く目を光らせている。余裕など、まったく持ち合わせていないようだ。

——そんな黒い獣同士のやり取りを、二羽の孔雀が見守っている。

レシビ * 2 1 * 誘拐団の本拠地へ潜入へ（後書き）

ものすごく独りよがりなウオレスです。

突っ込みどころ満載です。

いやいや。

別にあんた・・・「ロウニア家だから。」拒まれたんじゃないからね
・・・

ねえ？

レシピ * 22 * 誘拐団以前にまさかの黒幕？（前書き）

（仮）タイトルは「キャンディー屋の店主」

ひねりも何もございません。

なぜでしょう・・・キャンディー屋の看板娘 よりも、このタイトルだけで格段にむさくるしさが漂う気がします・・・？

——おい、おまえ・・・・・・・・。。

おまえじゃないわ、私！

——何だよ。どうしたんだよ・・・タバ、サ？・・・いや、違うな。誰だ？

タバサじゃないのは確かね。

——・・・じゃあ、誰だよ？タバサは一体・・・

タバサちゃんなら、もうここには来させないから。わかつたら、さっさと行って！商売の邪魔よ！！

）・

・）

すっかり日も陰り、つい先ほどまでの心地よさが嘘のようだ。春が訪れたとは言え、まだ本格的とはいえない。やはり朝晩は冷え込むのだ。

（・・・・・・・・・・ったあく！！あの、ダグレスのやろう・・・・・・・・！！）

そう悪態つくばかりで、チェイズは動けずにいる。未だ視界をこれから訪れるであろう夕闇よりも、一足早く” ” 闇” ” に封じられたままだ。

このままでは——夜闇が本格的に辺りを支配しだすだろう。いい加減転がったままのチェイズは背中が冷えて固まってくるのを感じ

た。

（まずいな・・・このままだと。ここで一晩明かして、翌朝神殿に訪れる信者の皆様に発見されたりしたら――）

それこそ恥だ。チェイズの、ではあるがそれより何より。――神殿護衛団の名折れ間違いなし、だろうと思われる。

だから。何としてもどうにかしたいのだが、どうにもならない。

自分はこのまま瞳を開けても、闇に支配されたままなのかと思うと・・・それだけで正直震えが来る。

目を開けてみても細かい粒子がまとわりつき、視界を阻んでいるのだ。

振り払おうにも意志持ったかのように、闇はチェイズの眼を捕らえて放さない。固く瞑った瞳の隙間からも、闇は侵入してくる。

「――・・・っ。ち、つくしょう!!!」

好きにさせてたまるか。そう弱気になりかけたチェイズは、闇を振り払うべく上体を起こした。

その時。微かだが目の端に灯かりが横切った気がした。いやそれは、気のせいではなかった。

「あ。誰がいる！ルカ兄、早く。――ルボルグさぁーん!!!ここに人が倒れてるよ」

「お。本当だ!って、神殿の護衛団員じゃねーかよ?どーしたあ?大丈夫かよ!」

少年期特有の声を響かせて、小走りに駆け寄ってくる気配。それに続いている気配は、どうやら高身長のようなのだ。

声がずいぶん高いところから、降ってくるように感じる。

チェイズは目を開けようにも、やはりどうにもならなかった。頭を二、三振って見せる。

「・・・・・・大丈夫だ。ただ目をやられた。視界が利かない」

「大丈夫じゃねーじゃねえか!」

「ふうん。情けないねえ」

「おい。タリム。——口を慎めや？」

「ふん。ホントのことじゃん、ル力兄^{にい}」

「——ああ。本当の事だ。情けない」

チエイズが顔をしかめながら、二人の声のする方へ面を上げた。

「なあ、アンタさ。ちびっ子達……ララサとタバサ知らないか？双子の、菓子売り屋の——」

「……嬢ちゃんたちは——」

チエイズが言いよどみ、言葉を探しあぐねているとまた別方向から声がした。

「ルカーあ？うちはキャンディー屋だぞつと。菓子はついだな。本業はあくまでキャンディーの方だ。言い間違えんなよー？」

………「たたく、何べん言わせるんだ？と、いつの間にか近付いていたらしい人物は、不満そうに付け足した。

ずいぶん落ち着いた口調と、響きのある低音の声音だ。そこから少年と青年の二人より、年かさらしいと判断が付く。

「はいはいつと。またーオヤジさんは」

「キャンディーばかにするなよ、ルカ。ま。それは、また後でな。さあて——つと。俺はルボルグって言うんだ。キャンディー屋の店主だ。要するに、ララサとタバサの父親だが……おまえサン。その様子だと獣か何かの術、喰らったな？なかなか上級なのを喰らったな。ちよつと、待ってる」

そこまで話を遮ると、双子の父親と名乗った人物の足音が祭壇の方へと向かった。

石造りの通路に、彼の足音が響く。それは一旦は遠ざかり、そしてすぐさま戻ってきた。

再び店主はチエイズの傍らに來たようだ。

「——ほれ。口、開けてみる」

「………？」

「いいから。ほれ！」

言われるがままに、いぶかしみながらもチェイズは口を開ける。途端に何かを放り入れられたのがわかる。

視界を奪われているせいで、反射的に身構えてしまったが・・・口中を満たすのが甘さだと判断できると、拍子抜けした。

「コレは・・・お供えのキャンディーですか？」

「そ。俺がこさえたヤツな。気分はどうだい、兄さんよ？」

「・・・」

かこかこと口の中でキャンディーを遊ばせると、ゆつくりと甘みも増してきた。角ばった感触から、おそらくは花の形を模したキャンディーだろう。何色の花だろうか？ふと、そう思った。

「そいつは春を告げるスミレの花のキャンディーだ。女神様のお足を飾る・・・闇を払う春の花——」

そう告げ終えたと同時に、ぱんつと小気味良い音が響き渡った。何事かと思わず瞼を持ち上げると、両手を合わせた人物と目があつた。

双子の父と名乗った彼は、にんまりと笑って見せた。膝を折って腰を屈めて、チェイズと視線を同じ高さに行っている。

太い眉が気持ち上がり気味で、いくらかそれが彼を厳しそうに見せている。だが、その下の瞳は力強いが、人懐っこそうに眇められていた。

肩幅もしっかりしており、肩から腕に掛けてがっしりとした筋肉が付いている。菓子職人なのだから・・・重いものを持つのは日常茶飯事のはずだから、当然といえば当然なのかもしれない。

暗がりではよくは解らなかったが、彼の髪と瞳は落ち着いた深みあるとびいろ鳶色とびいろのようだった。その後ろで無造作に束ねられた髪は、真っ直ぐで固そうだ。

双子達の髪をもっと、濃く凝縮したかのような色彩。似ている要素といえ、それくらいだった。チェイズが見る限りでは。

その面影に双子の持つ甘ったるさがどこにも見受けられなくて、

二人の容姿は改めて母親譲りなのだと思ってしまった。

「よ！もう大丈夫だな？見えるようになっただろ」

「はい・・・！ありがとうございます。すごいですね・・・貴方も術の心得があるのですか？」

「——ま、ね。俺じゃなくて、すごいのはキャンディーの方な。なー・ルカ？わかったろ。先代から受け継ぐこの技法——！」

「すごいじゃん、オヤジさん。見直したよ。——キャンディーを」

「だから、言っただろ。キャンディーをなめるなよ、ルカ？」

「キャンディーは舐めるモノでしょ」

「——何おお！タリムっ、この反抗期！」

言葉の割りに。怒りの感じられない表情である。それがいかにも人の子の親の持つ、寛大さの表れだと思えた。

要は叱るが、怒ってはいないといった感じだった。少年の方はまだ幼さから、そこら辺は読み取れないのだろう。

単に怒鳴られたくらいにしか受け取っていないのか、悔しそうだ。負けじと声を張り上げる。

「だってさ！ララサちゃんとタバサちゃんが、いなくなっただけ言うのに！！おじさんはのんびりし過ぎだよ。心配じゃないの？もっと慌てたらどうなのさ」

噛み付くように、メガネの少年は責める。その様子に、双子の父は黙りこんだ。

「——悪かった、タリム。心配させて・・・だが、二人は大丈夫なんだよ。何せあの子達には加護がある」

「加護？」

「そうさ！だから安心しな」

疑わしそくに眉をひそめたっきりのタリムよりも、チエイズの方が先に尋ねていた。

「・・・・・・一体『何の』ですか？貴方には術の心得があるよう

だし、貴方が施した術のとても仰るのですか？」

「ま、な。何だ、その顔構え？」

「いえ……貴方がキャンディー屋の店主と名乗られたので。以外に——疑問に思っただけです」

『術』を用いていいのは、神殿に属するものだけだ。それ以外は王族に仕えるの者か、貴族に籍を置く者が許されている。

それ以外は『邪法』とされ、厳重な処分を受ける。それがこの国の取り決めた法律だ。

まさか今助けられたばかりの身では、流石に言い出すのには気が引けた。

そんなチエイズの不審な想いなど、多分つつ抜けなのだろう。

彼は何も言わない。悪びれた様子も無い。ただ意味ありげに、しかし余裕たつぷりに笑み浮べている。

しばらく腰に手を当てて、チエイズを見下ろしていた彼だが——。ふつと、短く一息付くと視線を女神像の方へと向けた。そのまま、ゆっくりと歩み寄る。

「さあ——つてえ、とお——！今回の『黒幕』出て来ーい？見てるんだろ。……ジルサティー・ナあ？どうするんだ？こら？ちいいつとばかり、面倒になってるぞ！」

彼独特の間延びさせた声が、祭壇の女神像に向かって投げ掛けられた。

。。。

。。。。

” ” 侵入者……か？”

” ” ……か？”

孔雀はお互いに長い首を傾げあつた。

今一度、館に乗り込んできた真つ黒いオオカミと少女を見た。

しげしげと。

セピア色の長い髪。それはくるん、くるんと巻きの強い、波うつ・
ふわふわの髪の毛。

ぱつちりと見開かれた瞳はいくらか興奮しているようで、より一
層その紫色が輝いて見える。紫の水晶のような。

透明で濁りの無い眼差しは、先ほど二羽の尾羽に釘付けだったも
のと一緒だ。

” タバサ……だな。ヨウラン？”

” ……だな。ツウオラン？”

んー？んー？と首を上げたり下げたりしながら、孔雀たちは少女
とオオカミとを取り調べ中だ。

” タバサは『客人』だと。ディーナ嬢が言ったな？ダグレスも
気に入ったと、塔に連れて行かれたな？”

” タバサは『客人』。フィルガも言ったよ。ルゼも気に入った
から、塔に連れて行ったな”

「あの——？孔雀さんたち……」

少女が口を開いた途端に、まとわりついていた二羽はズザザッ！
と後方に身を引いた。驚いたのだ。

「あ……ごめんなさい。驚かせてしまつて。タバサちゃんが来て
いるのですね？彼女、私の妹なの。迎えに来ました。タバサはどこ
ですか？泣いていませんか？」

” ——妹？”

「ええ」

” では、姉か？”

「ええ、そうです。双子なの」

” ——！！　そうか。我々と一緒だな”

” 一緒だ”

「そうなのですか。それは奇遇ですね・・・え、と？」

” ” ツウオランだ ” ”

” ” ヨウランだ ” ”

「私ララサです。早速ですが、ツウオランにヨウラン。お願いだから案内していただけませんか？タバサの所へ」

” ” ・・・ララサは、いいだろう。タバサとまったく同じ気配だから、嬢様もお気に召すだろうから ” ”

” ” ・・・ララサはいい。だが・・・オオカミはダメだ。嬢様がお気に召さないだろうから ” ”

孔雀は真っ黒いオオカミを警戒しつつ、おずおずと告げた。キロキロと黒い眼で、ララサとオオカミとを代わる代わる見つめる。

二羽とも、いつでも攻撃態勢を取れるようにと。身を低く屈めて、両羽根を開き気味にしている。

「——お気に召す？・・・オオカミはお気に召さない？なぜです？どうかしたのですか」

【・・・・・・・・・・・・・・・・】

先ほどからララサの前に構え立つ、オオカミは黙って様子を窺っている。一言も口を差し挟む事も無く。

無言で孔雀たちに圧力をかけている。

” ” ——そうだ。タバサを泣かせる、悪い悪いオオカミ。そいつと似ている気配のオオカミだからな。瞳の色もそっくりだ ” ”

首を高く持ち上げて言い放つのは、ツウオランと名乗った孔雀。

” ” ——そっくりだ！ ” ”

そう、後を追うように付け足したのはヨウランだ。

「……………タバサは泣いていたのですか？」

” そうなのだ。タバサが泣くから、ダグレスが連れてきたそう
だ。オオカミから逃れるためには、ずっと嬢様のお側にいればよい
からな”

” オオカミはタバサを泣かせる、悪いオオカミ。だから——オ
オカミは侵入禁止だ！”

二羽は、そう答えを導き出すに——至ったらしい。

行く手を阻むべく、同時に尾羽を広げた。それでも、黒いオオカ
ミは引こうとはせず、その場に止まっている。ただ、静かに。

【……………】

そのやり取りをしばらく無言で見守っていた、ララサが満面の笑
みを孔雀達に向けると、こう言い放った——。

「……………ねえ、孔雀さんたち？私だけならいいのでしょうか？
案内してくれないかしら。タバサの所へ」

口調と表情はにこやかなものである。だが——密かに拳に力が入
っているのを、オオカミは見逃しちやいなかった。

【……………。】

「悪いオオカミにそっくりなこのオオカミは、ここで待たせておく
なり、追い出すなりすればいいから。私をタバサの所に案内してく
ださいな。あと、それと。タバサを泣かせた悪いオオカミは、どこ
にいるのかしら？」

【！？】

” ！？”
” ！？”

ラサのただならぬ雰囲気^おに圧されて、オオカミと孔雀^たちは思
わず顔を見合わせてから——少女の方を見上げる。

レシビ * 22 * 誘拐団以前にまさかの黒幕？（後書き）

怒ると恐いぞ、ララサねえさん。

こと、タバサが絡むと豹変。

ある意味、ラスボスかもしれません。

レシビ * 23 * 思いのほか短気な黒幕サマ（前書き）

タバサ&第三者チエイズ目線。

レシビ

*

23

*

思いのほか短気な黒幕サマ

その・・・タバサは？

——タバサちゃんはもうここには来ないわよ。

なぜ？

——来たくないって言ってるから。来させないの。

だから、なぜだ？

——・・・目を閉じて胸に手を当ててよぉーっく考えてみようか？
それと歯を食いしばって？

。。。

。。。。

「・・・・・・・・・・・・？」

暗い・・・・・・・・・・。タバサは瞳を閉じたまま、そう思った事をいぶかしんだ。

まずは第一に・・・なぜ、自分は瞳を閉じているのだろうか。そして、瞳をこじ開けようにも——瞼は持ち上がらないのか。

明らかに体が思うように動かせない事に対する危機感あるが、それすらもまた意識の遠くの方だ。

「・・・・・・・・・・・・！？」

何かが、おかしい。苦しいのだ。かろうじて呼吸は出来るが。だがそれすらも、蹴散^{けち}らさんばかりの意志が働いている気がして

ならない。

何者かがタバサを見つめている。二度目ともなれば、嫌でも判断の付く何者かの意志は『敵意』。

それはそれは明確な殺意を込めて………。全身からくゆるその気配に圧おされるが、逃れようが無い。

（まずい・やばい・こわい！今度こそ本当に……やられるかもそうしたら恨んで幽霊になって出てやるう……。）

タバサは声を上げる事もできないまま、むちゃくちゃな悲鳴を上げていた――。

ルボルグは声を張り上げて、それから思い出したように振り返った。

「――ル力。タリム連れて帰ってくれや。お疲れさん！」

上半身だけを捻ると、そう一方的に告げる。片手だけを己の目前に立てる。――すまなかつた、の意思表示だろうが。

それで納得するはずもなく、メガネの少年がまたも食って掛かる。

「何、言い出すのさ！おじさん、まだ二人とも見つかってないし！それに……さっきから、」

「悪い、タリム。おまえら庇ってる余裕が、今の俺には無い。その兄さんも消耗してるしな。わかってくれ」

「そんな、何なんだよ！さっきから――守護とか術とか何とか。何でおじさんは女神像に向かっているのさ？訳がわからないよ」

「分からなくていいのさ、タリム。おまえら……これから渡り合う奴に直面させるには、無防備すぎるんだよ。

――ル力、行ってくれ」

「……わかったよ、おやっさん。だけどそれでも、手伝いが必要なら呼んでくれ」

「ああ。もちろん。頼りにしてるぜ」

「それと必ず二人の無事を報告してくれ。何時になっても。待つて
るから」

「——ああ。もちろん。・・・オマエ！本当におつかさんに似てきたな。そういう所！」

「ま・ね。ほら、行くぞ！タリム！」

「い・いや・だつて・ル力兄にい！」

「・・・行くぞ。これから先は俺たちは足手まといなだけだ！
言いながら兄は弟を半ば引きずるようにして、女神像に背を向けた。その背をルボルグとチエイズが見送った。

「ああ！いい若モンに育ったナア！。あそこんちの兄弟。そう思わ
んか、兄さん？」

「そうですね。二人とも真つ直ぐだ。——その、貴方の仰りたい事は・・・」

（もしかして、うちの上司兄弟を何か揶揄やゆしたいんでしょうか？）

「・・・ん？別に深い意味なんか無なえよ。ただ、物分りが良
くて助かるつてえだけの話だ」

ルボルグが腕を組み直しながら、口角を上げた。目尻も下がる。
どこか食えない印象がある。

チエイズは自分がどこかしら警戒を解けないでいる事に、何の疑問も異論も無い。

要するに目の前のこの男性はなかなか出来る、つということ間違いないからだ。

下手したら、現・神殿仕えの自分よりは確実に格上。

いつものチエイズらしくない、格式ばった口調が自然に出てくる。
彼がそれを使わせるのだ。

その何かしら持っている、年上の余裕が。

「確かに。この空間に慣れていない者が、晒されるのは酷でしょう
からね。身体にも精神にも。——神殿に仕える者でもなければね。

ルボルグさん、貴方は・・・何者です？」

「だから『ララサとタバサの父親』だって。『キャンディー屋の店主』のさ。——って、お出でなさったようだぜえ兄さん」

「チエイズです」

女神像の背後が、ほの淡い光を放ち始める。

チエイズは思わず、柄に手を掛けていた。一步片足を引き、体勢の安定をはかる。

「・・・・・・・・。」

それをルボルグが目だけで制すると、彼が一步前に出た。チエイズを庇う格好となる。

その大きな背越に女神像の方を見やれば、光の強さが増してきており、直視するのもままならないほど。

チエイズは思わず、片腕でひさしを作りながら見守った。——ルボルグは相変わらず腕を組んだまま。

せいぜいその眉間に、シワを寄せているくらいのような。

細かい細かい光のカケラが徐々にそこに、集結しだす。雪が——日の光を浴びながら、舞い降りて来るかのような。

その幻想的な様を男二人で見守った。——光が凝結し、その化身が現われるさまを。

しやらしやらと細かな鈴の音のような。それをもっと遠くで。

細かく碎いたかのように繊細な音色が・・・チエイズの耳をくすぐる。

しやらしやらとはじめは忙し^{せわ}なかった音色も、今はゆったりと収まってきた。

・・・しやらり、しやらり、と。

彼女が姿をしっかりと現す頃には、再び辺りは静寂が戻ってきていた。

『——おひさしぶりですわね。それでもないかな?』

そんな静けさの中で響き渡る声音は、優しい女性のものだと知れた。

——たとえ・・・そう。言葉を発した者の姿が『獣』と呼ばれる類のものだったとしても。

獣といっても、たいそう可愛い。口を利いたのは、真っ白い子馬だった。

先ほどの闇色のダグレスに比べれば、その性質の穏やかさが窺える。

そんな思わず微笑を浮べそうになる子馬のたてがみは、ゆるやかに波うつセピア色だった。

ふさふさと、左右に打ち振って見せているシッポも同じく。真っ白の長い長い睫毛が覆う、その瞳の色は紫。

その透明感溢れる色彩の組み合わせを、チェイズはどこかでお目にかかった気がするのだが——。

(お久しぶり? それでもない?——この二人は一体・・・)

「それでもないな。さて、ジルサティナ! おまえ・・・何を企んでるんだよ? おかげで二人とも帰ってこないぞ!」

『うふふん。ヒ・ミ・ツ〜』

子馬は小さな鼻を膨らませて、そう歌うように答えた。たいへん、可愛い。可愛いのに間違いは無い。——が。

「うわああ!! むかつく〜!!」

ルボルグが頭をかきむしりながら叫んだのには、同意見だ。

ふんふんふんふん・・・・・・・・・・――。

その敵意を巻き散らかしながら近付いてきた何者かは、タバサの全体をまんべんなく嗅ぎまわっているようだ。

寝たふりというよりも・・・・・・どうしてか身体を動かす事の出来ないタバサは、大人しくしていた。

自分は今、たいそう具合のいい寝台に寝かしつけられているのだ。ふかふかしてぬくぬくした、最高の感触の。なぜか。

記憶を辿ろうにもあやふやだ。おかた泣きつかれて、そのまま寝入ってしまったのだろうかと思う。

それでもこの身体を支配する不自由さには、説明が付けられなかった。だから混乱している。

何者かは・・・・おそらくは四つ足。気配がソレを物語っている。

この独特の胸を圧す感覚が、そう教えてくれている。それが『オオカミさん』では無いのは確かだ。彼の気配はもっと。

もっと・・・・何て言うか、こう――。

深い静けさを湛えている。深い森の中のひととき大きな木の元で、くつろいでいたらあんな気持ち。

側に佇んでいるのが苦痛ではなく、むしろその逆だ。

彼には絶対。絶対、口が裂けても絶対に！言わない方がいいが事実だ。調子に乗ること間違いなしだから。

彼の側は居心地が良い。それは認める。ただし、黙っていてさえくれればという条件の下に。

（オオカミさん・・・・・・・・・・）

くんくんくんくん・・・・・・・・・・。

タバサはこの様子を窺っているモノの鼻息が、肌を掠め始めた事に恐怖を覚える。

頭のとっぺんから、足の爪先までをまんべんなく。まるで何者か

を定めようとしているかのようだ。

タバサの身体が、湧き上がる恐怖と嫌悪感で栗立あわたつ。

（オオカミさん……どうしよう！何か何か、どうしようもなさげです！どうにか出来そうなのはオオカミさんだけの気がします。癪に障りますが。そもそも私がこんな目に遭っているのはオオカミさんのせいなんですからねええええ！何とかシテクダサイよねええええ！）

「……………」

（そういえば。オオカミさん……って呼ぶと訂正されたな。オオカミさんと呼ばれるのは、嫌だったのかな？）

ならば。ずっと『オオカミさん』と呼び続けてやろうか。腹いせに。

（オオカミさん、オオカミさん。態度の大きいオオカミさん、さりげなく・権力者の威圧感たっぷりのおオオカミさん。無理やり『春の乙女候補とするよ』等とさらりと告げてくれたオオカミさん♪）

……………♪

タバサは心の中で歌うように彼の名を呼んでいた。実際口には出せないが。出したらきつと、妙な節なので笑える……か？

——腹立つんですけど！オオカミさん！

どうやら笑えそうも無い。タバサは動けないまま、意識だけはあるのだ。それが余計に状況を悪く思わせた。

自分を窺う獣は、どんどん大胆になってきているようなのだ。

（近い近い！ひいっ！ってな所まで来ちゃってますよ。どうしてく

ださるんだよ？オオカミさんよ！？）

人生——泣くか笑うかのどちらかだ。タバサは常々そう考えている。どんな時だって笑う方を選びたいものだ。

しかし、今は。そう、今は……やたら滅多に訪れるとは思えない事態。さすがに笑えない。笑えないんだよ！……オオカミ……

（……何だっただかな……えーと？……う・うう？——ウオレス……さん・めー！）

「んで。今、何て言っただ？——ジルサティナ」

『アクリムもシャルザムもどこかに行っちゃったわ——ルボルグ』

「どこに！」

『んーだから、どこか』

「なぜだ！」

『例の……獣を片っ端から魅了してらっしゃる、紅孔雀さまとやらのせいらしいわ。わたくしよりも、そちらに惹かれたのでしょうか。聖句などでは縛りきれなかったの』

「おいーそういう事は早く言えや！獣が加護を外れた状態ならば、二人は丸腰なんだぞ？も・ちつとは慌てるや！！」

先ほど少年に見せた余裕はどこへやら。双子の父は少年が望んだように、おおいに慌てふためき始めた。

「……タバサ！ララサ！って、兄さん馬っ！悪いが馬を用意してくれや！」

『ルボルグったら、心配性ねえ。大丈夫よお。だつてえ。ウオレスとウオレーンが、二人には付いているのよ？』

「いや……だからこそ心配ナンデスケド？ジルサティナさんよ？」

『あら。なぜ？二人ともとっても頼りになるんだから！』

「あゝ・・・俺としてはルカとタリムが一押し。できればそのロウニアの若造どもは勘弁」

『ああら。なあぜ？二人とも二人の事が好きなのよ。いなくなったアクリムとシャルザム並みの事が出来ちゃうし・・・おまけに』

「あゝもゝ　おおおお　！聞かんぞおゝ！聞かん・聞かんゝ！」
ルボルグは自分の両手で耳を覆うと、あゝあゝと声を上げている。ジルサティナの告げる事は聞きません。

そんな子供並みの、精一杯の抵抗の表れ。

気持ちは何となく解らないでもないが、娘を持った事のないチェイズには実感の無い感情だった。

『もお！聞きなさいよ！ルカとタリムなら良くて、なぜあの二人はダメなのよ！』

「あゝあゝ聞こえないゝ」
「・・・・・・。」

口をはさまなかったがチェイズも、そこはぜヒお聞きしたいと思っ

た。
何やら親密な雰囲気の二人に、存在を軽く無視されたかのよな気になっているので、チェイズは黙って見守るに留める。

（しかし、そろそろ・・・いい加減にしないと。お馬様が）
チェイズが気を揉み始めてから、そう間を置かずに予感は的中した。

『~~~~ルボルグのばかつ！』

「うおっ！！」

——ばか、のタイミングで子馬は体当たりを食らわせていた。
やっぱりそう来ましたか？・・・チェイズは小さくあ、としか発せなかった。

声を掛けてやるのが、今一步遅かったようだ。というよりも、お馬様は思ったより気が短いご様子。

ルボルグは見事に床に手を付いていた。腰をさすりながら、身を起こす。

『馬ならここにいるじゃないのよ！そんなに心配なら、さっさと乗りなさいよ！』

連れて行ってあげるから。その目で確かめればいいじゃない』

「・・・行くって、どこに」

『ジャスリート家』

何だろうか――。

チエイズはこのやり取りに、何やら未来を垣間見せられた気がした。

誰の、とは断定できないが。

レシビ * 23 * 思いのほか短気な黒幕サマ（後書き）

「もつとからませようにも」

すみません。

あちこちで収拾付かないです。

今、これがせいぜい。

恋愛FTコミカル だよ。 コレ？カテゴリー「ギャグ」とかじゃないかな
くてサ。

うむ。がむばりますので見捨てないで下さい。

レシピ * 24 * 危険手当を要求いたします！（前書き）

仮タイトルは『追うか、追われるか』

おかしいな。また、書き出しとは違う方向に・・・アレ？

タバサ、ピンチ。そこだけは、変わらず。

レシビ * 24 * 危険手当を要求いたします！

——なあにい？まだ、何か用？

……その、今日でしばらく……ここには、これなくなるから。コレを

——タバサちゃんに渡せって？

ああ。頼みたい。今までの無礼も詫びる。直接謝りたかったがもう、時間がない。……悪かった。伝えてくれ。

——……どこ行くの？

俺は神殿仕えが内定したから、警護隊の訓練が始まる。

くんくん、くんくん。短い息使いはせわしく、タバサを何とかを匂いから判断したいようだ。

ふん……ふん……。同じくこちら側は気持ち慎重に、タバサを嗅ぎ分けている様子だった。

どうやら獣様は『二頭』でいらっしやる気配。

左右で違う息使いが同時にタバサの肌を掠めて行く。時に頬を。腕を。爪先を。

（……くすぐりたい。何なんだろう？ツウオランにヨウラ
ンでも無さそうだし）

二羽の孔雀たちは艶やかな羽根のはず。だが先ほどからタバサの
感じるのは、毛布のような柔らかさと、湿った鼻先のような感触。

タバサは重たい瞼を何とかこじ開けるように、持ち上げる事が出
来た。薄目を開ける事に成功したタバサを、微かに灯るあかりが助
ける。

うつすらと見止めた姿に、タバサはなるべく身動きを悟られまい
と息を詰めた。

——見えた。やはり二頭だった。前脚を寝台に預けて身を乗り出
し、互い違いにタバサを窺っている。

そうして時折り二頭同士はお互いの瞳を絡ませあって、何かを打
ち合わせているようだった。

（何かやたら可愛らしい二頭だなあ。真っ白ちゃんて……くるく
るのほわほわの・ステキな毛並！）

そうなのだ。今まで見てきた獣たちは皆凛々しく、狩をする肉食
獣を思わせる体躯をしていた。

その造りが毛並の上からでもわかるほどに、しなやかな筋肉がう
かがい知れるような。対して今こうして様子を窺う獣たちは、どこ
かまるやかさが漂っている。

その見てくれの可愛らしさもあるうが、どうも人に害を与えるよ
うには到底思えない。

先ほど向けられた敵意も、二頭はタバサには無用と判断したらし
く、今は穏やかなものだ。

声を掛けてみようか。そうタバサは思い始めていた。しかし、思
うように身体が言う事を聞いてくれそうも無いので、大人しくする
しかない。

そんなタバサに気が付いているのか、いないのか。二頭は身を乗
り出したまま、互いに頷きあったように見えた。

互いに何かを確認しあつた様子の二頭は、ほぼ同時にタバサに鼻つつらを押しあてられる。

(うおううー！)

一方からはべろん、つと大胆に頬を舐め上げられた。もう一方からは・・・ペろ、つと遠慮がちに舌先だけで突かれたのだ。

タバサは眉根を寄せて心の中で、奇妙な叫び声を思わず上げていた。

それを合図に二頭は申し合わせたように、タバサの身体の下に身を滑り込ませると軽々とその背に担ぎ上げられてしまった。

もう一頭の方は、器用にタバサの身体が転げ落ちないように、鼻先で押しやつてくれている。

(――・・・え！？ちょ、ちよつと！ちよつとおお、ど・どこに行くんですか？)

手足をだらりと垂らしたままの体勢で、抗おうにも身を起こせない。そんな状態で立ち上がられては、余計に恐怖が募り行くに決まっているではないか！

タバサは焦りから、じんわりと汗ばむ。それがまた寒気を覚えさせられていると思つたが、どうしようもなかった。

(えーつと、えーつと！？これは・・・まずい・まずい・やばい！おーい！！おーい、オオカミさあああああん！)

助けて。なぜか、彼を頼る自分に一瞬ためらつたが。それもすぐさま頭の隅に追いやつた。

自分を追い掛けて来てくれたらしい彼ならば、どこに攫われ行こうとも見つけてくれるのでは無かろうか。そもそも、こうなつたこの状況は、彼が元凶じゃなからうか。

(――おおい、こら！もーこうなつたら、もおおうー！危険手当も付けやがれー！と叫んでやりたい。ってか、叫んでやる！ってえ・・・叫んだら【春の乙女を引き受けてくれたんだね】とか何とか。言い出されそうで！それも腹が立つー！！)

ここにはいない黒いオオカミさんに怒りをぶつけているうちに、

獣は窓の方をみやって頷きあっているではないか。

月明かりに導かれるように、一頭が先に窓枠に前脚を掛けて、身を乗り出している。警戒しているらしく、まん丸の瞳が心なしか鋭く見えた。

縦に細長い耳をぴんと立てて、前に後ろに横に。自在に倒しながら音からも、様子を窺っているのが解った。

（どうしよう・・・もないけど。ああ、嫌な予感）

そう思った。次の瞬間――。獣は勢いを付けて、寝台を一蹴り。

（あああああゝもおう、やっぱりいい！！）

タバサは真っ白い獣の背に担がれながら、浮遊感に恐怖した。

――・・・ウォレス！

なぜかその名を呼びながら、意識が遠のいていった。

唇はわなくなばかりで、そうそう彼の名を・・・うまく紡げはしなかったけれども。

ゝ・

・ゝ

彼の名は呪文。

彼女が呼ぶならば、その場で即座に発動する。

ウォレスは名を、少女の唇が紡ぐようにと仕掛けていたのだが。

なかなかそう上手くいかなかったのは、彼女自身の防御本能が働いていたからだと推測する。

それでも諦めることなく、根気強く。――訴え続けたのには意図がある。

$$\vdots$$

.

ウ
オ
レ
ス
！

【 ！ 】

何やら胸の奥底に、閃くものがあつた。ウォレスは立ち止まって、ダグラスから視線を外す。

——名を呼ばれた気がしたから。耳を澄ませて気配を探る。

からかい、惑わすように先を駆けていたダグレスも立ち止まった。

どうした、ロウニアの？もう、追いかけるのはオシマイか？

"

【ダグレス——・・・館の警護はどうなっている？あの二羽の孔雀たちだけなのか？今ほどから気配が微妙に増えているのを、感じないか？そうやすやすと獣の侵入を許すのか、この家は！】

ウォレスはダグレスの後を追いつながら、館の中の造りを巡りつつタバサの気配を探っていたのだ。

今は日も落ちきり回廊を闇が支配している。夜目の利く獣でもなければ、灯かりが必用だろう。

しんと静まり返った石造りの回廊を響かせるのは、二頭の獣の息
 使いだけだった。時折りどこからか吹き込む、風が小さく唸るよう
 に通り返けていく。

ダグレスもウォレスも目には映らぬはずの、風の流れを視線で追った。

”　・　・　・　まあな。嬢様のご意向だ。——この館の周りの土地全体に、ジャスリート家の結界が張り巡らせてある。それを突破できるものは、ある意味力があるモノ達だ。嬢様は・　・　・そやつらに用があるからな”　”

「……ダグレス、侵入者だ。タバサはどこだ？紅の孔雀に

も、お目通し願いたい所だがそうも言っていられない。今・・・タバサに呼ばれた。急いでくれ——頼むから】

よほどだろう。あれほど拒まれていた『術句』にも成りうる、彼の名を呼ぶということは——。

ウォレスは苦しげに訴えた。それこそ、全身で。

【頼む。タバサが・・・この家では気配が追にくい。それが、ますます遠ざかって行くのだけはわかる】

” ふん ”

ダグレスはまるで物珍しいものでも眺めるように、目を細めてから頭を高い位置に持ち上げる。

そのまま優雅にくるりと背を向けると、振り向かないまま駆け出していた。

” ” 付いて来い！ロウニアの ” ”

【ウォレスだ。——ダグレス】

” ” 存じておるさ。オマエがタバサの言う『オオカミさん』とはな ” ”

ダグレスは何かを揶揄するように、くくつと可笑しそうに喉の奥で笑った。それが癪に障らないわけではなかったが、ウォレスは何も言い返さなかった。

【.....】

本当は癪に障るのは、何もダグレスの言動だけではないのだが。

—— ダグレスの名はすぐさま呼べて、なぜウォレスとは呼べない？

そんな事を言い出したら最後。ダグレスに ” ” タバサの側にいる資格なし ” ” の烙印を押されるだろう。

コイツの芝居じみた行いが、何を自分に解れと言っているのか・

・何て。

ウォレスは、ダグレスの気まぐれを疑問に感じていた。コイツは頭がいい。二十歳そこそこの自分なんかよりも、よほど。

そんなヤツがいちいち人間の少女に構うか？ 実際こうして構っている。

そこに違和感を覚えた。コイツは気に入らない者は、存在からして無視するのだ。それはかつての自分も含まれている。

それと。——それでいて気に入った者には、要らないほど世話焼きだという事も思いついていた。

この館に付く頃にはいくらか頭も冷えて、ウォレスは冷静に考えられるようになっていた。

要はダグレスはタバサを気に入ったのだ。その辺も大いに気に入らないウォレスは、気が気じゃあない。

獣と見れば誰彼構わず魅了するかもしれない、あの少女——。

……いや、獣身でない者なら余計に。ダグレスの話ではこの館の『嬢様』とやらにも、気に入られたようではないか。

勘弁して頂きたい。大方——無防備なまでに無邪気な微笑を振りまいて、見る者の心を捕らえてしまったのだろう。

それとも。世にも稀有な『獣耳』の少女同士、お互いの共通項から馬が合って意気投合したとか。

タバサのことだから、それは大いにあり得るだろう。商人の彼女の仲間意識は強いのだ……。

彼女の大切なもの。それは自分の姉……家族。そして、商店街の仲間たち。訪れてくれるお客達。

ウォレスは自信がない。そこに黒い影は見当たらない気がするから。

じりじりと焦げ付くような得たいの知れない思いに、胸が焼け付くが堪えるのみだ。今は……忍耐の時……。

今ここで、ダグレスと言い争っている場合ではないのだ。——急

がねば。

（【タバサ・・・俺の春の乙女】）

それだけがウォレスを突き動かす。

闇の中を疾駆する、闇色の獣が二頭。回廊を吹き抜ける風に立ち向かうように、二頭は一気に駆け抜けて行った。

「タバサちゃんっ!!?」

【・・・・・・・・!!?】

「あら」

「大変!!タバサちゃん、タバサあゝ!!いませんか?たいへんです、フィルガ殿!」

「——ツウオラン!ヨウラン!侵入者及び、出て行った者の形跡は?」

” ” おらぬよ!” ”

” ” ——ぬよ!” ”

” ” 何事ですか、嬢様?” ”

「ダグレス。いい所に来てくれました。タバサちゃんが居りません。ここに——休んでいたはずなのに」

ウォレスとダグレスが駆けつけたのは、他者の侵入をそうは許さないと言つ一室。館の中でも一際強力な結界の張り巡らせし、別名『孔雀のための鳥かご』部屋だという。

どつりでウォレスにもなかなか気配が追えなかったはずだ。その

施された術の完成度の高さに唸り声を上げてしまつ。

「ダグレス。どう思いますか？タバサちゃんはここで眠っていました。一人でどこかに行けると思いますか？」

” 思いませんな、嬢様 ”

見れば窓は全開だった。そこから入り込む夜風が、嫌な汗を一層冷たく冷やしていくようだ。

「——そ．．．そんな！タバサちゃんつ、どうしよう！！」

そんなやり取りを聞いていた、彼女の姉が泣き崩れてしまった。その側に狼狽しきつた黒才オカミが、掛ける言葉も見つからないままに寄り添っている。孔雀たちも、同じく。

ララサがどうやってここまで来たのかは、自分と同じ黒才オカミの姿を見やれば納得が行った。

（【ウォレーン．．．ララサ嬢に泣かれたか。すまん．．．二人とも】）

ウォレス自身謝りたかったが、まだそれは先と状況に留まる。

” ” 嬢様。状況をよく、順序立てて、ご説明下さい。タバサは一人でこの部屋に？ ”

「——ええ、そうよ。タバサちゃんが急に不安になつたらしくて、泣き出してしまったの。だからね、お茶を飲んでもらったの。この．．．『少しだけ眠くなる』お薬を垂らしたから、落ち着いて。だからここで、横になつてもらったのよ」

嬢様。そう呼ばれた見事なまでの赤い髪の少女が、小さな瓶をテーブルから持ち上げて見せる。

要は一服盛つたのだ．．．このお人は。

「．．．．．ディーナさん．．．その薬瓶．．．どこから？」

「ん？フィルガ殿の書斎から、ダグレスが持ってきてくれました。

——前に私にもフィルガ殿が使った事があるので、即効性はある割りに副作用は無いから大丈夫って」

「ダグレス！！」

「・・・・・・・・つく・・・・わかったわ」

ウォレスは頷き、失礼とだけ告げるや否や、その場を一蹴り。
―窓から飛び出して行った。

「――ねえ、ダグレス」

それまで泣きじゃくる少女を慰めていたルゼが立ち上がる。

” ” 何だ？ルゼよ ” ”

「彼。なかなかいいんじゃない？」

そう言っ、窓の方を扇で指し示した。

レシピ * 24 * 危険手当を要求いたします！（後書き）

あゝだいぶ間があきました。

身内から「更新はマメに！！」と、お叱り何だか励まし何だかのアドバイスを頂きました。

——仰る通りでございます！

仕事です。遊んでいたわけではありません。

そんなこんな「神殿まえ」にお付き合い下さる読者様。

本当にありがとうございます！！

イメージぶち壊しのこぼれ話やら、身内からのちょっかいやら、何やらをブログにのせちよります。

<http://ameblo.jp/mithunappa/>

・・・みつなっぱのきもち。

で、検索して頂いても出ます。よろしかったら・・・お待ちしております。

「ネット小説ランキング」様に登録させて頂いておりましたが、もう「小説家になろう」サイトからの登録は出来ないそうです

今までありがとうございます、お世話になりました。残念ですが仕方ありませんね。

そこからいらっしゃって下さる読者様も多く、励みになりました。

まだまだ書き続けますので、よろしく願います。

レシピ * 25 * 狼狽するしかないオオカミ。(前書き)

泣きじゃくるララサに付き添うよう言い渡された、ウォレーンのほ
やきでお送りします

——タバサちゃん。

なあに？ ララサ、改まって？

——はい．．．．．これ。あげるね。

え．．．．．！？何、これ？キレイだねえ！どうしたの？

——うん。キレイでしょう。あげるね！『タバサ。どうかこれを肌身離さずに居ておくれ』

う、うん。ありがとう。．．．．．どうしたの？ ララサ、どうして泣きそうなの？

．．

．．

「ウォレーンが悪いのよ！全部、全部悪いの！」

【——すまなかった。ララサ】

「すまなかったじゃないでしょ！タバサちゃんに何かあったら、ぜったい許さないんだから！そう思うのなら私たちも追っつわよ」

ぐずぐずしないでよ、ほら立って——！少女が泣きじゃくりながら、それでも立ち上がる。

ウォレーンは困ったように少女を見上げたが、腰落ち着けたまま動こうとはしなかった。唸るように声を絞り出す。

【それは出来ない。．．．俺単独ならまだ可能だが、ララサは駄目だ。連れて行けない】

「どうしてよ！」

【何があるかわからないから】

——そこまで口にしてしまったと思ったが、遅かった。ぼたぼたと涙をこぼしながら、これまた盛大にララサの唇が歪む。

「な、何があるかわからないですって？何がっ!？」

【・・・・・・・・・・】

ウォレーンといえばただ己のうかつさを呪いながら、ただおろおろするばかり。

それも内心の狼狽であり、はたから見ればただ少女に寄りそう狼なのだが。ウォレーンはこういつた時どうすればいいかなんて、まったく！ぜんっぜん・・・わからないのだ。そんな様子を老婦人が微笑ましそうに――。

それでいてからかうように、見守っているのすら気が付かないほどだった。

常は控えめな少女である。しっかり者の看板娘も、こと自分の双子の片割れが絡むと平静を失う。

その彼女の胸を占める重要な位置付けを、事あることに見せつけられてきた。だから――。

彼女と同じ瞳をした少女が、自分をいぶかしむ様な眼差しを向けた時。ウォレーンは無性に腹が立って仕方がなかった。

しかも何ら差の無い声音で自分は、つい先日までいくらか親しみ込めて呼ばわれていたはず。

その己の名を『知らない』と首を傾げる少女の口調に、一片のためらいも無かったものだから余計に。

ララサはウォレーンの事を何ひとつ、タバサに伝えていないのはそれでハッキリした。

彼女は何も知らされていない。それはウォレーンにとって、大層痛手だった。

『私たち、何でも話すの。今日あった事はもちろん、全部。思った

り感じたことはぜんぶ！全てよ、ウォレーン』

確かにララサはそう言い切った。黒いオオカミの首筋に腕を絡ませて、その身を押し付けながら確かに――。

人である時よりも遥かに優れた聴力が、聞き逃すワケも無く。そんな距離。

――その距離をもつと縮めたいと考えたオオカミは、その願いを叶えるべく申し出たのだが。

『ララサ・フォリウム嬢。どうかこの春の乙女役を、引き受けてくれないだろうか？そして……』

驚きに見開かれたスミレの瞳を、オオカミの姿で占めようと覗き込みながら続けた。

『どうかこのウォレーン・ロウニアを、乙女の騎士と認めてくれな
いだろうか』

それが何を意味するのかはこの街の者なら、伝えようとしている
事がある説明しなくともわかるはず。

ウォレーンは勇気を振り絞ったのだが――。

その翌日からぱったりと。

ララサは姿を見せなくなった。

その代わりに広場に現れたのが、彼女の双子の妹。

・ ・ ・

・ ・ ・

兄も同じように、同じような言葉をタバサに贈った。実に素早い
兄の決断に、正直驚いた。

『お断りします！私、その日は稼ぎ時なので！』
彼女の判断もまた、負けないくらい早かった。

――答えを導き出すのに、何のためらいも見出せ無かった。ほん
の数瞬、まばたきの間ほどは考えたようだが。

男が畏^{かしこ}まって『春の乙女』になつて欲しいと乞^こう。それが何を意
味するのかを、知らない？

まあ・・・知らなかったとしても、この目の前のオオカミが何を言わんとしているのかを察せぬものなのか？

そんな事、誰が見たって明らかでは無いのか？

大体からにして目の前の『兄』がオオカミで、『弟』が人の姿なのだから疑問を持って！持ったのなら、何かしら訊いてこい！

ソレなのに何故！？なぜ、ああも無邪気でいられるのか？ウオレーンには理解し難いタバサの反応。

（「・・・・・・・・・・・・・・・・」）

そうなのだ。当の本人は全く『その事』に気が付いていない有様。何と言う鈍さかと腹も立った。

あまりに何の憂いも無く笑うから。

誰にでも同じように笑みを向ける彼女を、よく言えば平等でわるく言えば八方美人だと思える。

みんな大事。みんな大好き。でも誰も『特別』にはなれない――。家族を除いては。

タバサの誰からも好かれるであろうその気質が羨ましく、また疎ましかった。

彼女の媚もせず真摯に向き合おうとする姿勢は、態度の悪いウオレーンにすら変らなかつた。そこがまた、己の狭さが量られた気がしたのである情けない。

ララサが来なくなり、タバサが来たと言う事とは・・・・・・・・。

ララサもまた同じ答えと言う事なのだろうか。

『その日は稼ぎ時なので』――なんだって！？そっちの方が大切な優先すべき事なのか？

そんな事をぐるぐる考えてしまう日々。

兄は兄であの手この手で『春の乙女』を確定しようと奮闘する日々。

ハッキリ言つて、普段の余裕ぶつた兄ではない姿はザマあ無いの一言だ。

タバサの鈍さにいちいちへこたれていては、確かに欲するものな

ど一生手に入るまい。

逃すものかという気迫を、ひしひしと感じさせてどうする兄よ？
たが、対する彼女もなんの。タバサは必死で抵抗してくる。

（——あんたら………勝手にやっけてくれ。）

せつかく久しぶりに見晴らしのいいあの姿に戻っても、会いたい
彼女が広場にやってくる気配は無いまま。

今日も『タバサ』かと落胆の現われが、彼女に対する態度に滲み
出してしまうのを止められない。

兄はそれはそれは機嫌が良かった。どうやら積もり積もった長年
の想いは、ようやくぶつける相手が現われて暴走しているらしい。

（誰か止める。って、俺か——？）

チェイズはチェイズでおもしろがっているだけだし、他に見当た
らない。やれやれ。——そんな思いがますます表情を渋面にして行
く。

そんな内心の表れに敏感な少女の表情もまた、ウォレーンには気
鬱の元だった。

（タバサにはどうやらひん曲がって伝わっているようですが、兄上
？）

いい加減、兄に進言するか——だが、コレは蹴られるかもな。人
の恋路を邪魔する奴に認定されたら……等とぼんやりしていた矢
先。兄はさつさと『儀式に臨む準備』を整えてしまっていた。

（誰だ、手伝った奴は！？チェイズ、貴様かつ！）

睨んでも”えゝ？俺は隊長の命令に従っただけだし”と言わん
ばかりに、片目をつぶって見せられた。

………気色悪いので、思わず殴ってしまったではないか。

（駄目だ……これは）

そう結論するまでに至った。兄に進言しようと何をしようと。例
え行動を口で諫められても、兄はタバサを目の前にして平静を保つ
等とは不可能に違いない。………という事だけはわかった。

（しかも怒らせた上、泣かせて………兄上？）

・。
・

・。
・

兄がこのザマなのは少しいい気味だとも思えたが、実際いきなり攫われたタバサは不憫だった。

しかも相手はダグレスときた。賢く強くプライドの高い、間違いなく神獣レベルに匹敵する——裏切りモノの。

……獣が人間に自ら進んで構うとき、それは。一つは害なす者として排除しようと仕掛ける時。

もう一つは気に入った者として、側におきたいと願う時がある。獣は大抵ほぼ間違いなく乙女が好きだ。難儀な事に。

古来から、その性質として乙女を好む。それ以前に、ダグレスは恐らくタバサが気に入ったのだ。ここに来てそれは確信に変わった。

実際追いかけてきてみたら、やはりタバサは『優待』されていたようだった。ダグレスは気に入った者には時間を割くのだ。

多少なりとも付き合いはあった獣なので、それは知っていた。おかた野郎三名……しかも顔見知りの我々に、囲まれて泣いているタバサを不憫に思ったのだと判断する。言及したところで、彼は絶対に認めはしないだろうが。

そして久しぶりに会えたララサにこっぴどく叱責され、泣かれている自分も大層不憫で間違いない——。

等と自己憐憫に陥っている場合ではない。

ああもう頼むから本当に泣き止んではくれないか。そんな想いを込めて精一杯の行動が、コレとはいかに。

『コレ』。すなわち自分の毛並を押し付けて寄り添い、舌先で涙を拭う事をさす。

（【兄上も思い知ればいい】）

この身で出来る限られた行動の数々を。

抱きしめてやりたくとも、四つ足の身はこのように不自由極まり

ないのだ。・・・その他にも色々と。

（【だが】）

この身の誇る『人の子の限界を飛び越した能力』は使い道があるのも、また確かだ。

広場からここまで。そしてジャスーリート家の門構えなど、実際に取るに足りない筈だった。

獣であるという在り方のもどかしさを差し引いても、この血筋を今日ほど有り難く思ったことは無い。

きっとそれは兄も同じだろうと思う。ウォレーンは、兄が飛び出していった窓を見やった。

。。。。

。。。。

「ねえ、タバサちゃんのお姉さん？」

柔らかな声に振り向けば、これまた見事な赤毛の少女がこちらを見つめていた。

視線を合わせるようにしゃがみ込むと、茶器の乗ったトレイも床に置く。そしてふんわりと柔らかい微笑を浮べた。

「・・・・・・ララサです」

「そう、ララサちゃんも素敵なお名前ね。——私はディーナ。こちらはルゼ様にフィルガ殿。それとダグレス。・・・・・・貴方は？」

ディーナと名乗った少女は紹介しながら、カップにお茶を注いで行く。

【ウォレーンと申します、ディーナ嬢】

「ウォレーンもロウニア？」

【——はい】

「そう。お茶をいかがですか？ちよつと難しいかしら？」

【はい、折角ですが。お気持ちだけで充分です】

そう残念ね、と軽く受け答えながらも、令嬢は優雅にカップを差し出した。

「どうぞ、ララサちゃん。——あんまり泣いたら乾いちゃうわ。喉、
渴いてるでしょう？これを飲んで落ち着いて？」

「——はい」

湯気の立つカップを受け取り、ララサは静かに頷いた。その拍子
にまた涙が一滴、零れ落ちる。

「私も頂くわ」

「俺も」

「ええ、どうぞ。はい、ルゼ様。フィルガ殿」

この館の女主人とその跡取りらしき二人も、腰を下ろしてカップ
を受け取った。円くなって、皆で静かにお茶をすすり合う。

ララサも遠慮がちに口を付け、いくらかその温かさに慰められた
ようだ。呼吸が落ち着きを取り戻す。

それと同時に白かった頬に、うつすらとだが赤みが差す。ララサ
がお茶を飲み干した頃を見計らって、ディーナ嬢が声を掛けた。

「——あのね、ララサちゃん。心配掛けてごめんなさいね。タバサ
ちゃんはいじょうぶだから、安心してね？」

「ほんとう？」

「ええ。あのね・・・きつとタバサちゃんが居なくなったのは、私
のせいなの。さっき私のドレスに着替えてもらったから」

「・・・・・・？」

「だから、ね。——だいじょうぶ。必ず連れ帰るから。待つていて
ね」

「・・・・・・」

につこりと微笑むディーナ嬢を前に、ララサはこくと頷いて見
せる。

そのまま——ララサの身体が再び、隣にいたオオカミの身体に重
心を預けていた。

【ララサ？】

側に居たルゼ婦人も、ララサが落しかけたカップを受け止めて
いた。まるで何もかも承知していたように、自然だった。

すうすうと微かに己の毛並を撫でるのは、安らかな寢息でいいと思う。

「さて。オオカミさんや？——貴方ララサを寢台に運べるわね？」
ニッコリと婦人が、ララサの頬にかかる髪を戻してやりながら微笑む。優雅なのだがなかなか有無を言わせぬ迫力があつた。

【はい。ですが……。ララサは一体っ！？】
疑問を口にしながらも、ウォレインは自身で答えを導き出していた。

弾かれたように彼女を振り返れば、もうさつさと立ち上がって窓から身を半分乗り出している。

「大丈夫。ほんの一滴にも満たないから！——^{いってき}それでは行きましよう、ダグレス」

【ええ、嬢様】

先ほどのたおやかな笑みとは、また異なる笑みを浮べて言い切られる。……それは、どこかのお調子者の笑顔に似通っていた。どうやらこちらが彼女の本性の気がする。

いたずらっぽく片目を閉じて見せる笑みは、一瞬のうちに闇に紛れて行ったからもう確かめようも無いが。

「——ディーナさん……！アナタって人は……！」

押し殺したように呟きながら続く若者に、ウォレインは何となく同情した。

レシピ * 25 * 狼狽するしかないオオカミ。 （後書き）

お久しぶりでございます。

明けましておめでとうございますですよ、もう。

「更新はマメにするね！」等と前回（およそ一ヶ月前）身内にぼざいたのは私です。

「ああ、もう話し忘れた」

と、言われたりしてます。返す言葉もございません！

そんな調子ですが・・・書くのはやめてません
お付き合いありがとうございます。

レシビ * 26 * 黒装束の二人（前書き）

時間的には『あの橋』の『人の子の事情』の、しばらく後の時間軸。
読んでいない方に見てみたら、『イミフ』もいいところぞい
います。

こういうしょうもない帳尻合わせは好きです。

—— 気に入った？

うん。キレイね、これ。キラキラして、透明によく澄み切って。
これ・・・なあに？

—— うん。キレイでしょう。

うん！ありがとう。でも・・・本当にコレどうしたの？

—— これはね・・・。。『星のカケラ』なの

ええっ！？

。。

。。

「これはこれはこれは——。。。。。。実に可愛い娘さん
だ。こんばんわ、お嬢さん」

「こんばんわ。はじめまして」

寝ぼけまなこでタバサは挨拶を返した。眠い目をこすりながら。

(また、知らない人に知らない場所・・・。?)

ここはどこですか。見渡した所、ジャスリート家ではないのだけ
はわかる橋のたもと。ふと見上げれば翼持つ獣の像が、こちらを見
下ろしていた。

街中ではなさそうだ。辺りに民家らしき明かりも見当たらない。
風が吹きぬけて行く、開けた場所は街から随分離れた場所のはずだ。
(私・・・帰れるのかしら？そもそも、帰してもらえるのか

しら?)

そう疑問を口にするよりも早く、タバサを覗き込んでいた男性が振り返って背後の影に怒鳴った。

「——どういことだっ、リゼライっ!？」

「どうしたもこうしたも存じ上げません」

はっはっはっはっはと乾いた笑い声に出迎えられて、タバサはまたどうしようもない——『あの気持ち』に襲われた。

あの女神像の前で『ララサではないのか』とため息付かれた時と同じ。

そんなの私のせいじゃない!そうは思っのだが、どうしても申し訳なさが顔を出すのだ。

ともあれ目の前のこの男の人とは、初対面で間違いないはずだ。

タバサは当然・・・尋ねた。

「——おじさん、だあれ？」

「おじさんっ!」

タバサは地べたに直接座り込んでおり、見上げる形で小首を傾げた。

真っ黒い衣装にこれまた、真っ黒の外マント。頭にも真っ黒の布地を巻きつけて、覗き見えるのは目元だけ。

でも声と雰囲気から察するに、年の頃は中年だと見当付けたのだ。多分、自分の父親くらいの歳だと。

「その通りではございませんか？」

頭を掻き毟るように両手で抱えている男性の傍らに控えた、線の細い小柄な女性が答えた。淡々と。

彼女もまた全身真っ黒の出で立ちで、頭からベールを被っている。同じく覗くのは目元から上、額だけだ。

額には真紅の飾り玉が、彼女の眉間で揺れていた。彼女の眼もまた蜂蜜色なのをタバサは見止める。

濃厚な蜂蜜に挟まれた、煮凝ったかのような鮮血の紅。それはまるで彼女の第三の目のようだ。

タバサはその真紅に見覚えがあった。どこでだったかは、いまひとつ引つかからないが。

「リゼっ！これはどういう事だっ！？ディーナ嬢の寝室はあの部屋だったろうが」

「わたくしには存じかねます」

「リゼ……頼むぜ、本当に」

「わたくしの約束は”獣を聖句で魅了して”なおかつ”部屋の主をギル様の元にお連れする”の二点のみは—but ですが、何かご不満でも？」

「その部屋の主じゃないじゃない場合は！契約不履行だろ！……どうなっている」

「で・す・か・ら・存じ上げません。しいて言うなら——あちら側がまたしても一枚上手だったのでは、としか申し上げられませんが、きっと彼女の騎士団ナイツが不埒な考えを持つ者の邪念をいち早く察知して、対策を練っていたと解釈するのが自然かとオモイマスがいかがでございますようか？」

淡々と——。かつ、きつちり。そこに容赦と言ふ言葉は微塵も感じられなかった。と、言うよりもこの女性は『ほら見たことか』と言いたい……言っているに違いない。

タバサは、彼女の抑え込んでいるであろう怒りの欠片を感じていた。それにこの『おじさん』はなぜ気がつかないのだろうか？

（鈍いのだろうか）

それは——。羨ましいような。そうでもないような要素である。

気付かないのは幸せかも知れないが、大事な事を見逃すおそれもあるものだ。タバサは二人を見守った。

「リゼ。貴様は誰の味方なんだ」

「——。」

何も答えない、リゼと呼ばわれる女性の唇の端が持ち上げられた気がした。真実はベールの下なので、確かめようもなかったがタバ

サにはそう思えてならなかった。何て不敵に笑うのでしょうか、こちらのお姉さんは。といった調子で思わず目が釘付けになってしまう。

急に寒さを覚えたタバサが、思い出したように自分の両腕で己をかき抱いた。

展開に驚いて気が回らなかったが、タバサは今とても薄着なのだ。しかもこれはデイナー嬢の服。

とても着心地良くてよろしいのだが、それも屋内ではならぬの事。春とは言えこんな夜中は、まだまだ冷える。

「……アンタたち」

リゼ、と先ほどから呼ばわれている女性が獣二頭に目配せを送る。その濃い蜂蜜色の眼差しを向けられて、タバサは何となく落ち着かない。

闇の中——灯された僅かばかりのかがり火が、二人の輪郭をゆらめかせて浮かばせている。

それだけの灯かりではなかなかタバサとて周りが見えるはずもないのだが、どういうわけか二人は明るく照らし出されて見えるのだ。額の紅玉が顎をしゃくった彼女の額で揺れる、その細かな様までがタバサには見えていた。まるで、その存在感を主張するかのような。

「お嬢さんが寒がつているから。ほらほら、毛皮を貸してやるのよ」命じられるなり、二頭は左右からタバサを挟み込むようにして身を寄せてくれた。その途端、もふっとした温かさがタバサを包み込んでくれる。

くるくる・ほわほわに包まれて、タバサは何とも幸せだと思った。
(わあ……！素敵です)

タバサはうつとりと目を細め、その柔らかさに迷うことなく両手を伸ばしていた。獣たちの首を抱え込む形で、より一層密着させる。獣たちはいたって大人しく、タバサのしたいようにさせてくれて

いるようだ。

調子に乗って『ふわ・ふわ・ふっわ・ふわ!』と軽く歌うように
呟きながら、タバサは獣の毛並を堪能する。

「あなた・・・ねえ。私が言うのもなんだけど、もう少しは慌てたら?」

「慌ててもどうにもならないので、慌てる気もおきません」

「——そう。あなたもちよつと変っているみたいねえ? 獣が怖くないみたいだし。あなた館では見たことの無い顔だけど、ディーナとはどんな関係なの?」

「ディーナ様とですか? ええと、今日お会いしたばかりです」

「そう・・・。。あの『箱入り』と接触が許されるなんて、何者あなた?」

(そう仰るお二人こそ、何者かと思いますが・・・?)

タバサは上目使いで窺いながら、慎重に答えた。

「ただの飴屋の、菓子売りの娘でございます。まあ、そのお。色々
とありましてですね、連れて来られたのです」

「何、あなた貴族じゃないの? その格好はじゃあ、あの子にさせられたくちかしらね?」

そうなのだ。正しくはルゼ様とディーナ様のお見立てだ。

(貴族様などとは!・・・滅相もございません)

タバサは無言で頷いた。うな垂れた、と言つてもいい。意識も
すっかり覚醒し、改めてこのまとう衣装に気後れしたからだ。

『囚われのお姫様にふさわしい格好をしましょうね、タバサちゃん
や——ね?』

そう、有無を言わせず着替えさせられたドレスは、タバサをより
一層心細くさせた。

はつきり言つてあちこち余裕が無さすぎるのだ。ゆつたりした、
いつもの着慣れた服とは全然違う。その縫製から型から、何から何
まで。否が応でもタバサに緊張を強いてくれるったら、ない。

嫌でも姿勢を正さずにはいられないのだ。何せだらしなく背中を

丸めようものなら、息がし辛い。

（うとうとディーナ様へ華奢すぎます……）

曲がりなりにも菓子屋の娘はふくよか……過ぎるのかもしれない。タバサは今までそんな事を気にしたこともなかった。

だがこういう服を着させられて、初めて解る事もあるものだろう。そうして蘇ってくる言葉もまたあるようだ。

（「——春の乙女の衣装は体の線が出るから……ガンバって？」などと言われたのも、記憶に新しいタバサである。

大事なお役目の儀式の衣装は、きつとタバサなどお目にかかったことも無いような、さぞや立派なものなのだろう。

（きつと……ディーナ様みたいな華奢で綺麗な、お嬢様が身に着けるに相応しい作りに違いない）

タバサは思わず己を見下ろした。胸元は締め上げられ持ち上げられた格好だし、腰周りも限界ぎりぎりまで余裕の無さ。

いかにほっそりとくびれさせ、胸元をふつくらと見せるか。それがこの衣装の目的なのだ、多分。

女性らしさを——着る者にも見る者にも、意識させる。

さらっとした滑らかな手触りの生地は恐らくは最高級品の——
絹^ル。

その艶のある光沢は、それはそれは優美だ。それが街娘には分不相応な品だと言う事くらい、誰に言われずともタバサとて承知している。

タバサは仕立て屋で生地を見立て、自分で衣服はこさえているのだ。

品によって、それなりの金額が付けられているのくらい学習済みである。

（こういった物を普段から着こなせる事こそが！……でしょうねえ、お嬢様っていうのは。私には無理なようです）

薄淡い翠の色彩が美しく、それを互い違いに重ねたドレスは歩きたびにひるがえり表情を変える。

派手な装飾すら無いものの、不思議と華やかさを醸し出している。それこそが一級品の証なのだろう――。

タバサとて曲がりなりにも『商人』の端くれ。目は利くほうだ。いい物は主張しないが、存在感が半端ではないのを経験上知っている。

そうなのだ。気心地は良いのに、タバサの気持ちはなぜか沈む。

鏡を見て思ったことは、この衣装はお嬢様のための物だという事。

――自分ではなく。

『わあ、タバサちゃん！かわいい！お姫さま！』

そんな無邪気な賛辞にタバサは力なく笑って見せたが、何故だか次の瞬間には涙が零れるという失態をやらかし。

（せっかく、お褒めくださったのに。何故、涙よこぼれるのだ？）
しかも止め処なく。

『タバサちゃん、どうしたの？………帰りたくなっちゃった？』

宥められてお茶を勧められ――。気がついたら寝台の上。そして現在に至る。やれやれ。

。。

。。

タバサはじつとりゼという女性を見つめていたが、ふいに思い当たって声を上げた。

「おそろいみたい」

慎重に眉間の紅玉を指差す。

「何が？」

「――ダグレス様と」

思わず指差して答えたタバサの、人差し指を勢い良くリゼははね付けた。ぺしんと小気味良く、叩かれた指先同士が音を響かせる。タバサが驚いて目を見開いているだけの間に、リゼは立ち上がると両手を打った。

『退却です！四の五の言わずにずらかりますよ、ギル様！！』

それを合図に気配が変る。場の空気が。この場を支配する権利を主張する者の、圧倒的な気配が。

。。

。。

ばささ、と夜風を切って舞い降りたのは、二羽の孔雀たち。

”　　”　　タバサ嬢、発見！！”

”　　”　　——発見！”

そして——。

闇の中から一步を踏み出そうとする、これまた闇をまとう・・・
獣。

タバサも含め、人の子一同はその気配に身構える他はない。

焚き火の炎が届かぬ木陰から、獣が息を潜めているのだけは伝わってくる。

彼がいつ踊りかかって来てもいいように。

男性の方は剣を。女性の方は小刀を構え、タバサは両脇を固める
獣たちにしがみ付いた。

闇の中からこちらを窺っているであろう、その獣の眼は果たして
何色だろうか。

レシビ * 26 * 黒装束の二人（後書き）

『おいおい、早くしないと』

春が！春がまた巡って来まっする！

今年の春の陽気の勢いに乗せ、始めちゃったよな
『神殿まえ。』

お付き合いして下った方々！

春はすぐそこ・・・！のハズです！

レシビ ……に何の関係もございません！オール キャスト！（前書き）

『ふざけんな』

『ネタバレ反対』

そんな方は即効引き返してくださいね！

レシピ・・・に何の関係もございません！オールキャスト！

「もう嫌だ！——オオカミさんなんか・・・嫌いっ！だっ・大嫌い！あっちに行ってよ——！」

【タバサ——！】

泣きじゃくりながらも眼差し強く、挑むような彼女にウォレスは——。

「言っておくけどね、ウォレーン。タバサちゃんを大事に出来ないようなら、帰って？——はつきり言われないと解らない辺りで落第だけど」

「・・・・・・ララサ」

腕を組み細いおとがいをそびやかせたララサに、きっぱりと告げられたウォレーンは——。

『嗚呼——そうさね。今年の収穫祭もきつと素晴らしい祝いになるだろうよ。何せ今年の春の乙女は、女神様に選ばれたも同然の——』

。。。。

。。。。

——以上、書きかけ全編からの拾い集めでした！

いっぺんやってみただけです。

そう。もう後は書き込むだけ！骨組みはOK！・・・のハズなんですけどねえ？

微妙に・・・どころか『もろに』ネタバレあります。←

「ギル様」
おじさん。——ええ。言葉の通り「おじさん」です。
仮名です。

「リゼ」　したたか姉さん。上司を斜め45度くらいから見下ろしがち。――の割りに付き合ってやっている。

レシピ ……に何の関係もございません！オール キャスト！（後書き）

『いっぺんやってみたかった』

なのに何故かぐったり来ましたよ、自業自得

以外に時間掛かってしまい

『おい。本編書くのと何ら労力変わらないじゃないか！』

すみませんです。

少しでもお楽しみいただけましたら……（ごにょごにょ）

レシピ * 27 * おあずけをくらうオオカミ。 （前書き）

『おあずけ』

オオカミはいつだって本当は腹ペコなのが、物語の王道（？）でしょう！

そして、やせ我慢が得意。

……な、はず。

レシピ * 27 * おあずけをくらうオオカミ。

——『星のカケラ』？

そうよ。『星のカケラ』よ。

——本当にお星さまのカケラなの？

そうかもしれないし、そうでもないのかもしれない。

——どっち？

どちらでも。タバサの好きなように。

「じゃあ後は君に任せたから、がんばってね——？私の館で間違っても、変な気起こすんじゃないわよ」

そう言い含めつつ、老婦人はウォレインの頭をぽんぽんぽんと叩いた。しかも扇でだ。

【・・・・・・・・・・・・・・・・】

ウォレインは答えることが出来なかった。

ただ身を固くして、身動きを最小に抑えている。

「うーん。何とも忍耐力の要る任務ですこと。がんばれー若者！では、私は事態の收拾に行つて来るから！待っていなさいな」

そう言い残してこの館の主人、ルゼ・ジャスリート公はさっさと

部屋を後にした。

ウォレインはその背を見送る。扉が閉まる直前、その隙間から彼女が笑っているのを見逃さなかった。

夜目のきく狼であるから当然なのだが、それが無性に腹立たしかった。

（【完全に遊ばれているな】）

ウォレインは前脚を投げ出してはいるが、しかし後足はいつでも飛び出していけるようにしている。

・・・いざという時のために。
今。

ウォレインはとんでもない忍耐を強いられていた。

はつきり言つて、賊を討伐する隊にでも参加していたほうがまだマシだと思う。

耳元で規則正しく聞こえる寝息に、寄りかかる様にして押し付けられた柔らかな肢体――。

ララサ、である。

しかも一服盛られ、あつさり意識を手放した状態である。

ルゼ公に寝台に運んでやれと命ぜられ、その身を担ぎ上げてやつたまでは良かった。

ララサが首筋にしがみついていたのだ。

不安なのだろうか。寒いのだろうか。

何にせよ、獣の毛皮が心地よいらしい。必死で縋^{すが}りつくかのように、抱きついたまま離そうとしないのだ。

振りほどこうと思えばそう出来る、ハズだ。

ウォレインは自問する。だが、体が動かない。動いてはくれない。薬の威力もあるのだから、そう簡単に彼女の眠りを妨げる心配も無いはずだった。

そう自分自身に言い聞かせてみるものの、そのぬくもりを振りほどく事ができない。

だからウォレインはただのぬいぐるみよろしく、固まるしかない

のだ。

その様子を見届ける事も無く、赤い髪の少女と黒い獣は窓から飛び出して行ってしまった。

次いで、灰銀色の髪の青年も同じく。

残されたのはララサとウォレーン、それにこの館の主だったという訳だ。

しかしその最後の第三者も、ふくみ笑いをしながら行ってしまった。

ぱたん――。

何やら扉の閉まる音さえが、笑いをふくんでいるかのように感じてしまう。それは自分の被害妄想のなせるワザだろうか。

（【ああそうだ！きつとそうに、ちがいないとも！】）

大体からにしてこの状態で何が出来るというのか。

獣の身で何が！

出来る事はごくわずか。

例えばそう。この毛並のぬくもりを分け与えてやる事くらい。そうやって、寄り添ってやる事くらいだろう。

一緒にこうやって身を横たえてやるのが、精一杯だ。

『変な気を起こすんじゃない――』

【.....】

ウォレーンは細心の注意を払って、首を捻った。すぐ鼻先にはラサの寝顔がある。

くうくうと規則正しい寝息が、狼の毛先を微かにくすぐっていた。ふわんと甘ったるい香りのする髪は、ゆるやかに波打ち頬に掛かっている。

その頬の描く曲線はまだふつくらとあどけなさが残っていて、普段よりずっと無防備さをさらけ出しているのだから

——堪らない。

薄く開かれた唇だけが、その儚いまでに白い肌に花を添えるかのようだ。

『俺は確信している！オンナノコは全て菓子で、あまつたるい砂糖で出来ているに違いないって！』

なぜかどこその詩人崩れが力説していたのを思い出す。

あの時は思いっきりせせら笑って無視したウォレーンである。

聞き流したいして気にもしなかったはずなのだが、今まさにその言葉に頷きそうになっている自分に途惑うしかない。

（【じゃあ・・・菓子ならば甘いのか？】）

そう。

甘いに違いない。

菓子なのだから。

——食える、はず。

菓子でなくても。

ウォレーンは確かめるべく、その頬に鼻先を近づけた。

甘く香るその髪に、頬に、唇に。

（【ララサ】）

今まさに吸い込まれてしまいそうだった、ほんの手前。

見開かれるはずの無い瞳が、確かにウォレーンを覗き込んでいた。

ララサはひとつ瞬くと、ぎゅうっと強く抱きついてきた。

抱きついたと言うよりも、しがみついて自分の身を起こしたといった方が正しい。

今度は驚きで身を固くしたウォレーンの鼻っ面を、ララサは両手ではさみ込んで覗く。

【ラ・・・ラサ？】
なぜ？薬は？

「あんなもの、飲んだ振りしてただけよ。話の流れでわかるでように！」

タバサに一服盛ったという事は、私にも同じような手を使って寢なだめようとするに決まっているじゃないの！

本当に子供だましなんだから。誰が引つかかってやるものですか。忌々しいったらないわ、私のタバサちゃんをいいようにして！」

ウォレーンが尋ねるよりも、ララサの答えは早かった。

一息に説明と悪態を付くと、寝台から飛び降りる。

そしてさつさと窓枠から身を乗り出して、振り返った。

「さ、行くわよ！ウォレーン！」

【・・・・・・・・・・】

確かに変な気を起こすものではない。

アレは擲や掬ゆではなくララサの動向を見抜いての、忠告だったのかもしれない。

それはそれで恐ろしい人だと思った。

あの、ルゼ・ジャスリート公爵という人は、自分の倍以上の齢を重ねているだけはある。

（【おんなつていきものは・・・・・・・・砂糖でも菓子でもあり、そうでもない、のか？】）

ウォレーンは複雑な気持ちを抱えつつ、ララサごと窓から飛び降りた。

）

）

” ” タバサ発見！発見！” ”

” ” —— 発見！” ”

孔雀たちは代わる代わる、ぴよんぴよん跳ねながらやし立てている。

「ゾウオラン！ヨウラン！探しに来てくれたの？」

” そうだ！タバサ、無事か？ケガしてないか、イジメられていないか？”

心配そうに尋ねるヅウオランが、右に小首を傾げてタバサを見た。左目の方で。

”——— いないか？”

これまた気づかう様に尋ねるヨウランが、左に小首を傾げてタバサを見上げた。右目の方で。

「ありがとう！私、無事よ。なんとも無いわ」

タバサは両手を広げて、孔雀たちを迎える。

ヅウオランはタバサの胸に、ためらい無く飛び込んできた。ヨウランは恐るおそる、長い首だけを預ける。

そんな二羽の孔雀をいつぺんに抱きしめて、感謝を伝えた。

豪華な尾羽をたたんでいてもかさ張る二羽であるが、驚くほど重みというものを感じさせない。

だから二羽いつぺんから身を寄せられても平気だ。タバサは存分に抱きしめる。

クウルルルルル——！！

二羽から喉を鳴らす、独特の鳴き声が闇に向かって投げられる。

” タバサ、発見——！！”

”——— 発見——！！”

「誰か他にいるの？」

タバサも恐るおそる孔雀たちにならって、闇の中に声を掛けた。なぜか声が震える。

” タバサ、発見——— ついでに誘拐犯も、発見——！！”

”——— 誘拐犯も、発見——！！”

「——— ついでかよ」

黒装束の二人が構えたまま漏らす眩きは、そのまま闇に飲まれて行った。

——そのひとときわ強く凝る闇に向かつて。

レシピ * 27 * おあずけをくらっオオカミ。(後書き)

『春はもう』

来てますね。

いつのまに。

早い早い。

ついでに

このB A カップル候補達には
とつくのとうに來ています。

そんな事。

あらためて言われなくても、って感じですかね。

お久しぶりのお付き合い、ありがとうございます！

次回は作者お気に入り、二人組み。

なのでUPは・・・(いつもより)早まる・・・かと。

レシビ * 28 * 皆が頷く最強の存在（前書き）

予告通り（？）

お気に入りのコンビでお送りします！

——っというワケでもない。

微妙な二人。

レシビ * 28 * 皆が頷く最強の存在

よー元気が、がきんちよ？

——伯父上おじいさんこそ。

しけた面構つらがまえしてるなあ、オイ？

——そんなことは……………。

あるって。よし！飲みに行くか！いざ、ルシンダの店へ！

——伯父上。俺はまだ子供こどもです！

知ってるよ？ははは。早く、大きくなりてえ時期だよなあ？

目の前で上がった閃光せんこうは火花だ。

ガキイ！！

不快な破壊音と光の正体は、ぶつかり合う獣の一角とリゼの構えた刃物の衝撃だった。

まとり付くかのような長いベールひるがえを翻して、リゼという女性は実に素早かった。

予告無く飛び出してきた、闇の塊の気配を察知していたのは明らか。

でなければ、獣に一突きされていたに違いあるまい。
それほどまでの跳躍力と、タバサとて身をもって実感済みである。

タバサは悲鳴を上げた。

この女性には傷ついて欲しくないと思ったし、また獣に傷つけて欲しくないとも思ったからだ。

「ダグレス様！」

” 無事か、タバサ ”

一角でリゼの刃を受けながら、ダグレスが紅い眼でタバサを見た。ほんの一瞬の事だったが、このリゼライという女性は、実に抜け目が無いらしい。

そのわずかな隙を好機と捉えて見逃さなかった。

自分から柄を引くとそのまま身をひるがえして、ダグレスの首に一撃を喰らわせた。

それも身を返し様に、自分のベールを押さえていた額飾りサークレットを左手に構えて武器としたのだ。

「！！！」

先ほど彼女の額で揺れていた紅い宝玉が、タバサがお揃いと例えた獣の紅い眼まなこの真横で揺らめく。

” 相変らず小賢しいな、シャグランズの！ ”

「アンタもね」

一本取られたダグレスが吠えた。心底悔しそうだ。ダグレスは首を前後に打ち振りながら、その場を蹄で蹴っている。

勢い良く大地が削られて行く。闇の中土煙が上がっているようだ。奇襲をかわし、先手をとったというのにリゼの声は冷静だった。対するダグレスが怒りも露わあらに唸り声を上げているというのに。

” 小娘ごときが、我に敵うと思い上がるなよ！！ ”

押さえを失ったベールが、その咆哮ほうこうにさらわれて行く。途端に闇に浮かぶは、眩い金色まはゆだった。

美しい光の束だ。

俯きがちでベールに隠されていた眼差しも眩さが増している。彼女の闘争の現われなのか。金の髪に負けない輝きを放っていた。タバサは息を飲んで見守った。改めて思わずにはいられない。

（この女性も蜂蜜キャンディーに負けない・・・）

あのやわらかく、ひたと自分を見つめたあの眼差し。

自分勝手な才オカミを思い出したら胸が痛んだ。

そう。

あの眼差しは、ただ柔らかくあっただけではなかった。

強く、強く。

自分を捕らえ続けていた、射抜くかのような眼差し。

逸らしても逸らしても、根気強く。

それを思ったら、タバサは訳も無く泣けてきた。

。。

。。

彼女の落ち着いた声音から、もっと大人びた風情を想像していたタバサである。

そんな彼女の見てくれが思いのほか、さして自分と変らぬ風だったのには驚いた。

それに改めてよく見ると、たいそう小柄だ。タバサよりも、頭一つ分は低いだろう。

タバサは目を見張る。

その華奢な身体で、ダグレスの一撃を受け止めたのだ。

にわかには信じ難いが、事実は事実だ。

それが彼女の備えた実力のほどなのだろう。

”我をみくびるか、小娘。いいだろう、思い知るがいい！”

「どうだか。アンタもいい加減、人を見くびるのやめたらどう？」

現に一本取られているじゃないの

この緊張感にあってさえ、からかうような口調はどこか艶かしさがあ

った。

こばかにするように、目の前の獣に歌うように囁く。

彼女の唇もまた、ダグレスの眼にも宝玉にも負けてはいない。

タバサは知らず、彼女のその唇に魅入っていた。

左手に構える額飾りの円形は、獣の一角を絡め取つていなすのに最適なのだろう。

右手の小刀の出番はその次。

彼女はきつとやり遂げる。いや・・・やり遂げるまで、仕掛け続けるだろう。

嫌でも感じ取れる決意が、リゼの眼差しにはあった。
少なくともタバサにはそう感じられた。

「ダグレス様！も、もう、いいでしょう！私は無事です！」

” 孔雀ども。タバサから目を離すなよ ”

ダグレスは頭を低く構えたままで唸った。

” いわれるまでもない ”

” —— ない ”

孔雀たちの答えを待たずして、ダグレスの跳躍があった。

（なぜ！？とめられないもの、なの！？）

初めて見た二名のやり取りに、拭い去れない根深さを感じ取ってしまう。

理由は恐らく何だって良いのだ。

ダグレスにリゼ。この二名は決着を付けたがっている。

—— 例えその結果が、火を見るよりも明らかだとしても・・・

ダグレスは強い。

この場に居合わせた者達の中で一番に、だ。

タバサによるその見立ては変わらない。そんな事、このリゼとて承知の上だろうに！

わかっていながら、臨むその姿勢が理解できない。だから叫んだ。

。。

。。

「！！」

ウォレス！

タバサは孔雀たちに庇われながら、そう確かに叫んでいた。

「ウォレスだど？」

小さく唸ったのはギルムードだった。

「おいおい。勘弁してくれ——つと、つたく！！」

・ガキイン！

とこちらでもまた、火花が散った。

。。

。。

タバサは身動き出来なかった。

目を背けかけたその一瞬後、タバサの脇を影が飛び出して行ったのだ。

まずそれに目を見張った。

影はダグレスに体当たりを食らわせた後、リゼにも体当たりを喰らわせた。そのまま華奢な彼女ごと跳んだ。

” ” 何をする！！ ” ”

「ちよつと、何っ！？」

跳んだ先には、剣を構えたギルが立っていた。

リゼの身体は彼へと押し付けられる。ギルムードは片腕でリゼを抱きかかえると、自分の背後に回しこんで庇った。

右腕は剣を頭上高く構えて、飛び掛ってきたオオカミを難なく受け止めていたのだ。

彼に飛び掛っていった影は、間違いなくオオカミさんだった。

しかもこのギルとかいうおじさん。

最初は脱力したかのように呟いていたのに、だんだん声を嬉しうに張り上げて行く。

「うわぁ、おいオマエ！本気かよ？本気なんだな？あー……めでたい・めでたいっ！」

【………】

「何とか言えよ！ウオレス！」

蹴りを入れるようにして退いたオオカミを物ともせず、ギルは質問を続ける。

顔は笑みを浮べており、声はやはり弾んだままだ。

対するオオカミさんは、ものすごく不機嫌だ。今にも噛み付きそうな勢いで吠えている。

タバサはこのおじさんの親しみこめた態度から、自然と推測した。

（この陽気なおじさん、オオカミさんの知り合い？）

【貴方こそ、何のつもりですか？こんな誘拐まがいの事まで！】

「いやぁ、ほんの手違いだ。目当てはそこのお嬢さんじゃねえから！」

【手違い！？手違いで何てことをしてくれましたのですか！タバサに何かあったらどう責任取るつもりで………っ！】

「責任？喜んで取るだろ。ウオレス、オマエが」

【当たり前でしょう！っではなくて、貴方は一体何のつもりですか！？一般市民を巻き込んで！】

（その台詞！そっくりそのまま、オオカミさんに当てはまります！）
身勝手さも負けちゃいないのだが、このオオカミさんときたら自覚も無いようだ。相変らず。

（巻き込んだのは、アアタが一番最初にですよ？その認識は無いのですか？）

タバサは半ば呆れながら、この二名のやり取りを聞いていた。

どつと疲れた。もう何でも良いからいい加減、家に帰してくれ。
と、願いながら。

「いやでも、結果としては上手く運んだみたいだ！でかした、リゼ
！」

「は〜な〜せ〜！」

ギルはリゼを軽々抱き上げ『高い高い』をして、豪快に笑っている。
そんなヒゲ面に、リゼの蹴りが入った。

「よしよし、リゼ。オマエ・・・後で覚えとけよ」

上司は足蹴あしげにするなど、頬を引きつらせている。

「不必要に触る上司がどこにいますか。後で巫女王様みこおうに言いつけま
す」

対する部下リゼも負けてはいない。

それでも彼女を下ろしてあげないのは、きっとその体勢が気に入
っているからだろうか？

タバサは観察を続けた。

親子ほど歳の違う割りに、ずいぶん息の合っているように見える
——上司と部下を。

。。

。。。。

風が渡ってくる。

おぼろげに浮かぶ橋の輪郭の方からだった。

くべられた薪たきぎがはぜる。焚き火たが大きく揺らめいて、その人影を
も揺らした。

（いつの間に・・・ディーナ様！）

タバサはそう思ったが、誰一人彼女の登場に驚いた様子は無かつ
た。

ギルは小さく『おお』と感嘆の声を漏らし、リゼは『ちいっ！』
と大きく舌打って迎える。

孔雀たちは嬉しそうに鳴き声を上げて、飛んでいった。

「お利口さんたち。ご苦労様」

” ” ディーナあ、タバサいたよ！無事だった！”

” ” ——無事、だった！”

えらい？えらい？と口々に尋ねる孔雀たちに、ディーナ嬢は『エライ・エライ』と首を撫でて応えてやる。

。。

。。

「ずいぶんとゴキゲンですね、ギルムード殿？」

存分に孔雀たちを労ってやってから、ディーナ嬢はおもむろに視線を向けた。

「おおこれはディーナ嬢、待ちかねましたぞ。相変わらず美しいですな！」

恭しくギルムードは広げていた右手を、胸に押し当てた。

「何。これは私めの甥っ子でして。コイツの本気を見れて微笑ましく思っていたのですよ。子供の成長は早いものですな」

【伯父上！】

（オオカミさんの伯父さん？この、おじさんもロウニア家って事？）
タバサを彼の視線から庇うように立ちはだかっている、オオカミさんは何ともバツが悪そうに唸った。

オオカミさんの遠慮がちな視線に、タバサは思わず顔を背けてしまった。

自分でもわからない。衝動的に俯いたまま、まともに彼が見られなかった。

【タバサ・・・その、すまなかった。巻き込んで悪かった】

そんなタバサにオオカミが囁くように謝っても、応える事が出来なかった。

。。

。。

「やはりオオカミさんは、ギルムード殿の御身内でしたか。今日のこの騒ぎはロウニア家お二人の企みですか？」

「いやいや！違いますよ、ディーナ嬢。ほんの手違いが重なった上の、偶然です」

「タバサちゃんを巻き込んだのは、手違いですか？」

「ええ、そうですよ。——なあ、リゼ？」

「あたくしめに振らないでクダサイ。それといい加減、手を放してクダサイ」

「俺たちディーナ嬢に用があつたんだよなっ！なっ！リゼっ？」

「うんと言え。」

「うんと言えば解放してやる。」

「言わぬのなら——。」

「そんな笑顔の脅迫である。」

ぎゅううつと腰に巻きつく腕に力が込められ、リゼは身を掬よじって暴れ出した。

「いい加減にしろよ、おっさん!!」

「リゼ？俺たちの仲だろ！うんとひとつ領けばいいだけだぞ？」

「誰がつ！」

ギルにうん、と頷くようにと無理やり頭を押さえつけられた格好で、リゼは暴れるのをやめない。

「まあ、リゼライさん。そうなの？」

「ないわよ。アンタに用があるのはギル様よ。私は雇われただけ！だから仲とか言うな、心底気持ち悪いわ！」

「うつわ、リゼ。俺だって傷つくんだぞ？」

「抱きつくなく離せ！！！」

「駄目だ。オマエ、ダグレスにケンカ売るから」

「売って来たのはあちらが先です！あたくしはソレを買ったまで」

「そんなもの。売りつけられても返して来い。ってか、最初から買うな！俺だって買わんわ。ダグは強えの！最強だぞ？」

”何を言う。最強は”

ちらと紅い髪の少女を見て、ダグレスは言い切った。

”我が嬢様ぞ？”

「違う」

誰もが頷いた。

『最強』の称号を受けても、ディーナ嬢はべつだん否定も肯定もしなかった。

ただニツコリと微笑みかける。

「それで、わたくしめにある用事とは何でしょう？ギルムード殿？」

レシビ * 28 * 皆が頷く最強の存在（後書き）

『絡みは？』

身内に下読みしてもらいましたが。

・・・が

『私だったら読み飛ばすね。こんな戦闘シーン。いいから、絡みはどこだよ？』

私にしてみたら充分に『絡み』デスヨ！！

男女の戦いのシーンはさ！

って、好みですよね・・・。

誰と誰が絡みかって？

そうです。

ダグレスとリゼライ。でしゃばりの獣とやり手の少女。

この二名も実はB A のつく候補だったりします。

おいおい。しゅ、種族超えちゃってるよ。

（まあ、そこら辺はいつか。）

後は。

ギルムードとリゼライ。——親子ほども歳の離れた上司と部下。

これもまたB A ・・・以下略。

「え？何？ちよっと、人並みの幸せのカケラすら、ワタシには用意されていないわけ？」

うん。君の相手は一般人はムリムリ

大丈夫！どっちを選んでも『波乱万丈』を、お約束。

「どっちもいらんわ!!」

——（いつか）つづく。

【書いてみたらR指定確定でした】

「余計にいらんわ!!」

——マジで書きたいです。本編終わってから。

レシビ * 29 * 皆が注目する春の乙女候補（前書き）

『お久しぶりでございます』

なので点呼、行きます。

タバサちゃん、 「はい」

ウォレスくん、 【ああ】

ディーナ嬢、 「ふふ」

ダグレス ” ふん ”

ギルムードおじさま、 「おお」

リゼライ、 「なに」

ツウオランにヨウラン、 ” うん ”

白ふわちゃんたち！ ” ・ ・ ・ ”

多すぎだろ、と一人つつこみ。まだまだいるんだよ、と一人遠い目。

まあいいから付き合えやーウオレス。たまにはいいだろ。

——伯父上。昼間から何ですか。

たまにはいいだろ？

——「たまには？」

ははは。ルシンダ、こいつには果実酒。度数が一番弱いやつな！

——伯父上！

孔雀を肩に休ませながら、美少女が怪しいまでに優雅に微笑みかける。

それはなぜかタバサに向けられた笑みのような錯覚すら覚えた。

それは闇に向っての方向の定まらなさが見せる、都合のいい幻影なのかもしれない。

ゆったりとさえずりだすのを心待ちにしながら、その薄く開かれた唇を見つめてしまう。

その様は同性のタバサであってすら、何やら胸騒ぎを覚えたほどだ。どぎまぎする。

それに完璧なまでに悩殺されてしまったらしいのが、オオカミさんのおじ様だ。

まあ、今さらといった所かもしれない。元より彼は孔雀に魅せら

れていることだろう。

今日また改めて強力なまでに魅せ付けられてしまった、という方が適切なのかもしれない。

それははたから見ていてもあからさまなほど明らかで、少しは落ち着かれますようにというリゼの言葉を受けても笑みは絶えず、両手を広げて今にも己の腕に迎え入れようと踏み出した。

好きで好きでたまらないのだろうな、とタバサはぼんやりと思った。

周りが冷静に受け止めている分、その浮かれ具合はやたらと浮くものだと思うほどに。

足取りも軽く迷い無く進み出るギルの前に、一羽の孔雀が舞い降りた。

右目でおじ様を睨みつけるようにし、身体と羽根を大きく膨らませている。

尾羽を広げて、ディーナ嬢の姿が晒されないようにという配慮なのだろう。

「ありがとうね、ヨウラン。大丈夫だから控えてちょうだい。心配ならばそのステキな尾羽をしまっただけでいいから」

” 承知しました、嬢様。このまま立ち位置は譲りませんので。悪^あしからず ”

語尾は嫌に区切りよくしながら、孔雀はひげ面の男を見据えた。

ええ、とディーナ嬢は甘えるゾウオランの頭を搔いてやりながら頷く。

タバサの覚えが確かならば、このヨウランと呼ばれた孔雀の方が進んで意思を口にするのを初めて聞いた。

もう一方のゾウオランがいつも会話を先に進め、その後に付いてくる形でやり取りしていたのだから、よほど警戒しているのだろう。

それを鼻で笑いながら伯父さん事、ギルはいちべつくれただけで受け流す。

「相変らずの紅孔雀ぶりですなディーナ嬢！貴女様の騎士の鉄壁の守りは、この俺には少々高うございますな」

「でしたら速やかにお引取り下さいますればいいでしょうに。お忙しい身の上でらっしゃるのでしょうか？」

これから神殿の方で執り行われる、祭典儀式のご準備などもあるのでは？」

「何。かえって乗り越えがいがあると言うものです。祭典の準備なんぞは、まあ、それはそれですよ。なあ、リゼ？」

「だからワタクシめにふらないで下さい」

実に優雅に『帰れ。』と面と向って言うディーナ嬢を、タバサは眩しい気持ちで見守った。

嫌味なのに、全然嫌みつたらしいねちっこさを感じさせないのはなぜだろう？

それは彼女の気品と機転がなせるワザなのかもしれないと羨ましく思った。

自分も是非、見習いたいものだと思ふ。

（うん。そしたらもっと上手にねえ。色々とき〜）

ちらり、と思わず当たり前のように、自分の側に居座るオオカミさんを見てしまう。

【何だい、タバサ？どうかした】

さすが。目ざといと言うか素早いと言うか。油断もスキもありやしませんと言うか。

タバサの視線を後頭部辺りであっても、すぐさま察知したらしいオオカミさんが振り返った。

しゃがみ込んでいる分、またもろにその蜂蜜色の瞳と目が合った。

（どうもこうも別に・何もありませんよ——だ？）

そう答える代わりに、白ふわ獣たちをまた抱き寄せたタバサである。

その二頭の首筋をいっぺんに抱きかかえて、オオカミさんとは距離を取るうとしたのは、ほとんど無意識でだった。

（だって。近付いてこようとするんだもん。オオカミさん、ずるいよ）

タバサの瞳を捕らえつつもさり気なく、彼がこちらに寄ったのがわかったから身を引いたのだ。

またその素晴らしい毛並を押し付けて懐柔しようと言う魂胆だな、思ったから。

そうしたらタバサは『オオカミさんの何もかも』を許してしまうだろう。

認めたくは無いが、そんな自分にとくに気が付いてしまっているタバサである。

その諦めつつも受け入れてしまう態勢が何なのか、説明は付かないのがまた癪に障る。

元々そんなに本気を出して怒ってはいないのだって、バレバレだろう。

今までの事はモチロンの事、これから先に彼が何をして。押し進めても。多分タバサは許してしまう。

彼が心の底から悪かったと思って詫びてくれているのは解る。

だが、これとそれは別なのだ。

オオカミさんはすかさず見逃さず、確実にいい気になるだろう。

調子よく付け上がるタイプだろうな、というのがタバサの読みである。

それすらもタバサは許容してしまいつつあるのだ。やはり何ゆえそんなに寛大になれるのかが言葉に出来ない。

今はまだそんな自分を認めたばかりだ。恐らくはあのディーナ嬢の発言辺りで気が付いた。

というよりも気付かされた、と言った方が正しいか。

『タバサちゃんを泣かせる悪いオオカミなんて、ダグレスにやつつけてもらえばいいじゃない』

アレは意外なほどタバサを驚愕させた。心細さで泣き出したのではなく、彼が心配だったからだ。

そんな自分にも驚いて混乱してしまった。

オオカミさんがダグレスに蹴散らされでもしたらと思ったら、タバサは気がじゃあなかった。

彼はタバサを諦めちゃくれないだろう。

自惚れもいいところとは思うが、彼の執着は結構深いようであり引く。

『どうか春の乙女役を』

不毛なやり取りを繰り返したくは無いのだ。流されたくも無い。

そうするための対処の仕方がわからない。だからタバサは黙り込んで身を固くして引く。

それを頑なと受け取ったのだろう。オオカミさんが明らかにむつとしたのがわかった。

【タバサ。俺はちゃんと謝っているのに、どうして何も言ってくれないんだ？】

明らかに彼なりの焦りもあるだろうが、タバサを責めるような響きに胸が詰まった。

ズシンと重みが増してきつい。

（はぁ・・・やっぱりな。ロウニア家の若様め。アナタ様こそどうしてそう、高慢ちきなのか教えてくださいよ）

自分の思い通りに人が反応しないと機嫌を損ねるなんて、ただの子供じゃないかとタバサは一気に脱力した。

（人の気持ちは思い通りにならないものなんですよ？アアタはか

しずかれて甘やかされてきたようですねー)

【タバサ、いい加減に答えてくれないか？】

そんな風に言われると、また哀しくなるのはナゼだろうか。
込みあがってくるのが怒りだったらしいのに、とタバサは思う。
それなら顔を真っ赤にしながら怒鳴るとか、地団駄を踏むとかし
て暴れてやれるのだが。

やはりオオカミさんと話しているとぐったり来るばかりだ。

タバサがうな垂れると、頭に何かがやわらかく押し付けられた。
思わず見上げるとそれは、タバサに寄り添ってくれている白いふ
わもこ獣の鼻先だった。

どうやら慰めてくれているらしい。

見上げると真っ黒いくくりお目目が気遣わしげに潤んで見えた。
その優しさが嬉しくて、タバサの瞳も潤み出す。

獣がタバサの頬を舐めた。きつと涙が零れ落ちそうだったのだろ
う。そうなるよりも早く獣はそうしてくれたらしい。

【タバサ！何とか言ったらどうだ！黙っているだけじゃわからない】
オオカミさんが苛立ちを隠しきれない様子でタバサに近付いてき
た。

そのとたんすつくと立ち上がり割って入ったのは、タバサが抱え
ていた右の方の白い獣である。

それを忌々しそうに睨み、オオカミさんが唸った。白い牙がのぞ
く。

「きらい」

瞬間口を付いて出た言葉は、自分でも驚くほど平坦だった。

【え？】

「オオカミさんなんてきらい。あっちへ行つて」

【タバサ】

オオカミさんの耳が、しっばが、しゅんとへたれてしまった。
タバサの胸の痛みと重みがまた増してしまうのはナゼだろう。

蜂蜜キャンディーはもう二度と口に出来そうも無いな、と思うのもナゼなのだろうか。

ダグレスの耳がピクリと震え、こちらに向けられたのにタバサは気が付いていないようだ。

しかもそれだけではない。

前後左右自在に操れるダグレスの耳が解りやすいだけで、その他の注目ならぬ聞き耳にウォレスは気が付いていた。

おっさんの甥っ子も子供ですな――

「も」って何だ、「も」って。リゼ

まっただ。

ダグレス。貴様まで。

ふふ。

おおデイナー嬢。お見苦しいところを。ですが少々大目に見てやって下さい。が。ん。ば。れ。ウ。オ。レ。ス。我。が。甥。心。配。し。な。く。と。も。後。で。ち。ゃ。ん。と。慰。め。て。や。る。か。ら。な。！

そんな潜めた声が届くのは、ウオレスの耳だけのようである。
面白がっているのだけは伝わってくる。

（【外野うるさい！そっちはそっちでやってろ！】）

そんな思いを込めてウオレスが睨むと、外野はそろって知らん顔を
をした。

完璧に野次馬に囲まれていると思うと腹が立って仕方が無い。

「ところで私に用とは何でございましょうか？」

ディーナ嬢が切り出すと、ギルは大げさに手を叩いてから膝を折
った。

左手は胸に当て右手を差し出す。

「よくぞお尋ねくださいました、ディーナ嬢！どうか此度の春の祭
典の乙女役を引き受けて頂きたい。

このギルムードが騎士として貴女様に付き従いましょうぞ。貴女
こそ春の乙女に相応しい。皆に春の祝福を願います、乙女よ。どう
かこの手をお取り下さい」

【伯父上！？】

大声で叫んだのは他でもないオオカミさんだった。

タバサも驚く。その声の大きさにもだが、何と言うか。

ディーナ嬢にそう申し込むためにこのような企てをして骨折った
らしい、オオカミさんのおじさんにもだ。

しかもこれだけ人がいるのに彼は怯み無く堂々としている。

「まあ。だってその日は神殿仕えの皆様にしてみたら一大事。ギル
ムード殿もそうではありませんか？お戯れを」

ディーナ嬢が孔雀に頼ずりしながら、流し目を寄こす。流石のデ
イーナ嬢も苦笑しているらしい。

それだけ、このおじさまの言い出したことは突拍子も無い事なの

だろう。

タバサは皆をぐるりと見回した。

「祭典の日は俺は非番ですからご心配には及びませんよ」

「おっさん。――何を言い出す。そういう問題じゃない。正気でらっしゃいますか？」

アアタ様は巫女王様直々の筆頭護衛騎士でしようがっ！！

――腐っても一応な。とギルの傍らに立つリゼが、呆れたように口を挟んだ。

「腐ってもは余計だ！何だリゼ？よしよし妬いているんだな？悪いが俺は本当に休みを勝ち取ったんだ。んん？」

何だその疑わしそうな目は。上司はもつと敬いたまえ、リゼライ君！」

「敬いようがありませんよ、ギル様。ナ・ゼ！妬かねばなりませんか、おっさん？冗談も程ほどになさって下さい」

「何だよ！俺はナア、その日の休みを勝ち取るために、この三ヶ月間休み無しでがんばっているんだぞ！現在進行中^{ねんげい}でだ！ちったあ^{ちったあ}労働^{ねんげい}え！」

「あゝそれはそれは。ご苦勞様な事ですね。だから何ですか？ワタクシが申し上げている問題は休み云々ではない事くらいお分かりになりますよねえ？とぼけるのも大概にして下さい！」

「こつら！リゼ！上司に『ご苦勞様』は無いだろう！『お疲れ様です』って言うんだぞ、こういう時は」

「部下に勞いの言葉を求めたのはアアタ様でしょうが！紅孔雀に乙女役を申し込むその気が知れないって言ってるの！」

すかさず入る指導に、にべも無く返る正論の応戦。

この二人が一緒に祭典の準備をするといいと思う。

それか二人が乙女と騎士役でもいいのでは、と思うタバサだったがもちろん黙っていた。

間違いなくリゼライから怒鳴られるだろうから。

それと何となくなのだが、素直じゃないなとも感じてしまう。

（素直じゃないな、このオオカミさんのおじさん。本当に誘いたいのは、きっと）

ちらとうかがうと、不機嫌そうに眇められた瞳と目が合ってしまった。

「何？お嬢さん？何か言いたそうね」

滅相もございません！

慌てて思考はそこで断ち切り、精一杯首を横に振ってみせる。

「そうですね。リゼライさんの仰る通りです、ギルムード殿。

しかも、その女神様の御前で裁きを待つ身と致しましては、お受けするわけには参りませんわ！それに」

「それに？」

「春の乙女と騎士役の正式な候補者ならこちらに」

ディーナ嬢がいたずらっぽくこちらに笑いかける。タバサはどきりとした。己の胸を押さえつけるほど。

それは色っぽい事この上ない、流し目を差し向けられたからだけではなさそうだ。

「ねえ、そうでしょう？二人とも」

「何だよ！ウオレス、そういう事なのか？んん！？この伯父を差し置くとはやるな！」

「じゃ、おっさんは引いた方がいいね。完膚なきまでにディーナ嬢にフラれる前に。今ならまだ間に合う五秒前」

「うるせえぞ！リゼ」

（うつわ。なんででしょうか、皆さん！して、何を私に言わせたいのですか！？）

タバサは急に恥ずかしくなって顔が火照るのを感じた。

思わず白ふわ獣の毛並に顔をうずめてしまうタバサである。

おまけに頬だけではなく、もう一方から向けられているであろう視線が――熱いと言っよりも、痛い。

レシビ * 29 * 皆が注目する春の乙女候補（後書き）

『もう 本当に』

お付き合いありがとうございます！

今回実にまとまらず苦戦。

キャラ過密すぎ。

ですが次回はもっと多い。

うわ~~~~~!!!ガンバレ！

ざっつ。えんたていめんとお！

すみません、言ってみただけです。

レシピ * 30 * 祭典前のお祭り騒ぎ（前書き）

すみません！

忘れ去られていたっておかしくない程のあきっぷり。

しかも、前回よりも更にキャラ過密。

レシピ * 30 * 祭典前のお祭り騒ぎ

いらっしゃいませ！お菓子がご入用ですか？それともキャンディですか？

——ああ。ええと、その。そうだね、お勧めはあるかい？

えと、コレなどは、いかがですか？おいしい上にちょっとお楽しみ付きの焼き菓子です。

——お楽しみ？

あのですね、食べてみてからの楽しみ！

——じゃあ、コレをもらおう。籠につめておみやげ用にしておくれ。

恥ずかしい。

最大級に恥ずかしい。

こんなに人から注目された事など無かったし、されとも思わなかった。

商人として、売り子としてお客さんたちから浴びる注目とはワケが違う！

そうだ。お客さんたちは、商品を見ているものだからこそタバサ

はへっちらだつたのだ。

（もう！オオカミさんは何だつてこう、人目っていうものを考えてくれないんですか？）

いついつまでも、こうやって黙りこくっている訳にもいかない。

タバサはそろりと目蓋を持ち上げた。

しろふわの毛並越しから、熱い視線の方を見る。

「！？」

タバサは一気に目を見開いた。それと同時に膝立ちになる。

（あれは・・・！？）

見上げ、仰ぎ見たのは上空。

何か光るものが、こちらを目指している。

それは真っ白い子馬と、顔を布で覆った逞しい人影。

そう確認できるほどまでに近づくよりも早く、それは強烈な存在感でもってタバサに訴えてきた。

それでいて、馴染み深い気配に余計に混乱する。

彼らは迷いなくタバサたちの頭上まで来て止まる。

白い子馬は手の届かぬ上空で留まるが、その背の人影は飛び降りた。

ひらり、と子馬から身を翻した人物は、その流れのまま腰元の剣を素早く抜きさる。

それを両手で構えながら、彼は落ちてきた。

ガキイイ！——と今まで聞いた中で、最も不穏な衝撃音にタバサは思わず耳を塞ぐ。

「よお」

ひーさーしーぶーりー？

妙な節を付けてオオカミさんの伯父さま事、ギルとか言うおじさんは実に気軽に現れた人物に挨拶をした。

そんな悠長な口調でいられる事が脅威である。

何せ上から降ってきた一太刀を、こちらと同じくいつの間に構えたやら剣で難なく受け止めたのだ。

しばらく双方押し合っていたが、ふり払うのも同時だった。

お互いに距離を取るべく後ろに飛びながらも、会話は続く。

「よお、じゃねえーだろ！ギル貴様」

「あー悪かった。不可抗力」

「一言で済ますな！オマエは人の娘を何だと思っている！！」

タバサは身動き出来なかった。あまりに急な、その人物の登場に真っ白になるしかなかったのだ。

今の発言からも察するに間違いなく父である。

今ひとつ実感が湧かないのはその登場の仕方もある事ながら、父が剣を手にしている事も大きかった。

いつもは前掛けに左手には大なべ、右手にはしゃもじ——。

もしくは泡だて器が父の最強装備のはずだと信じて疑わなかった

から。

呆然と立ちつくす。

答えを、傍らのオオカミさんに求めようと視線を向けた。

その一瞬後、タバサの脇を影が飛び出して行ったものの気配にも驚くしかなかった。

それは黒いオオカミ。

その新たに見たオオカミもギルへと威嚇しているようだ。

ギルが大げさに天を見上げ、目元を覆いながら「オマエもか!!」と叫んでいるのが聞こえた。

オオカミさんとはまた、別の漆黒の毛並。

しかし、よく似ていると思った。その、気配が。

「オオカミさん？似てるみたい」

ぼつりと思わず吹き漏らせば、傍らには自分と同じ顔があった。滑り込むように自分と、オオカミさんとの間に割り込んでしつかりとタバサの右手を取っているのは――。

「ララサ!？」

タバサは素っ頓狂な声を上げて自分の片割れを見た。

ララサが力強く頷く。

その背に隠れてよく見えないが、オオカミさんは明らかに気まずそうだった。

何というか。たじたじ、と表現するに相應しいようだ。

どこか遠慮するように、一歩引いたのがその証拠だろう。

おかげで、彼の様子がよく窺えた。

耳も尻尾も伏せ気味で、珍しく視線も泳いでいる。

「帰ろう！タバサちゃん！迎えに来たの」

「う、うん」

もちろん異論などあるはずも無い。

だが思い切りよく頷くのも何だか気が引けた。

曖昧に何とかといった感じで返事をする。

何が何やらで事の状況がよく飲み込めないのだ。

（何故、ここに？どうやって？父さんもララサも。それにあの子馬にオオカミは？）

【待ってくれ、タバサ】

「待ちません！」

縋るように訴えてきたオオカミさんに、素気無く言い放ったのはララサである。

【ララサ。すまないがまだ話は済んでいない。タバサ？】

「あの、わたし・・・」

タバサは声が掠れた。

視線が絡み合う。

行かないでくれ、とオオカミさんが訴え乗せて煌かせる瞳はとても綺麗で。

（卑怯だよ、オオカミさん）

【タバサ！返事をくれないまま立ち去るなんて卑怯だとは思わないのか？】

「・・・・・・・・・・。」

だゝかゝらゝその台詞そのままお返しいたします！

相変らず脱力させてくれる。

タバサの責任感に加えて負けん気の強さに訴えているのだろうが、お門違いもいい所だ。

今後一切ロウニア家とは関わらない方が良いに違いない。

ふうとため息ひとつ付くと、タバサはきっぱりと言い放つべく息を吸い込んだ。

「お断り、」

いたします、と続くはずの言葉も突然遮られた。

「お嬢さん！！甥っ子がモノの言い方を知らなくてすまん！！見ちゃおれんぞ、ウォレス」

びっくりした。その存在を忘れていたからだ。

【伯父上。割り込まないで下さい】

「割りこみたくもなるわ！何でオマエはそんなに高慢ちきな物言いしか知らないんだ？俺は、俺は情けないぞ！女の子にはそんな言い方しちゃ駄目だ！」

「ギル。余計な事言うな。タバサは連れて帰る。こんな夜更けまで連れまわしやがって、後で覚悟しろよ？そのオオカミ兄弟共もだ！」

言いながら父はギルの胸元を掴み、狼たちを睨む。

「そうですよ。おっさん。私らもいい加減、帰りましょうよー」

眠いのであるうりぜが、あくびをかみ殺しつつ不機嫌そうに促がした。

「ええゝ……。もう帰っちゃうの？タバサちゃんも、ララサちゃ

んも、リゼライさんも」

危のうございます、と距離を置き、ダグレスの背に庇われていた
ディーナ嬢が寂しそうに訴えてきた。

”だそうだ。おまえら、もう少し残れ”

さすがディーナ様命のダグレス。

彼女の望み以外には何の配慮も無いらしい発言は、いつそ清々し
いとタバサは感心してしまった。

「おお！ディーナ嬢がそう仰るのならばこのギルムード、いくらで
も残りますぞ！」

「おっさんは早朝から稽古があるでしょ。歳、考えたらいかがです
？もうそんなに無茶も出来ないでしょうが」

「うつせえぞ！リゼ！！」

「何でそんな高慢ちきな言い方しかできないんですかねー？こちと
ら日常勤務に加えて、時間外労働にも付き合ってやってるのに。や
ってられないわ！」

じゃ！とリゼはさつさと背を向けた。

その翻ったローブの裾に縋ったのは、黒い獣のダグレスだった。

「放して」

””・・・・・・””

「いいぞ、ダグレス！」

「おっさんは黙ってて」

そんなやり取りが始まってしまった。

それを横目で眺めつつ、タバサは自分の裾を引いた手に振り返っ
た。

「タバサちゃんも、帰るの？」

ディーナ嬢だ。

美少女に上目使いで縋られて、思わずいいえと答えそうになった。

言葉に詰まるタバサである。

（ええと。そのルゼ様にもご挨拶していないし、でも、もう遅い時間だし！第一このドレスお返ししていないし、ど・どうしようっ）

あちこちで收拾が付かなくなったその時、空に澄んだいななきが響き渡った。

一同、その上空を見上げた。

少し離れた上空で様子を見守っていた子馬が、ゆっくりとタバサの目の前に降り立つ。

たてがみは緩く波うつセピア色で、瞳はきらきら輝く紫水晶のような美しい子馬だった。

『ねえ、タバサちゃん。タバサちゃんはどうしたいのかしら？』

しゃらしゃらと細かな鈴が束で鳴るかのような声が、そう尋ねてきた。

『おうちに帰る？それとも、紅孔雀様のところでお呼ばれする？それとも・・・それとも、ねえ。乙女役を引き受けて一緒に神殿に来てくれる？私たちと一緒に』

『私たち？』

『ウォレスとウォレーン。ギルムードとリゼライ。それに、わたし』

『お馬さん？』

『そうよ、タバサちゃん』

優しく頬にすり寄られて、タバサは子馬を抱きしめた。

『ララサちゃんも、どう？』

『おまえ、それは卑怯だぞ！』

『ルボルグは黙ってて。いつも二人といられるくせに。ずるいのはどっちよ！そんな事言われる覚えなんてないんだからね！』

「うわ。ルボルグ、尻にしかれてるな」

『ギルムードも黙ってて。後で巫女王様にご報告に上がるからね？』
はい。黙ります！とばかりに、ぴたりと二人は仲良く口を閉じる。

ディーナ嬢もさることながら、このお馬サマも最強に違いないとタバサは思った。

はい。とてもつつこみたいところなんですけど？

何か、こう。ナンカネエ？

どうしたいんだって、選択を迫られてもですね……どうしろと？

要は誰の手を取るのかと尋ねられているのだ。

このお馬様にまたがって登場の、あくまで身内の『騎士さま』か。
この黒才オカミを従えた同じく身内の『自分の片割れ』も含めて。
赤い髪が魅力的な美少女参謀殿……と、その一味か。

ハッキリ言って論外もいい所の、このオオカミさんのおじ様はま
ず真っ先に消去。

その相棒と言ったら確実に怒るであろう、リゼさんは面白そうだ
から割と好きだが。

全ての事の元凶とも言えるオオカミさんを筆頭にした、神殿の皆

様方か。

何やら選択肢に入れるのに、やたらと身体が強張るんですが。拒否反応ってモノでしょうかね？

【タバサ。俺の言い方が悪かった、すまない。君にどうしても引き受けて欲しくて。焦るあまり、乱暴だった。改めてお願いする。どうか春の乙女役を引き受けてくれないだろうか？】

神妙に頭を下げ下げ、オオカミさんはやたらに素直に詫びてきた。それにもまたタバサの身体は強張った。

「俺からも甥っ子を頼むよ、お嬢さん」

「黙れ、ギルムード！いいや。駄目だ駄目だ駄目だ！タバサ、帰ろう。おいで！」

『ルボルグは黙っててよ！タバサちゃん、一緒にお祭りに参加しましょう？ラサちゃんも一緒に』

「お祭りの乙女役をタバサちゃんがやるなら、きつと楽しいでしょうねえ。一緒に衣装を選びたいわ」

” ” それはいいですね、嬢様。タバサ、うんと言え。引き受ける” ”

「もう！みんな好き勝手な事ばかり！タバサちゃんは疲れているんだから、ちよつとは考えてあげて下さい。ウォレーンも何とか言ったらどうなの？」

【・・・・・・・・・・】

（ええと？どうしたら？）

途方にくれるタバサの肩に、孔雀が舞い降りた。ぽん、と軽く気遣うように。

「ッウオランだろうか。ヨウランだろうか。」

「黙ったままの孔雀では、タバサには区別がつかない。」

「」タバサ。春の乙女って何？」

「うん。なんだろうねえ」

「今さらだが、その一言に尽きる。」

「もう体力も気力も限界だった。」

「何も考えたくは無気持でいっぱいだ。」

「お嬢さん、愛されてるわねえ」

「同情するわ、となぜかりぜに呟かれてしまったタバサである。」

レシピ * 30 * 祭典前のお祭り騒ぎ（後書き）

『何と申し上げていいやら。』

お久しぶりでございます。

どたばたラブコメデーが書きたいぞ、と思って始めたのですが、まとまらないじゃ済まない。

この色んな人が集まって何かをしようとする時独特のまとまらなさは、体育祭とか文化祭とかの放課後の雰囲気でしょうかね。

みんなそれぞれ好き勝手言うからまとまらないのだ。

そこに一喝いれるのは誰でしょう？

がんばれ、ウオレス！

二人きりになりたいのなら！！

レシピ * 31 * 祭典前から浮かれる人達（前書き）

二ヶ月ぶりですね！

一ヶ月以上間を空けてはならないだろう・・・。

自分目標 → 。

いよつし決めた！タバサ、ララサ。ここを俺たちの隠れ家にしようぜ！

——いいね！うん、いいね！ル力兄^{にい}！

オトナには内緒な

——もちろん！何だか楽しいね。わくわくする！

じゃ、早速活動しよーぜ。俺、店に戻ってタリム連れてくるわ。

——私たち、お菓子と飲み物を取ってくるね！

タバサは答えなければならぬのだと、ようやく混乱した頭で判断付けた。

ここではつきり意思表示しなければ、解放はまずありえないだろう。

（いや、もう何回も何回も何回もお断りしてきたんですけどね？）
ちら、とオオカミさんを見れば前足をお行儀良く揃えながらも、小さく足踏みしていた。

（あうう！）

タバサは内心そのもじもじした様子に身もだえした。
あまりにも可愛らしすぎて、うっかりほだされそうになる。危険

だ。

タバサは怯んだ。

『どうか春の乙女役に、そして俺をその騎士と任命しておくれ』

どうか、どうか、うんと言ってくれと、祈りにも似た気持ちで見られる視線は熱い。

どうにも頬が火照って仕方がない。

そのセリフを何度も何度も、しかも人前であろうとなかろうと言いつけるオオカミさんに、今更ながら赤面ものだと思ひ当たる。

（どうせ・・・お断りします、って言っても聞かないくせに）

ふんだ、と異常に火照る頬を背けてみれば、また別の種類の熱を感じる。

『祭典のお手伝いをしてくれる？ ララサちゃんと一緒に！』

かわいい子馬だ。でも言う事なすことはオトナ。でも可愛い！
ものすごく可愛くて神秘的な生き物が、きらつきらした瞳でタバサを見つめている。

期待に満ち満ちた紫の瞳は深く、それでいて澄んで輝き放っているかのように見える。

よく見慣れたララサとも、自分の眼差しともまた少し違うけれども、妙に心地よくてそれでいてくすぐったい。

タバサの心は揺れ動いた。

同時に頭の中で、売り子と乙女を両立できないものかという算段を試してみた。

どう頑張っても無理である。

祭典の日は朝から大忙しだ。だから手伝いはもちろん無理だ。それなのにこの瞳を曇らせたくない、と思ってしまうのだ。そのために言葉に詰まる。

父さん、ララサ、どうしよう!?

そんな思いで二人に視線を向けたのだが、二人は揃ってタバサの事を静かに見つめ返すだけだった。

父は腕を組んで少し眉根を寄せて、困ったようなそれでいて諦めたような表情を見せている。

姉は傍らのオオカミの首を横抱きにして、無表情のままだ。

その瞳だけがタバサの動向を見守っている。

自分で決める、という事なのだろう。

それはすなわち、タバサの好きにしていんだよという事に他ならない。

ララサ辺りはタバサの取り決めに倣うつもりだろう。

タバサに注ぐ熱い期待に、様々な想いがのしかかって来て押し潰されてしまいそうだ。

何だかまた泣けてきた――。

恥ずかしいのだ。たまらなく。

こんなに一度に、人様に見守られてタバサは言葉がなかなか出てこないのだ。

麻痺してしまったい言葉も、言うべき言葉も見つからない。だから黙り込んでしまふ。早くしなくちゃと自分自身でも焦ってしまう。

焦れば焦るほど、胸でつかえてしまふ。

タバサはぎゅ、と胸元と咽喉元をそれぞれ両手で握り締めていた。瞳も固く閉じると、せつかく遮断したにも関わらず浮かぶのは蜂

蜜キャンデーの熱い眼差し。

蕩けそうな、蕩けさせられてしまつかもしれない、と思わせる瞳が怖い。

早く早くと返事を急かし、それをなじるオオカミさんの物言いと視線にも、いたく傷つく自分が嫌になってきていた。

” タバサ ”

優しく頭を小突かれて、気が付けば白いふわふわの毛並がもつぷりと身を寄せてきてくれていた。

暖かい。少しだけ緊張がほぐれる。

” タバサ、守る ”

” タバサ、攫う ”

” タバサ、泣いてる ”

” タバサ、守る ”

” タバサ、攫う ”

二頭は互いに顔を見合わせては、交互に言葉を交し合っている。その間にも慰めてくれるかのように、二頭は身体を押し付けてくる。

” タバサ、泣いてるから守る ”

” タバサ、守るから攫う ”

” タバサ、守るために攫う ”

そう言葉を交わしあった後、二頭はうなずき合ったようだった。さっさとタバサを一頭の背に鼻先だけで押し上げると、あとは一

目散に駆け出していた。

ねえ、リゼライ。紅孔雀。『シャルザム』と『アクリム』の
様子が
おかしいわ。

そんな子馬の眩きですら、タバサにはとうに彼方だった。

（またですか！？また、この展開ですかあ——！！）

攫われるのは日に一度までにしていただきたい。

いや、一生に一度だってあつてはならんでしょうよとタバサは叫んだ。

ちゃんと叫べた自信は無いが。

駆け出した白ふわの獣様の背に揺られながら、振り落とされないようにするだけでも精一杯である。

かつての術の主人のお馬サマに、今こころの手綱を持つリゼ。加えて見境無く獣とあれば魅了してしまう『紅孔雀』の存在。そこにタバサと言う存在。

色々な意味合いを持つ3人の術者が『こだわっている』タバサは、ある意味一番の優先せれるべき存在となったようだ。

「リゼ。オマエ何やったんだ」

後を追うためにいち早く駆け出した、甥っ子の後姿はもう闇に溶けて見えない。

かつての同僚とその娘、もう一人の甥っ子もそれに続く。

子馬の姿の現同僚も楽しそうにいないから、一瞥くれて空を駆け出して行ってしまった。

「今は」リゼが暴走したようにも見える、彼らの手綱の持ち主だったはずだ。

ギルムードは無表情を装う小柄な部下を見下ろした。咎めると言うよりも、確認を取ろうとしてだ。

悔しいがこの娘の方が術者としては長けている。

さり気なさを装いつつも、リゼライはいつだって誰かの世話をする。

その性格的に保護者体質なのだ。

父親を亡くした後、弟妹と母を支える長女にギルムードはこつそりと敬意を払っている。

自分にも姉という存在がいるだけに、ギルムードは姉という生き物にはどこか敵わないとも思っている。

何だかんだと面倒見がよく、能率や効率にこだわる割りに、己の事に関してはあまり要領が良いとは思えない行動をする所など実姉にそっくりなのだ。

この娘は、ぶつくさ言いながらもギルムードのばかげたお遊びにも付き合ってくれる。

あくまで報酬付きの時間外労働という形で。

だから名目上、ギルムードはリゼライの雇い主としてわがままを通せるのだ。

それはかつて、ギルムードの獣でいてくれたダグレスも同じらしい。

こちらは無関心を装いながらも、その耳はしっかりとこちらに敬やてられているのを見逃さない。

その事も興味深くはあった。

だから問い掛けるのをやめない。

その答えにかの誇り高き獣はどう反応するのだろうか。

（それに、俺自身もだ）

「リゼ？おまえは何やったんだ？」

「別に何も」

「だったら何で嬢ちゃん、かつ攫われるんだ？あのシャルザムとアクリムに」

「ですから別段何もいたしておりません」

シラを切りとおす姿勢のリゼライに、シビレを切らしかけたギルムードは内心（俺はオトナ。オトナの男。しかも上司）と呪文を繰り返していた。

これ以上しつこくすると、かなりの確率でリゼライが本気で怒り出すだろう。

そうになったらなったで男の（つまらない）プライドが、リゼライを部下としてやり込めてしまうだろう。

要は権力をかざして上からモノを言い、自分の良い様にリゼライを扱うのだ。

どうしたってその後味の悪さを何度も体験しておきながら、今また同じ轍を踏もうとしている己にも気が付いている。

気が付いてはいるのだが、制止はかなわないのも把握済みだ。

甥っ子のやり方を見ていて居たたまれなくなりアレコレ口出ししたが、恐らく今の状態を甥っ子に見られれば、同じようにアレコレ口出しされるだろう。

だが知りたい。

だいたいの察しは付いているが、リゼライの口から語って聞かせて欲しい。

何故、初対面の人の恋路にまで世話を焼いてやる気になったのか。最高に気になるではないか！

リゼライは巫女の中でも抜きん出て整った造作をした見てくれをしている。

強い光を放つ金髪が眩い。眩すぎて神々しいとまで、正直思ったこともあった。

それと揃いの眼差しは凜として涼やかだが、豊かなまつげがそれを縁取ってそりゃあ小憎らしいほどに、可愛らしいのも癪に障る。

小柄な割りに女らしい曲線を描く肢体は、幼いようできて妖艶な危うい色香を醸し出している。

（ヤツは無関心を装っているようだがダグレスも、ありゃあ魅了されてると思うぞ？）

身体的な特徴以外にも、彼女の誠実な言葉使いや仕草はすごい評判が良い。

一見冷たく事務的なようでいて、実は親しみ安かったりもする。誰にも変わらぬ態度で分け隔てなく接するからだ。

駄目なものはダメ。良い物はいい。そんな筋の通った姿勢はこちらが怯むほど。

何せこのギルムードにさえ、齒に衣着せぬ物言いをするのだ。

その無礼とも取れる態度に最初は憤慨したギルムード自身でさえ、それが誠実さの現われだと理解するのにそんなに時間は掛からなかった。

彼女は媚びずにまっすぐに切り込んで来てくれる、貴重な存在だった。たりもする。

今まで巫女王の実弟であるギルムードに、真っ向から意見するものはいなかったのだ。

希薄な人間関係しか築いていない結果がこれだと、ギルムードは思い当たった次第である。

（まあ、人気あるんだよなーコイツ。にも関わらず、自覚無しってヤツだしな）

しかもスキも無い。可愛げのない事だ、とギルムードは少しだけむっとした。

『リッゼ！おまえ、祭典の日はどう過ごすんだ？』

さり気なく聞いてみた。

『仕事です』

『わかってるよ！そうだが、何もその日まるまる詰める訳じゃないだろう？交代で祭典を見学していると、許可が出ているんだからな』
『見学くらいはそりゃ、しますけど？』

予想通り返事は素っ気無かった。

『そうじゃなくてだなーおまえは！わからんヤツだな、察しろよ！おまえと祭典に落ち合いたくて仕方が無い騎士団のヤロウの気持ち』
を』

それにも関わらず、彼女自身に浮ついた所は一切見受けられず、明らかに自分とは関わり無い話だと言いだしかねない勢いなのだ。

『ええと？ワタシに何を察しろと仰るのが、根本的によくわかり

ません』

部下の私情を覗き込もうとしてる暇があるなら、おっさん！さつさと仕事を終わらせたらいかがですか。

彼女の言葉を脳内で変換するとそのような意味に化ける。
うむ。間違いない。

ギルムードは『いい若いもんが、華を咲かせる前に枯れやがって！』という悪態を付いた。

もちろん罵倒は脳内に留め置いた。

これ以上くだらない事でいちやもんを付け続けると今後、最低一ヶ月は無駄口を利用してくれなくなると学習済みだからだ。

実際、そんな調子で撃退されたのも記憶に新しい。

だから、余計に気になって仕方が無い。

そんな好奇心を我ながら子供でしようもない、とギルムードは思った。

リゼライはギルムードの年齢から言えば、娘くらいの年と表現するのが相応しいのだろう。

独身のギルムードには娘と言われてもその感覚が解らないが、だからといって妹にしては無理がある。

彼女は可愛い。そして生意気で小憎たらしい。そして可愛い。

もちろん、一人の女性としてではなく部下としてだ。

リゼライが年頃の娘らしく、胸の奥底に秘めた相手がいるのならいくらでもお膳立てしてやりたい。

いないならいないで、その機会を作ってやりたいと思っている。

いらぬ世話だと解つてはいるが、その一人で家族のために奮闘する様を何とかしてやりたいと思うのが自然だろう。

彼女の支えとなる者が傍らにいれば完璧だ等とも思う。

稼ぎの良い頼りになる男性がいれば、リゼライも肩肘張って生きていかなくても良くなるだろう。

お互い腕を組んで、探るように睨みあった。

先に腕を解いたのはリゼライだった。

「ここで立ち話もなんですし」

そう切り出して、少し眠そうにリゼライは微笑んだ。

しょうがないですねえとでも言いたいような、微かな嘆息と共に紡がれた言葉にギルムードは惚けた。

きっとアレだ。

リゼライにしてみたら、自分は駄々をこねる弟と同じに見えているに違いない。

「ギルムード様。もう帰りましょうよ。そうしたらきちんとご報告いたしますから。ね？」

ギルムードは、やに下がりそうになる己の顔を引締めながら答えた。

「いいだろう。その代わり寢酒に付き合えよ」

「お酌くらいならしてあげない事ありませんよ。別料金で」

ダグレスは尾を一振りすると、不満そうにその場を蹴り上げる。

それがギルムードを何ともいえない優越感に浸してくれて、気分

が良かった。

レシピ * 31 * 祭典前から浮かれる人達（後書き）

『リゼライの計らい』

仮タイトルです。

やっと次回はメイン二人きりの、りりかるうゝあまずっぱいゝシーンだ！！

張り切れ、ワタシ。

実は（どうでもいいのはわかってます。）リゼライを巡る、おっさんと獣様を書くのが楽しいのです。

先々ものすごく出張ってくるシーンはもう書き溜まってる始末。

こんな調子ですが、お付き合いいただけたら光栄です。

レシピ * 32 * 気が付けば秘密の小部屋（前書き）

よしてきた！二人きり。

でもぜんねんれいたいしょうだから、ワタシ！

そんなにはりきれません（？）

はい、これ。

——何だ？

許可証に決まってるでしょ。確認できた？

——ああ。

今度またツマンナイことでタバサちゃんを泣かせたら引っぱたくからね。

——もう、引っぱたかれた後だが………。

当たり前じゃない！その度にぶったたくからね！

「うん……と、ここはどこかな？」

いい加減、この疑問を口にするのは飽きてきた。

飽きるとかどうとかいう問題ではないのは、解っている。

ひんやりとした感触が横たわる半身から伝わってきた。

残念ながら寝台の上では無さそうだ。

だからといって冷たいが、地べたでは無さそうだった。

身体にじんわりと忍び寄る冷たさに侵食されては敵わない。

タバサは両手を付いて、上半身を起こした。

辺りは真っ暗だった。

真の暗闇に怯んで、タバサは己をかき抱いた。

寒い。怖い。

それに一人きりだった。

先程まで大人数に囲まれていた分、心細さが嫌でも増す。

ひんやりとした床に直接、へたり込むようにタバサは腰を落ち着けていた。

より所だった白ふわちゃんたちの気配もない。

そうなのだ。

タバサはゆっくりと記憶を辿った。

駆けて駆けて、駆け抜けて——たどり着いたのは見覚えのある街並み。

そこですら駆け抜けて落ち着く頃には、タバサの意識は途切れがちだった。

重たくなる目蓋の向こうに垣間見たのは、眩い金の髪のリゼライとおじさま。

それに、連れ立って行ってしまった二頭だった。

他にも真っ黒い獣様ことダグレスの蹄も見えたような？

（行っちゃうの？）

ぬくもりを奪われた寂しさが、眼差しに現れていたであろうと思われる。

視界の端で薄情にも手を振って見せた、リゼライの手が白く浮かび上がって見えたのが最後だった。

それにしてもここはどこだろう？

暗闇に視界が慣れてきたとはいえ、頼れる程の月明かりでもない。静かに照らしてくれている月明かりに、今ようやくと気がつけたほどではない。

それでも無いよりはマシである。

それにこの空間の気配にいくらかなじみがあった。

ここは祭壇の裏手の秘密の小部屋だ。たぶん。

見渡してみても確信した。

季節ごとに出したりしまったりされるタペストリーと思しき影や、銀器が窺える。

静かに出番を待つて寝静まっている。

起きているのはタバサだけ。そんな感じだ。

見覚えのある収納にタバサは一息ついた。

「秘密」と言っても何も隠された地下室でも何でもないのだが。

単に子供の頃、秘密基地としてルカ兄とタリム、^{にい}ララサとタバサとで隠れてお菓子を食べたりした名残が今でも「秘密の」と呼んでしまう。

人気の無いここは子供たちの好奇心を大いに刺激してくれた。

普段は錠が掛けられていたが、そこはいたずらっこ達の抜け目無さというか。

いくらでも忍び込む手段はあった。

鍵の造りの甘い小窓や、風路として取られた隙間が子供たちには充分なスキだった。

ちよろい！ちよろい！

そんな風に苦勞して、こっそり入り込む秘密基地。

ある時どういうわけか、祭壇の裏側に回り込めばこちらに通じていたのを、当時のタバサたちは発見した。

すごい　すごい　すごい　秘密の通路だ！

むちゃくちゃドキドキした。

わくわくして楽しかった。

俺たち四人だけの秘密な！

リーダーのルカ兄の取り決めに無論、異論などあるはずも無かった。

わざわざ隠れてお菓子を食べながら、苦勞して運んだお茶を飲んだ。

ルカ兄とタリムには虫を持ち込むのは禁止だと告げたり、猫の子だったら良い等というのを大真面目に話し合った。

じゃあトカゲやクモは良いか。

猫の子ではなく、オトナの猫だったらどうするのか。

犬は？怪我をした小鳥なんかを保護したらどうするのか？

お互い家が食べ物を扱うからペットは諦めていただけあって、事細かく想像が膨らんだものだった。

お気に入りのお皿やクッションも持ち込んで、秘密基地らしく設えていったのを昨日の事のように覚えている。

他愛もない事を話し合って、くたびれたら寝転がった。

——よくこうやって天窓を見上げたものだ。

いつかは夜に集まってみたいね。

大人の目を盗んでベッドを抜け出すのはさぞや楽しかろう。

見つかったら間違はなくこっぴどく叱られるのが目に見えているが、そこがまたちよつとした冒険心を煽った。

どうしよう どうしよう どうする!?

いつにする?

何をする?

皆口々に言いあって、その場で跳ねた。

けれども実行には移さなかった。

リーダーのルカ兄の一言が決め手となったのだ。

『オトナの目からは隠れるが心配は掛けない事』

さすがみんなのリーダーだ。

感心したがつまらない、ともタバサは思った。

そんな風に、商売の手伝いが終わる夕刻に集まるのが決まり。

晩飯前には帰ること。

そう。あの日までそれは続いたのだった。

タバサは懐かしく思い出しながらも、少しだけ肩をすくめた。

『ここで何をしている！』

あの少年だった。

黒髪で蜂蜜色の瞳の、タバサにいつも文句をつけてくる護衛団の彼。

タバサは思わずルカ兄の背に隠れた。
怖かった。

その少し前に『広場で商いするのなら許可証を持っているハズだ』と、言われたばかりだったからだ。

そんな物が必用だとはタバサは知らなかった。

そう素直に答えたら、持っていないならここで商いするのは違法だと告げられたのだ。

違法。

まるで自分が罪びとになってしまったかのようで悲しくて、泣きながら帰って父に尋ねた。

父さんは大丈夫だ、と言うと許可証を引っ張り出してきてくれた。だからといって取って返して、再び少年の前に立つのは躊躇われた。

その日からタバサは商店街を回るようにしてもらい、広場での商いはララサを頼った。

怖かった。

護衛団の制服をきちんと着込み、腰には剣を下げている彼に何か言われる度、怖くて仕方なかった。

だから広場には近付かないようにしたのだ。

少年には会いたくなかったが、でも他の皆には会いたい。
だからこうやって、夕刻に忍んできては皆に会うのが楽しみだったのに。

『別に。皆で集まって菓子を食ってるだけだけど？』

何故かタバサを睨みつけている彼に、ルカ兄がしれっと答えてくれた。

『誰の許可を取って勝手な事をしてるんだ？ここは関係者以外は立ち入り禁止だ、タバサ』

怖い！

みんなで一緒にお菓子を食べていただけ。

それすらも見咎められてしまった。

タバサは泣きながら皆に謝った。

どうやらこの少年はタバサを目の仇にしているらしい、というのが解ったからだ。

過ぎ去ってしまえばそんなに大泣きする事でもなかった気がするが、当時はものすごく哀しかった。

この世の終わりだ、くらいの勢いだった。

（あの後、どうしたんだっけ？）

ぼんやりとタバサは思考をめぐらせていた。

皆が口々に少年を責めて、タバサを慰めてくれたのは覚えている。それから。それから？

それから少年とは会っていない。見かけてもいない。

すごくほつとしたのと同時に、何だかすつきりしないなと思ったのは覚えている。

ガタンと大きく音がして、そこで思考は断ち切られる。

驚いて振り返る間もなくタバサは身動きが取れなくなっていた。

まっ暗闇の中、急に抱き締められたのだ。

しかも背後から。

それまで人の気配はしなかったから、余計に驚いた。

「きゃ・・・っ！」

「タバサ！」

「父さん・・・？ううん、ル力兄^{にい}？」

言いながらも、どちらとも違う事は解っていた。

それでもそう呼んでしまったのは、そうあって欲しいという願いからだ。

そうでなければ怖すぎる。

タバサはその腕にすがった。

自分の露出した腕に触れる布地は固くこわごわしていて、タバサが今着ているドレスとは対極にあるような頑丈さだった。

それに包まれている彼の体の造り自体も、タバサとは対極にあるだろう。

暗闇の中タバサの輪郭を確かめるように探る、厚みのある手のひらの動きは荒々しい。

どうやら、苛立っているらしいのが伝わってくる。

「違う」

返る言葉もどこか不機嫌に告げてきた。

それだけではなく、遠慮なく腕をタバサに絡ませてくるのだ。

タバサは息を飲むしかない。

怖い。怖い。怖い。

じゃあ誰なの。

どうして怒った声を出すの。

嫌だ。怖い。

「タバサ・・・すまなかった」

耳元で詫びられた事で、タバサの心臓が先程とは違った調子で早鐘を打ち始めた。

タバサは腕から逃れようと、震えながら身を振ったが敵わない。もどかしそうにその抵抗を封じながら、彼はタバサを柔らかく抱き込んだままだ。

「オオカミ、さん？」

そうであって欲しいような。

そうであって欲しくないような。

そうだと言われたら、どうしたらいいかわからない。

そうではないと言われても、どうしたらいいのかわからないが。

そんなタバサの戸惑いを読み取ってくれたのか、答えは返らなかった。

ただ、ますます強くぎゅっとされた。

レシピ * 32 * 気が付けば秘密の小部屋（後書き）

『いいかげん神殿』

保存用につける解りやすい仮タイトルです。

何もいいかげんな神殿まえとかいう、おざなりな意味ではなく、

いいかげんに終わりに持っていこうやの意味合いと、

良い加減を見誤らずに続き書こうな！ワタシよ！という意味合いです。

お付き合いありがとうございます！！

暗がり二人きりというサーヴィス満点ぶりに、次回も張り切って行こうと思います。

程ほどに。

レシピ * 33 * いつまでも平行線の二人（前書き）

むむ。

どちらも手ごわい。

レシピ * 33 * いつまでも平行線の二人

―― よお？

何だ。

―― 俺はル力だ。知ってるだろ？

ああ。

―― ちびっこはあんまり構いすぎるな。逆効果だから。

何？

―― それだけじゃあな～！

「タバサ」

ようやくその無事を確信できて心から安堵する。
それなのに。

「ル力兄？」

その名を呼ばれて、信じられないくらい腹が立った。

「違う」

責めるようにぶっきらぼうに言い放てば、タバサの身体が震え出した。

「オオカミさん？」

違いないが違う。

「ウォレス、だ」

タバサの身体が強張ったのが解った。
無性に腹が立つ。

追いかけると少女はいつも逃げかわすのだ。
いつも頼るのは幼馴染達で、自分には見向きもしない。

そんな苛立ちから少年は実に子供じみた行動で、少女の気を引こうとしたのだ。

例えばそれが一時のものであっても、自分だけを見てくれている。思考をいつぱいにしてくれているのが嬉しかった。

実に子供だった。

そんな事をして、完璧なまでに避けられるだけだと気が付く頃には何もかもが遅かった。

それからの彼は変わろうと努力してきた。
時間と苦い経験を味方にして、自分は変わった気でいたのに。

「タバサ」

「嫌」

「タバサ、すまない」

後ろから手を回され、胸のすぐ下と腰回りをがっちり固定されている。

それがどれほど恐ろしいか。

この彼にはわかるまい。

しかも左の首筋を伝って項に顔をうずめられている。

彼の吐息も体温も近すぎる。

しかも暗闇の中とあって視界が限られるせいか、余計にそれだけに集中してしまう。

「嫌！」

「タバサ」

嫌だと言っているのに聞こえないのだろうか。

いや、聞く気が無いのか。

嫌だと訴えるたびに腕に力が込められて行く。

押し返してもびくともしない頑丈さに慄きながらも、毅然と振舞うよう意識して声を出した。

「もう放して下さい。わたし、イキナリこんな事されるの嫌です！」
「すまない」

「本当にそう思ってるのなら放してったら！」

「嫌だ」

「~~~~もうつ!!」

タバサは何とか自由な足をバタつかせてもみたが、腕に込められた力はちつとも緩んではくれなかった。

「タバサ、無事で本当に良かった」

「・・・おかげ様で」

元はといえば、この彼のせいのような気がしなくてもないが。そう思うせいか言葉にややトゲがあり、皮肉っぽく響いた。しかし彼は気にも留めていないようで、ずっとタバサの耳元で無事を喜ぶ安堵の言葉を呟き続けている。

「タバサを攫われて寿命が縮まった」

「それを言うならわたしの方こそ、縮まりましたよ！ええ！確実に」
「本当に悪かった。守れなかった」

「いいですよ、もう。気にしないで下さい」

「いいや。一生気にする」

「ええ？そんなに気にしないで下さいよ！そんな事言われたら、わたしの方が気になるじゃないですか」

「うん。そうしてくれ」

「何ゆえですかっ!？」

埒が明かないとは正にこのことなのかもしれない、とタバサは唸った。

要は彼はこうする事で、タバサの無事を確かめて安心しているのかもしれない。

だったら彼の気の済むまでこうしているより他にあるまい。
・・・他に選択肢は無いのが何ともはや。

「オオカミさ〜ん？そろそろいいですか？気が済みましたか〜？」
「……………」

無言でぎゅうつと抱き返された。
それが答えという事か。

「オオカミさ〜ん、カンベンして下さいよ、もう。わたし、くたびれました。それに眠たいです」

眠いというより脱力感が酷くて、身体が辛いのだ。

可能ならば、今すぐにだって横になりたいくらいだ。

「オオカミ、じゃない」

「隊長さん？」

「違う」

「……………」

出ましたよ、駄々っ子。

諦めにも似た気持で、ため息と共にその名を呼んだ。

「ウオレスさま」

「様はいらない」

「必要不可欠です」

「タバサ」

「何ですか」

「いいかげん返事を聞かせてくれないか？」

「お返事なら最初からもう済ませておりますが」

「聞いていない」

「ひどいです」

「何とでも。どうか春の乙女役を引き受けてくれ」

「ですから、他を当たって下さい」

「嫌だ」

「わ、わたしがうんと言うまでこの拘束は続くんでしょうか？」

「うん」

「ご勘弁願います」

何の根競べでしょうか。

負けたくは無いが負けそうな自分が嫌だな、とタバサは思った。

既に疲労のためか、頷いてしまいそうになる自分がいるのもまた確かなのだ。

しかしそれもどうかと思うので、もう少し粘ろうとも思う。

「オオカミ、さん。オオカミさん、ですよ？えっと、今は人の姿ですけれどもツヤピカ毛並のオオカミさんですよ？」

上手く言葉が紡げないままに尋ねた。

「そうだよ」

「さつき、ララサと一緒にいたオオカミは、ウォレーン？」

「そうだ」

「どちらが本当のオオカミさんの？」

「どちらもウォレスだよ、タバサ。気味が悪い？」

「いいえ」

すぐさま答えたら、横頭に頬を押し当てられたようだった。
首が大きく傾いで肩にくっつきそうになる。

「ありがとう」

「・・・どういたしました？あの、オオカミさんは変身できるって
事ですよ？」

「そうだよ。ロウニア家の獣筋と呼ばれている。一族の中でまれに
この力を授かる者が出るんだ。そう遠くも無い先祖に、間違いなく
獣の血が入っているからね」

「獣の血ってダグレス様のようなの？」

「そうかもしれないね」

「だから変身できるのですか？」

「そうだよ。なってみせようか？」

「オオカミさんに!？」

すごい。

タバサは素直に感動したから、彼の笑い声は何故こうもいたずら
っぽく響くのか何て気にならなかった。

レシピ * 33 * いつまでも平行線の二人（後書き）

張り切った割には未消化です。

ぷっしゅう〜。

タバサは疲れきっているし、ウオレスもとりあえず安心しちゃって
まったり。

このままタバサにべったりでいたいらしい。

引き剥がせなかったです。

タバサ、それはちつと固めだけど背もたれつきの椅子と思うといい
よ。うん。

そんな風に思っていたら、オオカミめ！

——そんな 次回です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7827d/>

神殿まえ広場 * 春の祭典 *

2011年10月4日12時27分発行